



Journal of the Heat Transfer Society of Japan

ISSN 1344-8692 Vol. 63, No. 264 2024. 7



◆特集:熱輸送のスペクトル

https://www.htsj.or.jp/journals/2319.html



電子キャリアとホールキャリアにおけるエネル ギー緩和レート(特集記事「第一原理計算による電 子フォノン相互作用の精密解析とジュール熱発生 素過程への応用(南谷英美)」より)



固体−液体界面における熱流束の二次元分布(特 集記事「単原子スケール非平衡熱輸送場の分子動力 学解析(藤原邦夫)」より)



フォノンの生成・消滅比を用いた温度計測の実証実 験の一例(特集記事「単色化電子顕微鏡を用いたフ ォノン計測(吉川純)」より)







原子コラムの配列の乱れを含む視野の高角度環状 暗視野走査透過電子顕微鏡像の一例(特集記事「酸 化チタン自然超格子結晶の熱輸送特性(原田俊太)」 より)

No. 264

2024

July

伝 熱

目 次

〈巻頭グラビア〉

吉川 純 (物質・材料研究機構)

原田 俊太(名古屋大学)

- 南谷 英美 (大阪大学)
- 藤原 邦夫(大阪大学) ………表紙裏

〈新旧会長挨拶〉

第62	期を振り返って	ーカーボンニュー	トラルと伝熱学会―			
			平井	秀一郎	(東京工業大学)	 1
第 63	期会長就任にあ	たって	须	賀 一彦	(大阪公立大学)	 2

〈第 36 回日本伝熱学会賞〉

	第 62 期(2023 年度)表彰選考委員会 報告
3	表彰選考委員会 委員長 鈴木 洋 (神戸大学)
	日本伝熱学会学術賞を受賞して小宮 敦樹 (東北大学),
5	古川 琢磨(八戸工業高等専門学校), Juan F. Torres(ANU)
	日本伝熱学会学術賞を受賞して李 敏赫, 柳 炅勳, 鈴木 雄二 (東京大学)
	日本伝熱学会技術賞を受賞して平沢 浩一, 有賀 善紀 (KOA),
7	」国峯 尚樹(サーマルデザインラボ)
	日本伝熱学会技術賞を受賞して
	浅川 一樹(JFE スチール株式会社)
	日本伝熱学会登鯉賞を受賞して志賀 拓麿 (産業技術総合研究所)
10	日本伝熱学会登鯉賞を受賞して岸本 将史 (京都大学)
12	日本伝熱学会登鯉賞を受賞してスルブリス ドナタス (東北大学)
13	日本伝熱学会奨励賞を受賞してアリザデ メヘルザード (大阪大学)
15	日本伝熱学会奨励賞を受賞して榎本 陸(東京工業大学)

〈第 61 回日本伝熱シンポジウム〉

第61回日本伝熱シンポジウムの報告 津島 将司 (大阪大学), 岩井 裕 (京都大学), 西田 耕介 (京都工芸繊維大学), 小澤 守, 小田 豊 (関西大学), 木村 文義, 河南 治 (兵庫県立大学), 日出間 るり (名古屋大学), 服部 博文 (名古屋工業大学), 須賀 一彦 (大阪公立大学), 店橋 護, 加藤 之貴 (東京工業大学), 中村 元 (防衛大学), 岩本 薫, 田川 義之 (東京農工大学), 服部 康男 (電力中央研究所), 塚原 降裕 (東京理科大学), 鹿園 直毅, ムテルデゥ ティモテ, イ エリム, 塩見 淳一郎, 鈴木 雄二, 白樫 了 (東京大学), 能村 貴宏, 田部 豊 (北海道大学), 中曽 浩一, 山田 寛 (岡山大学), 江目 宏樹 (山形大学), 宮崎 康次, 伊藤 衡平, 藏田 耕作 (九州大学), 櫻井 篤 (新潟大学), 春木 将司 (金沢大学), 小糸 康志 (熊本大学), 松川 嘉也, 徳増 崇 (東北大学), 荒木 拓人 (横浜国立大学), 勝身 俊之, 佐藤 大輔 (長岡技術科学大学), 西 剛伺 (足利大学), 小泉 雄大 (ナブテスコ (株)), 近藤 義広 ((株) 日立アカデミー), 春木 直人 (岡山県立大学) ……… 16 優秀プレゼンテーション賞 受賞者 - 第61回日本伝熱シンポジウム -

〈特集:熱輸送のスペクトル〉

) 33	特集「熱輸送のスペクトル学的理解」にあたって 志賀 拓麿 (産業技術総合研究所)
)	単色化電子顕微鏡を用いたフォノン計測吉川 純 (物質・材料研究機構)
) 40	酸化チタン自然超格子結晶の熱輸送特性原田 俊太 (名古屋大学)
	第一原理計算による電子フォノン相互作用の精密解析とジュール熱発生素過程への応用
) 46	
) 53	単原子スケール非平衡熱輸送場の分子動力学解析藤原 邦夫 (大阪大学)

〈行事カレンダー〉 59

〈お知らせ〉

公益社団法人日本伝熱学会第 62 期(2023 年度)総会議事録 60
2024 年度 日本伝熱学会 学術賞・技術賞・貢献賞・登鯉賞・奨励賞候補者推薦募集のお知らせ… 62
日本伝熱学会 関西支部 主催 第 18 回関西伝熱セミナー
「グリーントランスフォーメーションとエネルギー技術」会告 63
編集出版部会からのお知らせ

Vol.63, No.264, July 2024

CONTENTS

<opening-page< th=""><th>e Gravure: heat-page ></th></opening-page<>	e Gravure: heat-page >
	Jun KIKKAWA (National Institute for Materials Science)
	Shunta HARADA (Nagoya University)
	Emi MINAMITANI (Osaka University)
	Kunio FUJIWARA (Osaka University) ······ Opening Page
<new and="" form<="" td=""><td>mer Presidents' Addresses ></td></new>	mer Presidents' Addresses >
Retirement Adre	ss as the 62nd President -Carbon Neutral and Heat Transfer Society of Japan-
	Shuichiro HIRAI (Tokyo Institute of Technology) 1
Inauguration Add	dress as the 63rd President
	Kazuhiko SUGA (Osaka Metropolitan University) 2
<the 36th="" hea<="" td=""><td>t Transfer Society Awards ></td></the>	t Transfer Society Awards >
Report from the	Award Selection Committee of the Heat Transfer Society of Japan, 2023
	Hiroshi SUZUKI (Kobe University)
On Receiving Sc	ientific Contribution Award of the Heat Transfer Society of Japan
	Atsuki KOMIYA (Tohoku University), Takuma KOGAWA (NIT, Hachinohe),
	Juan F. TORRES (ANU) 5
On Receiving Sc	ientific Contribution Award of the Heat Transfer Society of Japan
	Minhyeok LEE, Gyeonghun YOO, Yuji SUZUKI (The University of Tokyo)
On Receiving Te	chnical Achievement Award of the Heat Transfer Society of Japan
	Koichi HIRASAWA, Yoshinori ARUGA (KOA Corporation),
	Naoki KUNIMINE (Thermal Design Laboratory Co.,Ltd.)
On Receiving Te	chnical Achievement Award of the Heat Transfer Society of Japan
	Tomoyuki KAWASHIMA, Akihiro KOBAYASHI,
	Kazuki ASAKAWA (JFE Steel Corporation)
On Receiving To	ouri Award (Outstanding Young Researcher Award) of the Heat Transfer Society of Japan
	Takuma SHIGA (AIST) 9
On Receiving To	ouri Award (Outstanding Young Researcher Award) of the Heat Transfer Society of Japan
	Masashi KISHIMOTO (Kyoto University) 10
On Receiving To	ouri Award (Outstanding Young Researcher Award) of the Heat Transfer Society of Japan
	Donatas Surblys (Tohoku University) 12
On Receiving Yo	oung Researcher Award of the Heat Transfer Society of Japan
	Mehrzad ALIZADEH (Osaka University) 13
On Receiving Yo	oung Researcher Award of the Heat Transfer Society of Japan
	Riku ENOMOTO (Tokyo Institute of Technology) 15

< The 61st National Heat Transfer Symposium of Japan>

Report on the 61st National Heat Transfer Symposium of Japan

Hiroshi SUZUKI, Hideki MURAKAWA, Yoshiyuki KOMODA (Kobe University),	
Shohji TSUSHIMA (Osaka University), Hiroshi IWAI (Kyoto University),	
Kosuke NISHIDA (Kyoto Institute of Technology), Mamoru OZAWA, Yutaka ODA	
(Kansai University), Fumiyoshi KIMURA, Osamu KAWANAMI (University of Hyogo),
Ruri HIDEMA (Nagoya University), Hirofumi HATTORI (Nagoya Institute of Technol Kazuhiko SUGA (Osaka Metropolitan University), Mamoru TANAHASHI, Yukitaka K (Tokyo Institute of Technology), Hajime NAKAMURA (National Defense Academy),	logy), LATO
Kaoru IWAMOTO, Yoshiyuki TAGAWA (Tokyo University of Agriculture and Techno	logy),
Yasuo HATTORI (Center Research Institute of Electric Power Industry),	
Takahiro TSUKAHARA (Tokyo University of Science), Naoki SHIKAZONO,	
Timothée MOUTERDE, Yaerim LEE, Junichiro SHIOMI, Yuji SUZUKI,	
Ryo SHIRAKASHI (The University of Tokyo), Takahiro NOMURA,	
Yutaka TABE (Hokkaido University), Koichi NAKASO, Yutaka YAMADA (Okayama	University),
Hiroki GONOME (Yamagata University), Koji MIYAZAKI, Kohei ITO, Kosaku KUR (Kyushu University), Atsushi SAKURAI (Niigata University), Masashi HARUKI (Kar University), Yasushi KOITO (Kumamoto University), Yoshiya MATSUKAWA,	ATA 1azawa
Takashi TOKUMASU (Tohoku University), Takuto ARAKI (Yokohama National Univ Toshiyuki KATSUMI, Daisuke SATO (Nagaoka University of Technology), Koji NISH University), Katsuhiro KOIZUMI (Nabtesuko Co.),	ersity), II (Ashikaga
Yoshihiro KONDO (Hitachi Academy Co., Ltd.), Naoto HARUKI (Okayama Prefectur University)	al
Best Presentation Award – 61st National Heat Transfer Symposium of Japan - Ai UENO (Nagoya University)	32
<special energy="" for="" issue:="" science="" spectral="" thermal="" transport=""></special>	
Preface to "Thermal Science for Spectral Energy Transport"	
Takuma SHIGA (AIST)	33
Phonon Measurements Using a Monochromated Electron Microscope	
Jun KIKKAWA (National Institute for Materials Science)	
Thermal Conduction in Titanium Oxide Natural Superlattices	
Shunta HARADA (Nagoya University)	40
Ab Initio Analysis of Electron-phonon Coupling and Its Application for Initial Process of Joule Heating Emi MINAMITANI (Osaka University)	
Non-equilibrium Thermal Transport at Single-atom Scale based on Molecular Dynamics Method	
Kunio FUJIWARA (Osaka University)	53
<calendar></calendar>	
<announcements></announcements>	60
<note board="" editorial="" from="" jhtsj="" the=""></note>	

第 62 期を振り返って ーカーボンニュートラルと伝熱学会— Retirement Address as the 62nd President -Carbon Neutral and Heat Transfer Society of Japan-



平井 秀一郎 (東工大) Shuichiro HIRAI (Tokyo Institute of Technology) e-mail: hirai.s.aa@m.titech.ac.jp

日本伝熱学会は 60 年以上の歴史があり,現在, 誰もが知っている CO₂ とか,地球温暖化という言 葉さえなかったころに設立されている.現在,企業 では,カーボンニュートラル(以下,CN)について の活動が極めて活発で,CN という部署が,最初は, "室" から始まったのが,"部門","事業部"へと 拡大しているという話も聞いている.熱が発生し, 伝わっていく伝熱は,ほとんどすべての機器で見ら れ,この機器の効率が高ければ高いほど CO₂の排 出は少なくなる.日本伝熱学会の,多くの研究が CN と関係づいている.

しかし、本学会のホームページを見ても、この学 会の活動、すなわち会員各位の研究が、CN にどの ように貢献しているのかが見えてこない、会員各位 の伝熱研究と CN を紐づけしようとするとき、その 中間的な位置づけに、伝熱シンポのセッションがあ ると思った. CN 対策技術と、伝熱シンポのセッシ ョンがどのような関係にあるのか、1 枚の絵にまと めたのが図1である. ▶印にあるシンポのセッショ ンを,関連する温暖化対策技術の絵に配置した.そ の配置に関して,少々強引なところがあることをご 容赦いただきたい.近い将来,ホームページ上で, この絵のセッションをクリックすると,会員各位が 行っている研究活動の紹介に飛ぶようになる予定 である.

このようなことは、本来であれば企画部会の中で 立ち上げるるべきであった.しかし、時間がなく自 分で絵を書き、12月の第3回理事会で、"その他"の 議題でとりあげてもらって、年があけてから広報委 員長櫻井先生にセッションの代表者に、セッション を構成する会員に研究紹介の絵を集めてもらうこ とにした.何か新規で必要なことを立ち上げようと すると、会長の任期は1年では短すぎると感じ、会 長任期を2年まで可能なように致しました.

本来は最初に述べることです. 最後に第 61 回日 本伝熱シンポジウムをもって,会長を退任いたしま した. 理事の皆様, この1年間大変お世話になりま した. どうもありがとうございました.



図1 カーボンニュートラル対策技術と伝熱分野(ト伝熱シンポジウムのセッション名)

第 63 期会長就任にあたって Inauguration Address as the 63rd President



須賀 一彦 (大阪公立大学) Kazuhiko SUGA (Osaka Metropolitan University) e-mail: suga@omu.ac.jp

過日,神戸にて行われました第61回日本伝熱シンポジウムでの総会で,第63期会長を拝命いたしました大阪公立大学の須賀一彦です.会員の皆様,どうぞよろしくお願い申し上げます.

私と本会との関係は,私が京都大学工学部機械工 学科の卒業研究で佐藤 俊(さとう たかし)教授の 研究室を希望した時からのものです.本会の前身で ある日本伝熱研究会の発起人八名のおひとりで,第 16 期会長であった佐藤 俊先生や当時は同じ研究 室のまだ助教授でいらした第 38 期会長の鈴木健二 郎先生をはじめ,以来 42 年間にわたり多くの伝熱 学の先生方・先輩方にご指導を受けまして,伝熱研 究一筋にこれまでやって来ました.その恩返しも含 めて,学会運営に微力ながら尽力させていただこう という決意でおります.

現在,日本伝熱学会も他の理工系学会同様,会員 数の減少問題に直面しております. 会員数が減り続 けているため、これまでの運営システムでは、従来 のような形での学会活動が困難になってきている 状況です.いっぽうで、周知のように、現在我々は 地球温暖化による気候変動に直面し, 脱炭素の掛け 声のもと、喫緊の技術開発が求められています.こ の時代の要請に応えるため、今年の伝熱シンポでは 新たな試みの「IWSEC」と「水素・燃料電池・二次 電池」のセッションで,全日程にわたり活発な討論 が行われました. また, 他のセッションでもカーボ ンニュートラル, SDGs に関連した議論が多く行わ れたわけで、今も昔も変わらず、エネルギーに関し て地球規模で持続可能な社会を構築するために,伝 熱研究が非常に重要だと多くの研究者が認識して いる証左と言えます. それなのに会員が減っていく という、この矛盾はどこから来るのでしょうか.

持続可能な社会を構築するためのエネルギーの 有効利用といった、伝熱工学にとって不変とも言え るテーマを続けることは、例えれば難攻不落の城攻 めといった趣で、ともすると意に反して、従来テー

マを継続することに固執し,それが目的化している ように映る場合もあるでしょう.実際の城攻めの例 では, 難攻不落として知られていた豊臣の大坂城が 大坂の陣で陥落したのは, 膠着状態を打開するため, 徳川方が英国から調達した,長射程のカルバリン砲 による砲撃がゲームチャンジャーになったとも言 われています. 我々が対面している「大坂城」もゲ ームチェンジャーとなる新技術が登場すれば,落城 するはずですが、戦況はいつ配備されるかどうかも 分からない、カルバリン砲をただ待っているだけと ういうわけにもいきません.このような新技術の開 発と合わせて,従来技術の高度化も重要であるはず です. それは、日々製品開発に携わる産業界の技術 者の目線からも言えることでしょう.しかし,内燃 機関の熱効率のように,既に高い水準にある技術の 高度化は上乗せの多くを期待できないので(実は積 分すると波及効果は高いのですが),派手には見え ないことが難点です.おそらく,それは研究費を配 る側から見れば、物足りなく映り、選択と集中の命 令のもと、予算を削られる側になってはいないでし ょうか. 城攻めで言えば, 城を取り囲んでいる軍勢 への兵糧が尽きかけているということかと思いま す. それが、結果として学会の会員減少に拍車をか け,産業界からみて魅力が薄れてきている原因のひ とつではないかと個人的に考えております.したが って,研究費を配る側や審査する側の人たちには, テーマの斬新性だけではなく,見慣れたものでも, しっかり吟味して真に価値あるものを評価して頂 きたいと切に願う訳であります.

いずれにしましても、学会運営の DX 化を含め、 時流に合ったシステムに学会は進化しなければな らないと思います. 会員の皆様から様々な意見を頂 戴し, 持続可能な学会に日本伝熱学会もなっていけ るよう進めてまいりますので, 何卒よろしくお願い いたします. 第 62 期(2023 年度)表彰選考委員会 報告

Report from the Award Selection Committee of the Hear Transfer Society of Japan, 2023

表彰選考委員会 委員長 鈴木 洋(神戸大学) Hiroshi SUZUKI (Kobe University), e-mail:hero@kobe-u.ac.jp

1. 日本伝熱学会賞

2023 年度(令和5年度)日本伝熱学会賞の選考結 果についてご報告します.

従来の学術賞,技術賞,貢献賞および奨励賞に加 えて,2023年度独自の研究分野を開拓し,優れた業 績を挙げた若手研究者を対象とする登鯉(とうり) 賞を新設した.中国後漢書党固伝に「竜門登鯉」す なわち竜門(流れの速い滝)を登る鯉が龍になると いう成句があり,新設された賞名として制定された.

今期は2023年12月15日を応募・推薦締切とし て募集を行い,最終的に学術賞3件,技術賞2件, 登鯉賞8件,奨励賞2件,貢献賞2件の自薦・他薦 がありました.表彰選考委員会において厳正な審査 を行った結果,学術賞2件,技術賞2件,登鯉賞3 件,貢献賞2件,奨励賞2件を2023年4月の理事 会に推薦し,承認されました.各賞の受賞者は下記 のとおりです(順不同・敬称略).

1.1 学術賞 (Scientific Contribution Award of the Heat Transfer Society of Japan)

- 代表研究者:小宮 敦樹(東北大学) 共同研究者:古川 琢磨(八戸高専) 共同研究者:Juan Felipe Torres(オーストラリア 国立大学)
 「温度境界層共鳴効果を用いた自然対流伝熱促 進に関する研究」
 第 58回日本伝熱シンポジウム講演論文集,B324, 2021.
- 2) 代表研究者:李 敏赫(東京大学) 共同研究者:鈴木 雄二(東京大学) 共同研究者:柳 炅勳(東京大学) 「触媒燃焼で直接加熱される高温・高効率熱電発 電システムの開発」
 第 59回日本伝熱シンポジウム講演論文集,A343,

2022.







1.2 技術賞(Technical Achievement Award of the Heat Transfer Society of Japan)

 代表研究者:平沢浩一(KOA(株)) 共同研究者:有賀 善紀(KOA(株)) 共同研究者:国峯 尚樹((株)サーマルデザイ ンラボ/KOA(株))
 「小形電子部品を対象とした基板放熱型熱設計 技術の確立」

- 代表研究者:川島 知之(JFE スチール(株)) 共同研究者:小林 祥大(JFE スチール(株)) 共同研究者:浅川 一樹(JFE スチール(株)) 「長寿命・低 NOx・高効率ラジアントチューブ バーナー」
- 1.3 登鯉賞 (Touri Award (Outstanding Young Researcher Award) of the Heat Transfer Society of Japan)
- ・受賞者名:志賀 拓麿(産業技術研究所) 「表面に局在するフォノン波による熱伝導低減 機構の解明」
 第 57 回日本伝熱シンポジウム講演論文集, K1411, 2020.
- 2) 受賞者名:Donatas Surblys(東北大学) 「分子熱流体解析法の開発とナノスケール熱流 動解析への応用」
 第 56 回日本伝熱シンポジウム講演論文集, H233, 2019.
 第 57 回日本伝熱シンポジウム講演論文集, A124, 2020.
 第 58 回日本伝熱シンポジウム講演論文集,J123, 2021.
 3) 受賞者名:岸本 将史(京都大学)
- 5) 支貨福和: 床本 N文 (水部八字)
 「固体酸化物形燃料電池の多孔質電極解析基盤 技術の開発とそのデジタルツイン構築に関す る研究」
 第 58 回日本伝熱シンポジウム講演論文集, B312, 2021.
 第 60 回日本伝熱シンポジウム講演論文集, E323, 2023.
- 1.4 奨励賞 (Young Researcher Award of the Heat Transfer Society of Japan)
- 受賞者名: Seyedmehrzad Alizadehkolagar (大阪 大学)
 「数理科学と非平衡熱力学から明らかにする電 気化学反応輸送場の最適化構造」
 第 59 回日本伝熱シンポジウム講演論文集, A122, 2022.

- 2) 受賞者名: 榎本 陸(東京工業大学) 「熱力学的駆動力と温度場制御を用いた未利用 な長波長太陽光を短波長変換する革新的なフ オトン・アップコンバージョン固体材料系の創 出」
 第 59 日本伝熱シンポジウム講演論文集, BPA1426, 2022.
 第 60 日本伝熱シンポジウム講演論文集, D213, 2023.
- 1.5 貢献賞 (Contribution Award of the Heat Transfer Society of Japan)
- ・受賞者名:服部 博文
 「第59回日本伝熱シンポジウム実行委員会幹事 他,学会主催行事」
- 2) 受賞者名:手嶋 秀彰
 「第60回日本伝熱シンポジウム実行委員会幹事」

2. 名誉会員の顕彰

第61期では名誉会員として以下の3名(敬称略) を上記付帯行事において顕彰しました.本会の発展 に多大なるご貢献ありがとうございました.

- 高松 洋(熊本高専)
 第 50-51 期理事,第 53 期理事(伝熱シンポジウム実行委員長),第 60 期副会長,第 61 期会長
- 佐藤 勲(東京工業大学) 第 44-45 期理事,第 52-53 期副会長
- 花村 克悟(科学技術振興機構)
 第 43-44 期理事,第 54-55 期副会長,第 56-58 期理事,第 59 期会長,ACTS2020 実行委員長

3. 謝辞

2023 年度より新たに設けた登鯉賞の制定には本 会表彰部会委員の皆様に有益なご意見をいただき ました.また日本伝熱学会賞の選考には,本会第62 期表彰選考委員会の皆様に多大なご尽力をいただ きました.ご協力いただきました関係各位に深く御 礼申し上げます. 日本伝熱学会学術賞を受賞して On Receiving Scientific Contribution Award of the Heat Transfer Society of Japan



小宮 敦樹 (東北大学), 古川 琢磨 (八戸工業高等専門学校), Juan F. Torres (ANU) Atsuki Komiya (Tohoku University), Takuma Kogawa (NIT, Hachinohe), Juan F. Torres (ANU) e-mail: komiya@tohoku.ac.jp

令和6年5月30日に神戸国際会議場で開催され ました日本伝熱学会第62期総会において,令和5 年度日本伝熱学会学術賞をいただき光栄に存じま す.大変栄誉のある賞をいただき,ご審査いただ きました選考委員会の先生方ならびに伝熱学会関 係者の皆様に厚く御礼を申し上げます.いただき ました賞を励みとし,今後も伝熱工学分野の発展 に貢献できるよう努めてまいります.

この度の受賞の対象となりました研究「温度境 界層共鳴効果を用いた自然対流伝熱促進に関する 研究」は、私どもがこの10年で興味を持ち始めた エネルギーの有効利用およびサーマルマネージメ ントに関する研究内容の一部で、東北大学流体科 学研究所で研究を開始したときから培ってきた光 学干渉計による温度境界層のその場計測技術を利 用しての研究となります. 自然対流による伝熱の 研究対象は主として層流から乱流への遷移過程を 理解することであり, 伝熱学会においても古くか ら研究が進められてまいりましたが、私どもが注 目したのは層流領域において如何に低エネルギー で伝熱促進を実現できるか、という観点でありま す. 自然対流の最たる特徴はエネルギーの投入な しで対流伝熱が実現できるところにありますが, 伝熱をさらに促進するためには無次元数である Ra を臨界値まで上げなければならなく,即ち系を 大きくするか大きな温度差を付すといった受動的 対応に依らざるを得ません. そこで私どもは層流 温度境界層に能動的に刺激を与えることによって 乱流遷移を早める、もしくはそれに類似する現象 を引き起こすことに挑戦をしてまいりました. 刺 激を与える手法は複数ありますが、本研究では容 易に作り出せる「風」に着目しました.この「風」 を数値計算上でパラメータとし、鉛直平板伝熱面 にできる自然対流温度境界層に当ててみたところ, ある条件下でのみ伝熱面全体の平均ヌセルト数が 上昇することが分かりました. 簡易計算であり信

頼性に乏しかったことから,直ちに温度境界層可 視化実験を行い,同様の現象を確認しました.可 視化実験は,私どもの得意とするところです.こ れらの計算および実験結果から,この現象は共鳴 現象による温度場の揺らぎが局所的に境界層を薄 層化し,伝熱が促進されることを見出しました.

私どもはこの研究の成果が、今後のエネルギー 有効利用や環境発電への応用に生かせると考えて おります.これまで自然対流による伝熱(冷却効 果) はその絶対的能力が小さいことから、なかな か日の目を浴びる機会を得ることができませんで した.しかしながら,現在の社会の風潮はエネル ギーや熱を地産地消する考えにシフトしてきてお ります. つまりは、その場のエネルギーを有効利 用するという考えで, Society5.0の概念にも通ずる 持続可能な社会の実現に必要な技術になると考え ております. 例えば, 工場等で排出される未利用 廃熱を用いて微噴流を作り出せれば、本研究で見 出した共鳴効果により、冷却塔での伝熱促進が期 待できます. この例えは本研究の出口を見据えた 一部になりますが、この達成のためにはこれから もその原理をさらに探求していかなければならな く、言うまでもなく、これからも日本伝熱シンポ ジウム等において、対流熱伝達を研究されている 先生方および計測技術に関する会員の皆様から貴 重なご助言・ご指導をいただいていかなければな りません.受賞者一同,引き続きご指導賜れれば 幸甚に存じます.

最後になりましたが、今回の受賞に関しまして は、精緻な実験と計算を根気強く進めてくれた学 生諸君の協力に依るところが大きく、受賞者のみ での力ではここまでの研究の進展はありませんで した.また、本研究に携わりました東北大学流体 科学研究所伝熱制御研究分野のスタッフにも深く 感謝いたします.今後も更なる研究の深化に努め てまいります. 日本伝熱学会学術賞を受賞して On Receiving Scientific Contribution Award of the Heat Transfer Society of Japan



李 敏赫, 柳 炅勳, 鈴木 雄二 (東京大学) Minhyeok LEE, Gyeonghun YOO, Yuji SUZUKI (The University of Tokyo) e-mail: mlee@mesl.t.u-tokyo.ac.jp

この度,「触媒燃焼で直接加熱される高温・高効 率熱電発電システムの開発」について日本伝熱学 会学術賞の栄誉を賜り,誠に光栄に存じます.

自律ロボットの長時間駆動には、リチウムイオ ン電池に代わる小型高密度電源が強く求められて います.家庭用カセットボンベに用いられている ブタンはエネルギー密度が高くかつ交換が容易で あるため,可搬機器に最も適した燃料といえます. 一方,熱電発電は可動部分を持たず,低エミッシ ョン,低騒音の小スケール発電が可能と考えられ ることから,燃焼ベースの小型熱電デバイスが提 案されています.しかし,従来のシステムでは, 燃焼器と熱電モジュールが分離しているため熱の 有効利用が難しく,また熱電モジュールの作動温 度の上限が280℃程度と低く,発電密度および変 換効率が低いなどの問題がありました.

本研究では、これらの課題を克服するため、1) 触媒燃焼による熱電素子の高温端の直接加熱、2) 燃料と空気の混合気を熱電素子に沿って流すこと による対流効果を用いた低温端への熱伝導損失の 抑制、を特徴とする熱電発電モジュールの設計法 の確立とプロトタイプの試作・評価を行いました.

まず,高温の酸化環境で使用可能な熱電材料として,高温端を一体焼結した SiGe 素子[1],高温端を溶接した Ni 合金素子を仮定し,熱電素子内の熱伝導と対流効果を加味した数値解析により,流速,熱電素子間の間隔が熱損失の低減効果および燃焼効率に与える影響について系統的に評価しました.その結果,実際に製作可能な寸法を考慮すると,燃焼効率をほぼ 100%に保った上で熱伝導損失を SiGe 素子では 1/4, Ni 系合金素子では 1/15 程度に抑制できることを明らかにしました.

そして、数値計算結果に基づいて、サスペンションプラズマ溶射を用いて成膜した多孔質アルミナ膜を触媒担体とする Pd 触媒層を SiGe 模擬素子の高温端上に形成し、最高温度 1074 ℃,温度差

700 ℃, 燃焼効率9割以上を実現しました. また, 厚さ0.2 mmの薄板状Ni系合金素子からなる高集 積性の熱電発電モジュールを試作し,最高温度が 645 ℃ と予測値からは低い値に留まったものの, 10.8 kW/m³の高い発電密度を達成しました.

さらに、2021年7月には、福島県双葉郡大熊町 の帰還困難区域(当時)において、本熱電発電シ ステムのプロトタイプを搭載した自律ロボットの 実地走行試験を実施しました[2].

以上のように、本研究では、熱電素子を触媒燃 焼器と一体化し、全く新しい高発電密度の熱電発 電システムを提案しました.数値解析によりその 設計法を確立するとともに、試作素子を用いた燃 焼実験により、対流効果により熱損失が抑制され、 高い発電密度が得られることを明らかにしました. 今後、素子のさらなる集積化および排熱回収熱電 モジュールとの組み合わせによって、高出力の発 電システムの開発を目指していきます.今後とも ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます. なお、本研究の一部は、NEDO 先導研究プログ ラムの支援を受けました.ご協力いただいた東京 大学浅間研究室、産業技術総合研究所、株式会社 KELK、ダイニチ工業株式会社の関係者の方々に、 この場をお借りして感謝申し上げます.

- Uchida, S., Lee, M., Lee, C. -H., and Suzuki, Y., High-Temperature Monolithic SiGe Thermo-Electric Device Directly-Heated by Catalytic Combustion, Appl. Phys. Lett., **120-5** (2022) 053901.
- [2] 李敏赫,筑紫彰太,鈴木雄二,淺間一,帰還 困難区域での熱電発電システムを用いた自律 移動ロボットの実地走行〜家庭用カセットボ ンベを燃料として長時間の環境モニタリング を実現〜,東京大学工学部プレスリリース (2021).

日本伝熱学会技術賞を受賞して On Receiving Technical Achievement Award of the Heat Transfer Society of Japan



平沢 浩一,有賀 善紀 (KOA),国峯 尚樹 (サーマルデザインラボ) Koichi HIRASAWA, Yoshinori ARUGA(KOA Corporation) Naoki KUNIMINE(Thermal Design Laboratory Co.,Ltd) e-mail: ko-hirasawa@koaglobal.com

このたびは,日本伝熱学会賞 技術賞をいただき, まことに光栄に存じます.表彰選考委員会の皆様 をはじめ関係者の方々に深く感謝いたします.

表題は「小形電子部品を対象とした基板放熱型 熱設計技術の確立」です.小形発熱電子部品につ いてプリント配線板を放熱板として利用して熱設 計をシステマティックに行う手順作りと微小部品 に特化した温度測定技術の構築,さらに表面実装 部品の中で使用数が非常に多い抵抗器については, 合理的な熱設計を困難にしていた温度管理部位の 見直しを含む IEC (International Electrotechnical Commission:国際電気標準会議)規格改訂の主導な ど,一連の活動を評価いただきました.

基板放熱型熱設計とは、小形表面実装発熱電子 部品が自己を自己の表面積で冷却する能力が不足 している場合に、プリント配線板の面積を借用し て不足分を補う熱設計手法です. 部品単体が自己 を冷却する能力は、その部品の表面積をS [m²]、 熱伝達率を h [W/(m²·K)]として単体熱抵抗 Rthown=1/(Sh)で表わされます. また, 設計上その 部品に消費させなければならない電力を P [W], その部品に許容される温度上昇を T_{max} としたとき にその部品に要求される冷却能力は目標熱抵抗 Rthtarget= Tmax /P で表わされます. 一つ一つの発熱 部品ついて両者を比較し,以下のような熱設計方 針を立てます. Rthown ≤ Rthtarget であれば自己の冷 却能力が要求される冷却能力よりも高いので対策 不要です. Rthown > Rthtarget かつ Rthtarget ≦30 ℃/Wの 部品はヒートシンクなど本格的な対策が必要で, Rth_{target}>30 ℃/W の部品はプリント配線板の面積 を借りて対策します. 必要面積の算出には Lee の 式[1]などを応用します.この手順を踏むことで, アートワーク前に熱対策が仕分けされるため、手 戻りの少ない熱設計が可能となります.

過去の表面実装抵抗器の IEC 規格では,抵抗器 に消費させてよい電力は,図 1(a)の横軸を周囲温 度で表わした負荷軽減曲線のみで仕様化されてい ました.しかしながら,周囲温度で消費電力上限 が定められる部品は,図2のリード線形抵抗器の ように放熱先が周囲空間の場合だけです.表面実 装抵抗器の放熱先はプリント配線板なので,消費 可能な電力は図1(b)のようにプリント配線板と接 する端子部温度との関係において仕様化されるべ きです.2023年8月に改訂された表面実装抵抗器 のIEC規格には,図1(b)の負荷軽減曲線が例示さ れました.基板放熱型熱設計との組み合わせによ り,表面実装抵抗器を使用した熱設計は,合理的 に実施できるようになると考えます.今後は周知 活動に尽力する所存です.有難うございました.



参考文献

 S. Lee, S. Song, V. Au, and K.P. Moran, "Constriction/Spreading Resistance Model for Electronics Packaging", Proceedings of the 4th ASME/JSME Thermal Engineering Joint Conference, Vol. 4, pp.199-206, 1995 日本伝熱学会技術賞を受賞して On Receiving Technical Achievement Award of the Heat Transfer Society of Japan



川島 知之,小林 祥大,浅川 一樹(JFE スチール株式会社) Tomoyuki KAWSHIMA, Akihiro KOBAYASHI, Kazuki ASAKAWA (JFE Steel Corporation) e-mail: tom-kawashima@jfe-steel.co.jp

この度,日本伝熱学会第62期総会において,技 術賞を受賞する栄誉をいただき,大変光栄に思い ます.このような名誉ある賞をいただけたことは, 表彰選考委員会の皆様をはじめ,関係各位のご支 援とご指導の賜物と深く感じております.心より 感謝申し上げます.

今回の受賞の対象となった技術は「長寿命・低 NOx・高効率ラジアントチューブバーナー」とな ります. 第58回日本伝熱シンポジウムでの企業特 別セッションでの発表を初めとして, The 33rd International Symposium on Transport Phenomena, 日 本機械学会熱工学コンファレンス 2023 等での成 果発表及びそれらに関連した特許について評価い ただきました.

ラジアントチューブバーナー(以下 RTB)では 金属製のチューブ内で燃焼が生じ,その燃焼熱を チューブに伝えます.そして,加熱されたチュー ブの輻射熱により鋼板を加熱します(図 1). RTB は,無酸化または還元雰囲気内で鋼板等を加熱可 能であり,多くの加熱炉で用いられています. RTB に求められる性能としては,①長寿命性,②低 NOx 性,③高熱効率(=CO₂削減)性能の3つが 挙げられます.実操業では RTB の長寿命化は特に 重要な課題でした.そこで,重力方向の変形抑止 が期待できる楕円形状のチューブを用いた RTB の実用化に取り組みました.



上記の3つの課題をいずれも高い水準で解決した楕円型 RTB を図2に示します.各開発アイテムに関する説明を以下に詳述します.

- 支持構造を第一ベンド-第三ベンド連結構 造とすることで、チューブとサポートの接 合部に荷重が集中することを防ぎ、サポー ト部の変形を抑止しました。
- ② 楕円型のチューブと円形型のバーナーを組 み合わせることで、バーナー近傍において 旋回流と循環流が発達し、大幅な NOx 低減 を実現しました.
- ③ 楕円形状のチューブに適した歯車形状の伝熱促進体を開発しました.燃焼ガス温度からチューブ内壁への伝熱量が低下する第4 直管部に開発した伝熱促進体を設置することで高い熱効率を達成しました.

開発したRTBはJFEスチール千葉地区冷延工場 に導入されてから7年程度経過しており,期待通 りの高い効果が確認されています.

最後になりましたが、本技術の開発にご協力い ただいた社内外の関係者の皆様に、あらためて深 く感謝申し上げます. 今後も伝熱技術の研究・開 発により産業界の発展に貢献して参ります.



日本伝熱学会登鯉賞を受賞して On Receiving Touri Award (Outstanding Young Researcher Award) of the Heat Transfer Society of Japan



志賀 拓麿 (産業技術総合研究所) Takuma SHIGA (National Institute of Advanced Industrial Science and Technology, AIST) e-mail: takuma.shiga@aist.go.jp

先の第61回日本伝熱シンポジウムにおきまし て、日本伝熱学会登鯉賞をいただきました.ご推 薦いただきました方々、ご審査いただきました 方々を始めとし、伝熱学会関係者の皆様に心より 感謝申し上げます.本受賞を励みとし、伝熱の学 理と応用のさらなる発展に貢献できるよう一層の 精進に務める所存です.

受賞の対象になりました「表面に局在するフォ ノン波による熱伝導低減機構の解明」では、表面 に局在するフォノン(表面フォノン)が薄膜の熱 伝導に与える影響を理論的に明らかにしました. 以下では、本研究の目的と結果を紹介させていた だきます.

膜厚が薄くなるにつれて,薄膜表面におけるフ オノン散乱が支配的になり,熱伝導率が低下する ことが知られています.この熱伝導のサイズ効果 はボルツマン輸送方程式に基づいた Fuchs-Sondheimer モデルによって説明できること が知られています.一方,膜厚を原子層レベルま で薄くすると,振動モードはバルクと全く違った ものになり,従来モデルでは説明できません.極 限的な薄さにおける熱伝導がサイズ効果で説明で きないことは直感的にも明らかですが,十分薄い が原子層レベルではない膜厚領域,具体的には, 膜厚がバルク中の平均自由行程よりも十分薄く, フォノンの波長と同程度またはそれ以下になる場 合の熱伝導の理解は限定的でした.

数 Å から 10 nm の膜厚の極薄膜材料の熱伝導 に関するこれまでの研究では、もっぱら分子動力 学シミュレーションが用いられていましたが、フ オノン熱輸送スペクトルなどのモーダルな解析は 行われていませんでした.このため本研究では、 極薄膜材料の構造をあらわに考慮したフォノン輸 送解析を実施するべく大規模格子動力学法を開発 し、異なる表面を持つ極薄膜シリコンの膜厚に依 存した熱伝導解析を実施しました.

膜厚の減少に伴いフォノン波の閉じ込め効果 が顕著になると,波長と周波数の関係であるフォ ノン分散関係が大きく変調されることがわかりま した.この変調において,バルクや単原子層とは 異なる振動状態があることに気づき,固有振動解 析によって,これが薄膜表面に局在する表面フォ ノンであることがわかりました.表面フォノンの 状態密度は大きくないように思えますが,数 nm 以下の膜厚領域では,表面フォノンの存在は無視 できません.そこで,フォノン同士の散乱を詳細 に調べることで,表面フォノンが薄膜全体の熱伝 導に与える影響を評価しました.

その結果,表面フォノンが薄膜全体または内部 に伝搬するフォノンを強く散乱することを初めて 明らかにしました. さらに,20 nm までの膜厚領 域では,表面フォノンによる熱伝導抑制が無視で きないことも理論的に明らかにしました(Phys. Rev. B 103, 195418 (2021)).本研究で得られた知見 に基づくと,薄膜表面構造を制御することで,表 面フォノンの振動状態や熱伝導率低減を抑えるこ とが可能です.また,本成果は二次元物質を積層 した材料などで見られる,二次元とも三次元とも 言えない振動状態を有する材料の熱伝導を理解す ることにも繋がります.

このような基本的な研究課題に取り組むことが できたのも、JST さきがけ「熱輸送のスペクトル 学的理解と機能的制御」にて、花村克悟研究総括 と領域アドバイザーから「本質に迫る研究をせよ」 と激励をいただいたおかげです.ここに御礼を申 し上げます.また、当時研究を共に進めてくれた 森田路真氏にも感謝します.今後もこのようなア プローチをさらに進めて、ナノマイクロスケール 熱工学のさらなる発展に貢献していきたいと考え ています. 日本伝熱学会登鯉賞を受賞して On Receiving Touri Award of the Heat Transfer Society of Japan



岸本 将史(京都大学) Masashi KISHIMOTO (Kyoto University) e-mail: kishimoto.masashi.3m@kyoto-u.ac.jp

この度は日本伝熱学会登鯉賞を頂き,誠に光栄 に存じます.選考委員会ならびに関係者の皆様に 感謝申し上げます.この栄誉ある賞を受賞できま したのは,これまでご指導いただいた先生方,研 究相談に付き合っていただいた同世代の方々,そ して粘り強く研究に取り組んでくれた学生の皆さ んあってこそのものと感じています.この場をお 借りして御礼申し上げます.また,学生の頃から お世話になり,常に研究活動の中心であった伝熱 学会から賞を頂けたことは,大変嬉しく思います.

受賞対象の研究課題名は「固体酸化物形燃料電 池の多孔質電極解析基盤技術の開発とそのデジタ ルツイン構築に関する研究」であり、これまで伝 熱シンポジウムのほか、機械学会等の講演会や国 際ジャーナルでも関連する内容を発表しています. 固体酸化物形燃料電池(Solid Oxide Fuel Cell: SOFC)は、私が修士学生の頃から一貫して取り組 んでいる研究対象であり、電極に用いられる多孔 質体内部における輸送・反応連成現象を明らかに し、より良い電極を設計する際の指針を得ること を目的としてきました.

SOFC の電極はサブミクロンスケールの粒子か ら形成される多孔質体であり、その内部では電 子・イオン・ガスの輸送現象が生じるとともに、 電気化学反応が生じています. SOFC の性能向上 に向けて、それらの現象が円滑に進行できるよう な多孔質構造の設計が必要とされています. 従来 は経験則に基づく設計がなされてきましたが、近 年の観察技術の発展により、電極構造をナノスケ ールで3次元的に観察することが可能になりまし た. 私自身は、集束イオンビームを備えた走査型 電子顕微鏡(Focused Ion Beam – Scanning Electron Microscope: FIB-SEM)を用いて、SOFC の電極構 造の観察を行ってきました^[1]. 京都大学に FIB-SEM が導入されたのは、私が修士1年生であ った 2009 年の初めであり、それ以来私の研究にお ける相棒とも呼べる存在です. その他にも X 線 CT 技術を用いた観察技術も同時期に SOFC の電 極観察に適用されました. それらから得られる 3 次元の構造データは、これまでの断面2次元情報 と比べると圧倒的に豊富な情報量を有しており, 多孔質内部における3次元的な輸送パスや反応サ イトの分布を可視化することが可能になりました. また、構造を特徴づける構造パラメータの定量化 についても,特段の仮定を置くことなく行うこと が可能になりました. これらの可視化・定量化技 術の開発に学生の頃から携わり、今でもその高度 化に取り組んでいます. さらに, 実多孔質構造を 計算系とする輸送・反応連成シミュレーション技 術の開発も行い^[2],電極構造から性能を予測する ことが可能になりました.このような、電極多孔 質構造の詳細観察・構造定量化・数値シミュレー ションによる性能予測といった電極解析に有用な 一連の基盤技術は、研究開始当時ほとんど未整備 であったため、一つ一つ丁寧に作り上げていきま した.

3 次元構造観察を発端とする電極解析基盤技術 の開発により、SOFC の電極構造の最適化への期 待が高まりました.しかし,現実はそこまで甘く はなく、思ったほどスムーズには進んでいないの が実情です. その原因として, 電極の3次元構造 観察や、構造の定量化、さらには電極の数値シミ ュレーションといったプロセスが、どれも作業負 荷や計算負荷が高いという点が挙げられます.例 えば3次元構造観察は、丁寧な試料作製に加え、 数時間から十数時間程度のプロセスタイムが必要 です.また、得られた画像を解析可能なデータ型 にするためには、領域分け (segmentation) という 作業が必要であり、手作業も介在するため時間が かかります.構造定量化や性能予測のための数値 シミュレーションについても、複雑な3次元多孔 質を対象とするため計算時間が膨大なものとなり

がちです.

このような問題を受けて,近年発展の目覚まし い機械学習技術を取り入れることで,ボトルネッ クとなっているプロセスを高速化することを考え 始めました.初めて研究テーマに機械学習を取り 入れたのは2021年の夏でした.当初は機械工学・ 熱工学を専門とする研究室において,機械学習を ど真ん中に置くテーマを立ち上げることにはため らいがありました.しかし,FIB-SEM 観察により 得られる画像の処理や,構造情報からの特徴量の 抽出というのは,機械学習技術が得意とするとこ ろであり,適用するに際のハードルが低かったこ とは幸運でした.また,周囲の方々のアドバイス, 後押しもあり,思い切って始めることができまし た.その後,携わってくれた/くれている学生達 の頑張りにより,成果に結びつきつつあります.

SOFC の電極解析に機械学習技術を適用してい る具体例をいくつか紹介します. 図1に示すよう に、3 次元構造観察を発端とする電極構造最適化 ループは、3次元構造観察、領域分け、構造定量 化,性能評価(数値シミュレーション),そしてフ ィードバックからなります.まず,観察から得ら れた3次元構造データの領域分けは、これまで手 作業を含む長時間の作業が必要でしたが, semantic segmentation という技術を適用すること で,瞬時に済ませることが可能になりました^[3]. 車の自動運転のための画像認識などに広く用いら れている技術であり, ライブラリも整備されてい るため、今までの苦労は何だったのかと思うくら い,なんなく開発ができてしまいました.次に解 析可能なデータ型になった構造情報から、構造を 特徴づける構造パラメータの抽出を試みました. 電極の性能と相関のある構造パラメータの中でも, 輸送現象に関係する屈曲度ファクタは従来手法に よる定量化の負荷が高いため,最初のターゲット としました.画像からの特徴量抽出を得意とする 畳み込みニューラルネットワーク(Convolutional Neural Network: CNN)を用いることで、電極を構 成するどの相に対しても瞬時に定量化することに 成功しました[4]. また,そもそもの電極作製の所 からデジタル空間で行うことができれば、構造観 察のプロセスもバイパスできることに気がつき, 模擬電極構造生成モデルの開発に取り組みました. 敵対的生成ネットワーク (Generative Adversarial

Network: GAN)を用いることで、本物そっくりな 多孔質電極構造を生成することに成功しました. さらに、特定の幾何的、統計的な制約を満たすよ うな構造を生成するモデルとして、条件付き GAN (Conditional GAN)の開発にも取り組み、体積分 率と構造スケールを明示的に指定して模擬構造を 生成できるモデルが構築できつつあります^[5].そ の他にも、数値シミュレーションの代替手段とし て Physics-Informed Neural Network (PINN)の適用 や、Persistent Homology に基づく位相的データ解 析に基づく3次元構造情報の次元圧縮など、新た な要素を取り入れた研究を行っています.

このように、受賞研究課題名の後半部分である 「デジタルツイン構築に関する研究」については、 研究を始めてからまだ日が浅く、道半ばと言わざ るを得ません.電極構造最適化ループのデジタル ツインを実現するためには、各要素技術の高度化 や、それらをスムーズにつなぐ技術の開発が必要 です.この度の登鯉賞の受賞を激励として受け取 り、今後も研究に邁進していきたいと思います. 伝熱学会の会員の皆様におかれましては、今後と もご指導のほどどうぞよろしくお願いいたします.



図1 3次元電極構造解析を発端とする電極構造 最適化ループと機械学習技術の適用

参考文献

- Kishimoto, M., et al., J. Power Sources 196 (2011) 4555-4563.
- [2] Kishimoto, M., et al., J. Electrochem. Soc. 159(3) (2012) B315-B323.
- [3] Wang, Y., ECS Transactions 111(6) (2023) 457-467.
- [4] 岸本将史他,第60回日本伝熱シンポジウム.
- [5] Kishimoto, M., et al., J. Power Sources 580 (2023) 233411.

日本伝熱学会登鯉賞を受賞して On Receiving Touri Award of the Heat Transfer Society of Japan



スルブリス ドナタス (東北大学) Donatas SURBLYS (Tohoku University) e-mail: donatas@tohoku.ac.jp

この度,2023年度日本伝熱学会登鯉賞をいただ きまして気の引きしまる思いであり,誠に光栄に 存じます.ご推薦くださいました方々,ならびに 選考委員会の皆様,心より御礼申し上げます.

受賞の対象となった研究課題は「分子熱流体解 析法の開発とナノスケール熱流動解析への応用」 です.電子デバイスの開発が高いペースで進めら れていますが常につきまとうのはサーマルマネジ メント問題です.小型化によって構造がナノ領域 に達しており,従来の手法での解析や改良が困難 になってきています.そこで原子個々の運動を古 典的力学で解いている分子動力学解析 (Molecular Dynamics; MD)の出番となります.

本研究では異なるスケールの凹凸固液界面の熱 輸送特性に関する MD 計算を行い、驚くことに多 くの場合は接触面積の増加分の熱輸送向上も見ら れました[1]. つまり, 拡大伝熱面の概念をそのま ま適用できることが分かりました.一方,固液間 相互作用が特に強い時に界面での液体が結晶化し、 弱い時に液体分子が溝に入らず、熱輸送性能が凹 凸のスケールに左右されます. この計算系は単原 子分子から構成されたものでしたが、より実現象 に近い複雑な分子から構成される場合, 分子の慣 性半径,界面での配向,水素結合の有無など,熱 輸送に影響を与える要因は多岐に渡ります.分子 の扱いも当然ながら複雑になり、最初に扱った 2 体相互作用の質点から多体相互作用の分子に変わ り,形状を保つために拘束力学も加わります. 複 雑な系の熱流束を正しくかつ効率的に算出させる 手法はもう一つ本研究のテーマです[2,3]. 一旦煩 雑に思われるが、MD であっても、エネルギー保 存の物理法則が成り立たなければならないため, エネルギーの時間変化から考えていけば、最終的 に原子ごとの熱流束ベクトルが定義でき,積分す ることによって効率的かつ正確に検査体積内の値 が分かります.

現実系の計算について触れてきましたが MD で は現実に成し得ない操作が可能なメリットもあり ます. 前段の凹凸系では固液間相互作用強さが重 要でしたが,実現象と関連づける際に付着仕事が 使われます. 付着仕事は固液の分離に必要な可逆 仕事であり、実験では接触角測定と Young-Dupré 式で求められます. MD での接触角測定は系のサ イズや時間の制約があり、必ずしも最適とは言え ません. そこで使われるのは熱力学的積分です. 分かりやすいのは Phantom-Wall 法であり, 液にの み斥力を働かせる仮想壁を純静的に動かし、液相 を剥がします. 仮想壁のピストン仕事は固液付着 仕事と体積を増やす仕事となります.本研究では 発展型である Dry-Surface 法を扱いました. Dry-Surface 法は仮想壁面の代わりに固液作用そ のものを純静的に斥力作用に変え、ピストンの役 割をさせます.長距離作用であるクーロン作用の 扱いが非常に厄介となり, 効率的な Dry-Surface 法の適用スキームを開発しました[4,5].

最後になりましたが,学生時代からご指導頂き, 今もご協力いただいている山口康隆先生や多大な る助言をいただきました Darmstadt 工科大学の F. Müller-Plathe 先生, F. Leroy 氏,東北大学の菊川豪 太先生,松原裕樹氏,そして研究に理解を示し, 後押してくださった小原拓先生に心より感謝申し 上げます.

- Surblys, D., Kawagoe, Y., Shibahara, M., Ohara, T., J. Chem. Phys., **150** (2019) 114705.
- [2] Surblys, D. Leroy, F., Yamaguchi, Y., Müller-Plathe, F., Phys. Rev. E, 99 (2019) 051301.
- [3] Surblys, D. Müller-Plathe, F., Ohara, T., J. Appl. Phys, 130 (2021) 215104.
- [4] Surblys, D. Matsubara, H., Kikugawa G., Ohara, T., J. Chem. Phys, **148** (2018) 134707.
- [5] Surblys, D. , Matsubara, H., Kikugawa G., Ohara, T., J. Phys. Chem. A, **126** (2022) 5506.

日本伝熱学会奨励賞を受賞して On Receiving Young Researcher Award of the Heat Transfer Society of Japan



アリザデ メヘルザード (大阪大学) Mehrzad ALIZADEH (Osaka University) e-mail: alizadeh.mehrzad@gmail.com

I am incredibly honored and humbled to receive the Young Researcher Award from the Heat Transfer Society of Japan (HTSJ). This recognition from such a prestigious organization is a tremendous motivator and validates my passion for research in heat and mass transfer. I would like to express my sincere gratitude to the selection committee, the society's secretariat, and my supervisors, Prof. Shohji Tsushima and Assoc. Prof. Takahiro Suzuki. Additionally, I am grateful to our collaborators, Asst. Prof. Patcharawat Charoen-amornkitt from King Mongkut's University of Technology Thonburi (KMUTT), Thailand, and Assoc. Prof. Jeff Gostick from the University of Waterloo, Canada.

The research for which I received the award, entitled "Optimized structure of electrochemical reaction transport field revealed through mathematical science and non-equilibrium thermodynamics", is my doctoral project at Osaka University, for which I also received a Young Scientist Research Fellowship from the Japan Society for the Promotion of Science (JSPS). Reactive transport in porous media is crucial for various systems, including catalytic reactors and electrochemical energy devices (e.g., secondary batteries and fuel cells). In these devices, the porous electrode structure significantly impacts performance. Our research focuses on enhancing device efficiency by optimizing these structures using mathematical optimization and non-equilibrium thermodynamics analysis. By leveraging mathematical modeling and optimization techniques, we refine the porous electrode structures to enhance overall cell performance. In addition, by employing non-equilibrium thermodynamics analysis, we aim to elucidate the physicochemical reasons behind performance improvement and theoretically identify

the optimal structure for maximum performance under non-equilibrium conditions.

Electrodes are the heart of electrochemical devices. They are porous reactors where fluid flow, heat transfer, electric charge transport, and electrochemical reactions occur simultaneously. Optimizing electrode structures is critical for improving device performance and lifespan by balancing these processes. In our first attempt, we employed a density-based topology optimization technique to find the optimal layout of a porous (electro-) chemical reaction-diffusion system. This method utilizes a macro-scale finite element model and aims to maximize the conversion rate and minimize losses associated with various phenomena within the electrode. Additionally, we used entropy generation analysis based on the concept of non-equilibrium thermodynamics to analyze the optimization process. We found that a better design not only corresponds to lower overall entropy generation but also may promote a more uniform distribution of entropy generation at the local level. These findings have been published as "Alizadeh et al., J. Electrochem. Soc., 170, 2023", "Alizadeh et al., Chem. Eng. Sci., 275, 2023", and "Charoen-amornkitt et al., Int. J. Heat Mass Transfer, 202, 2023".

Given that the transport and rate processes in these systems occur at micro- and nano-scale, it is essential to employ pore-scale models that can capture these phenomena at a realistic length scale without reliance on volume-averaged properties required for finite element modeling. However, pore-scale models, such as geometrically resolved direct numerical simulations, require significant computational power that may not be manageable when incorporated into an optimization loop.

To address these challenges, our group developed a

novel method that integrates pore network modeling and metaheuristic optimization algorithms. This method optimizes the morphology of an advection-diffusion-reaction porous reactor by directly resolving the inherent heterogeneity of the porous structure without resorting to macro-homogeneous models, while eliminating excessive computational power requirements associated with direct numerical simulations. The method has a broad application scope for porous structure design problems and is expected to establish a new trend in high-resolution porous reactor design. The optimized structures obtained from this framework also reveal previously unresolved microscale heterogeneity, providing insights into the mechanisms and controlling factors. This work was presented at the International Workshop for Sustainable Energy Conversion Systems (IWSEC 2024), which was co-located with 61st Japan Heat Transfer Symposium.

Finally, we would also like to extend our sincere gratitude to the Japan Society for the Promotion of Science for their invaluable financial support through the Grant-in-Aid for JSPS Fellows (Grant Number: 22KJ2198) and JSPS KAKENHI Grant (Grant Number: 21H04540). Additionally, we are highly grateful for the instrumental support received from the Office of the Permanent Secretary, Ministry of Higher Education, Science, Research and Innovation (OPS MHESI), Thailand Science Research and Innovation (TSRI), and King Mongkut's University of Technology Thonburi.

日本伝熱学会奨励賞を受賞して On Receiving Young Researcher Award of the Heat Transfer Society of Japan



榎本 陸(東京工業大学) Riku ENOMOTO (Tokyo Institute of Technology) e-mail: enomoto.r.ab@m.titech.ac.jp

この度,日本伝熱学会第62期総会におきまして 日本伝熱学会賞(奨励賞)を受賞し,光栄に感じて おります.ご審査下さいました選考委員の先生方, 受賞対象の研究でご指導を頂いた村上陽一先生,ご 支援頂いた共同研究者の皆様に感謝申し上げます.

受賞表題は「熱力学的駆動力と温度場制御を用いた未利用な長波長太陽光を短波長変換する革新的なフォトン・アップコンバージョン固体材料系の創出」で,原著論文二報[1,2]と第59回及び第60回の伝熱シンポジウムでの発表が該当しております.

現在,光触媒や太陽電池を含む幅広い光エネルギ 一変換では,各材料に固有な波長より長波長側の光 (bandgap energy 以下のエネルギーの光子)は未利用 で,これが変換効率を根本的に制限しています.こ の制限を回避できる方法として,低エネルギーの光 子(長波長の光)をより高エネルギーな光子(短波 長の光)に変換する「フォトン・アップコンバージ ョン(UC)」があります.近年,二種類の有機分子 (光吸収を担う「増感分子」と短波長発光を担う「発 光分子」)の間のエネルギー移動を用いる UC 法が 比較的低強度な入射光に適用可能な方法として注 目を集めています.しかし,従来研究の大半は応用 に不適な有機溶媒溶液の形態でした.

その解決に向けて材料の固体化が追求されてい ますが,従来研究では増感分子と発光分子とを均一 に混合するために融液の急速硬化や結晶の急速析 出等の固体生成法を用いたため,結晶性が極めて低 く,材料中を励起状態が殆ど伝播しないため,低効 率で高い入射光強度を要する低性能なものでした.

本研究では、二種分子の均一な混合に、熱力学的 な駆動力である混合エントロピーを利用する独自 の着想から、発光分子の結晶中に増感分子を均一に 固溶させた固溶体 UC 結晶を創出しました(図1). 本材料は、その極めて高い結晶性によって、従来の 固体 UC 材料では達し得なかった非常に高い UC 量 子効率を示し、太陽光強度の約1/5という極めて低 い入射光強度で動作可能,空気中で使用可能,連続 光照射で安定という,従来の固体 UC 材料の短所を 一挙に解決した革新的な材料を創出しました[1].

続いて, 基板上に多結晶の固溶体 UC 膜を製膜す る温度勾配制御装置を考案, 開発しました (図 2). 本装置は分子融液の面内方向の凝固・結晶化の速度 を最適に時空間温度制御することを可能としたも ので, これにより, 大気中で太陽光強度以下の微弱 な青色光を連続的に紫外光へと変換する革新的な 固溶体多結晶膜を創出しました[2].

2024 年 4 月に東京工業大学ゼロカーボンエネル ギー研究所の助教に着任致しました.分子スケール の伝熱工学・熱工学の観点からエネルギー有効利用 の研究に取り組んでゆく所存です.今後ともご指導 ご鞭撻のほど,何卒宜しくお願い申し上げます.



図 2 本研究で考案,創出した温度勾配制御による 固溶体多結晶成膜装置とその原理の模式図.

参考文献

- Enomoto, R., Murakami, Y. et al., Materials Horizons, 8 (2021) 3449.
- [2] Enomoto, R. and Murakami, Y., Journal of Materials Chemistry C, 11 (2023) 1678.

第61回日本伝熱シンポジウム・IWSEC2024の報告

Report on the 61st National Heat Transfer Symposium of Japan and on International Workshop for Sustainable Energy Conversion Systems

鈴木 洋,村川 英樹, 菰田 悦之(神戸大学), 津島 将司(大阪大学), 岩井 裕(京都大学), 西田 耕介 (京都工芸繊維大学), 小澤 守, 小田 豊 (関西大学), 木村 文義,河南 治 (兵庫県立大学),日出間 るり (名古屋大学), 服部 博文(名古屋工業大学),須賀 一彦(大阪公立大学), 店橋 護, 加藤 之貴 (東京工業大学), 中村 元 (防衛大学), 岩本 薫,田川 義之 (東京農工大学),服部 康男 (電力中央研究所),塚原 隆裕 (東京理科大学), 鹿園 直毅, ムテルデゥ ティモテ, イ エリム, 塩見 淳一郎, 鈴木 雄二, 白樫 了 (東京大学), 能村 貴宏, 田部 豊 (北海道大学), 中曽 浩一, 山田 寛 (岡山大学), 江目 宏樹 (山形大学), 宮崎 康次, 伊藤 衡平, 藏田 耕作 (九州大学), 櫻井 篤 (新潟大学), 春木 将司(金沢大学),小糸 康志(熊本大学),松川 嘉也,徳増 崇(東北大学), 荒木 拓人 (横浜国立大学), 勝身 俊之, 佐藤 大輔 (長岡技術科学大学), 西 剛伺 (足利大学), 小泉 雄大 (ナブテスコ (株)), 近藤 義広((株) 日立アカデミー), 春木 直人(岡山県立大学) Hiroshi SUZUKI, Hideki MURAKAWA, Yoshiyuki KOMODA (Kobe University), Shohji TSUSHIMA (Osaka University), Hiroshi IWAI (Kyoto University), Kosuke NISHIDA (Kyoto Institute of Technology), Mamoru OZAWA, Yutaka ODA (Kansai University), Fumiyoshi KIMURA, Osamu KAWANAMI (University of Hyogo), Ruri HIDEMA (Nagoya University), Hirofumi HATTORI (Nagoya Institute of Technology), Kazuhiko SUGA (Osaka Metropolitan University), Mamoru TANAHASHI, Yukitaka KATO (Tokyo Institute of Technology), Hajime NAKAMURA (National Defense Academy), Kaoru IWAMOTO, Yoshivuki TAGAWA (Tokyo University of Agriculture and Technology), Yasuo HATTORI (Center Research Institute of Electric Power Industry), Takahiro TSUKAHARA (Tokyo University of Science), Naoki SHIKAZONO, Timothée MOUTERDE, Yaerim LEE, Junichiro SHIOMI, Yuji SUZUKI, Ryo SHIRAKASHI (The University of Tokyo), Takahiro NOMURA, Yutaka TABE (Hokkaido University), Koichi NAKASO, Yutaka YAMADA (Okayama University), Hiroki GONOME (Yamagata University), Koji MIYAZAKI, Kohei ITO, Kosaku KURATA (Kyushu University), Atsushi SAKURAI (Niigata University), Masashi HARUKI (Kanazawa University), Yasushi KOITO (Kumamoto University), Yoshiya MATSUKAWA, Takashi TOKUMASU (Tohoku University), Takuto ARAKI (Yokohama National University), Toshiyuki KATSUMI, Daisuke SATO (Nagaoka University of Technology), Koji NISHI (Ashikaga University), Katsuhiro KOIZUMI (Nabtesco Corporation), Yoshihiro KONDO (Hitachi Academy Co., Ltd.), Naoto HARUKI (Okavama Prefectural University)

1. シンポジウム概要

第61回日本伝熱シンポジウムは、5月29日(水) から31日(金)の日程で、神戸国際会議場におい てで開催されました.神戸での開催は2000年(実 行委員長:藤井照重先生)以来の24年ぶりとなり ます.本シンポジウムでは新たな試みとして、国際 ワークショップ (International Workshop for Sustainable Energy Conversion Systems:IWSEC2024, 実行委員長:津島将司先生)を併設して行いました. 参加登録者数は 772 名 (ご招待者 8 名・IWSEC 参 加者を含む),講演数は特別講演1件,IWSEC18件 を含んで 349 件 (基調講演 30 件) となりました. 完全対面方式となった前回の第 60 回 [参加登録者 数:738 名], ハイブリッド開催の第 59 回 [参加登 録者数:703名]に対して,COVID前の第56回[参加登録者数:768名]と,参加登録者数はほぼ同等 まで回復しております.講演数については第60回 の350件をやや下回りましたが,一部のオーガナイ ズドセッションを国際ワークショップに移行した ためかも知れません.

今回のシンポジウムでは新たにバイオ伝熱が加 わり、8つのオーガナイズドセッション(OS)が企 画されました.また一般セッションに加えて、優秀 プレゼンテーション賞セッション,特定推進研究特 別ワークショップ(招待講演のみ),企業の方が気 軽に議論できる「モノづくりセッション」が開催さ れました.公開講演会として特別講演会に加えて 「人と熱との関わりの足跡(その7)」,「関西地区企 業における部品開発・技術開発の紹介」が開催され ました.2日目(5月30日)には特別講演・総会の 後に、ポートピアホテルにて、意見交換会が開催さ れ、281名(招待者5名を含む)のご参加をいただ きました.第60回の253名,第59回の213名に比 べて増加しております.

以上,本シンポジウムの概要をまとめました.本 記事にはオーガナイズドセッションの報告もまと めていただいたおりますので,是非ご一読ください. (鈴木 洋,村川 英樹)



図 1-1 神戸国際会議場の概観と看板

2. 国際ワークショップ(IWSEC)

2.1 概要

伝熱シンポジウムと併催して国際ワークショッ プを開催することとなった.テーマとしてはエネル ギーに関連したものとすることが実行委員会で示 され,OS「水素・燃料電池・二次電池」のオーガナ イザーに企画と運営が依頼された.「International Workshop for Sustainable Energy Conversion Systems 2024」としてワークショップを開催し,日本,中国, 韓国からあわせて4件の基調講演に加えて,14件 の一般講演があり,1日半をかけて実施された.

2.2 基調講演

最初に、産業技術総合研究所の前田哲彦氏より Evaluation of water electrolysis in renewable energy and development of hydrogen energy systems」と題し た基調講演が行われた.福島再生可能エネルギー研 究所における研究開発を中心として,再生可能エネ ルギーを用いた水電解システムの構築と評価につ いて,経緯と現状,さらに将来展望も含めた講演が なされた.初日の午後には清華大学の Jianbo Zhang 教授より「A nanofluidic reactor for pure water electrolysis with no Ir, no membrane, and no added electrolyte」として、電極をナノスケールにまで近接 させた場合に両極の電気二重層が重なることを利 用した,全く新しいコンセプトによる純水を用いた 水電解についての基調講演がなされた.二日目の午 前には、ソウル国立大学の Jungwon Park 准教授に $l \circ \tau$ [Real-time nanoscale observation of catalysts in energy conversion systems」と題して、触媒粒子の実 時間観察についての基調講演がなされた.ナノ粒子 への物質の挿入・脱離や溶解の過程などを捉えた最 新の結果が紹介された.午後には上海交通大学の Peng Zhang 教授より「Data-driven design and optimization of thermal energy storage system for heating and cooling applications」の基調講演が行われ, 蓄熱システムのデータ駆動型アプローチによる最 適化に関するこれまでの取り組みと最新の研究成 果が示された.

2.3 まとめ

基調講演に加えて、一般講演についても興味深い 発表ばかりであり、活発な質疑応答がなされた.最 新の研究成果について参加者が議論し、フィードバ ックと刺激を得たワークショップとなった.ワーク ショップの開催にご協力をいただいた皆様にあら ためて感謝いたします.

(津島 将司, 岩井 裕)





図 2-4 Prof. Peng ZHANG(Left)



図 2-5 講演会場の様子

3. 特別講演

第61回日本伝熱シンポジウム特別講演会は,公 開講座として,第62期総会の前に開催されました. 講師には神戸大学大学院工学研究科長の小池淳司 先生をお招きしました.小池先生のご専門は土木計 画学ですが,国土交通省や内閣府の委員を歴任され ており,また環境庁からも表彰され,都市計画や技 術政策にご意見を述べられる立場にある方です.ま た社会科学,科学哲学的なご研究を精力的に行われ ています.

今回は「研究者・技術者の教養」と題してご講演 を賜りました.「教養とは何か」.先生のご講演では まず教養について述べられました.「教養とは知識 の量ではなく,見識である.すなわち教養人とは常 識的価値判断ができる人である」,一方で「常識を 疑う常識を持つべきである」と述べられた.また「中 庸」についても言及され,本当の中庸は「固執しな い」しかし「同調もしない」ということであると講 演されました.先生のご講演内容は,研究者・技術 者が本来どうあるべきかを示唆しておられ,今後の 研究者の育成に関して指針を示されました.

小池先生の特別講演は非常に好評であり, 懇親会 にご出席された小池先生の周りには多くの参加者 が次々と意見を求めて訪れました. 小池先生には急 なお願いで特別講演をお引き受けいただき, また非 常に素晴らしいご講演を賜り, 実行委員会一同感謝 に耐えません. なお, 小池先生がアップロードされ た講義ビデオが YouTube (Atsushi Koike で検索する と表示される) に掲載されているので, ご興味があ る方は是非視聴されたい.

(鈴木 洋)



図 3-1 小池淳司先生



図 3-2 特別講演の様子

4. オーガナイズドセッション 4.1 OS1 乱流を伴う伝熱研究の進展

対流伝熱のセッションといえば,以前は乱流伝熱 (熱伝達)現象に関する発表が多くを占め、シンポ ジウム初日から一番大きな会場のひとつで,活況を 呈していたが、日本ではやや乱流伝熱研究が下火と なりつつあることから,その研究を再び活性化する ためと,企業の方々にも乱流熱伝達研究の重要性を 理解していただくために本 OS を立ち上げた. 今回 のシンポジウム開催地である神戸では,初日のF室 にて午前から午後にかけての3 セッションで基調 講演1件,研究講演13件の発表があった.基調講 演は、名古屋工業大学の服部博文氏による「乱流熱 伝達現象のモデリングと DNS | と題した講演が行 われた (図 4-1). この講演では, 乱流伝熱 (熱伝達) 研究に必須的な基礎事項の解説から始まり, 乱流熱 伝達現象を,モデリング手法を含めて数値解析する ために最重要事項となる乱流スケールに対して、そ の最小スケールが実際ではどれくらいになるかも 含めて解説がなされ、乱流熱伝達現象を数値解析す る困難さが紹介された.研究講演は、部屋一杯の聴 講者がいるなか,3 セッションに分けて行われた. 最初のセッションは主に数値計算による研究発表 が3件,次は機械学習と実験を含む研究発表が5件, 最後は実験と理論,数値計算の研究発表が5件あ り、これらの研究対象場の殆どが壁乱流であるこ とが、乱流熱伝達研究を象徴していた.しかし、 壁乱流に限らず、乱流を伴う熱(物質も含む)輸 送場は多く存在し、それらの現象解析や理解は、 理論構築,計測・計算技術も含めて困難を極める ため、本 OS が研究進展・現象理解の一助になれ ば幸いである.

(服部 博文,須賀 一彦,店橋 護,中村 元, 岩本 薫,服部 康男,塚原 隆裕,小田 豊)



図 4-1 基調講演の様子

4.2 0S2 熱エネルギー材料・システムのための 熱・物質輸送促進

本 OS は、熱エネルギー材料や熱に関するシステ ムにおける伝熱促進や物質移動促進に関して議論 を深めることを目的とし, 趣旨説明, 基調講演, 一 般講演 17 件の計 19 件の講演等が 2 日間にわたり 行われた.まず,セッションの冒頭でオーガナイザ ーの加藤之貴先生(東工大)から本 OS の趣旨説明 として,再生可能エネルギーを取り巻く現状と蓄熱 プロセスの位置づけ、最近の取り組みなどを概説い ただいた.また,基調講演として,中垣隆雄先生(早 稲田大)より、「カーボンニュートラルに向けたエ ネルギー貯蔵システムの役割」と題するご講演をい ただき、カーボンニュートラル社会実現に向けた政 策,および熱利用技術・プロセスに関する現状や展 望について解説いただいた. 一般講演では、マイク ロカプセル潜熱蓄熱材のペレット化技術および触 媒材料への展開,気固系化学蓄熱における蓄熱材開 発やシミュレーション, 伝熱促進, マイクロ波によ る非平衡プラズマによるメタン生成,熱交換面の形 状最適化, 音波を利用した熱移動促進, イオン液体 を利用した高真空下における冷却技術開発,磁性流 体による熱スイッチの研究など、いずれも興味深い 研究が報告された.総合討論の一つでは,講演者の 一人である藤井祥万先生(東大)から,発表された 研究の技術成熟度や、今後の社会実装に向けた課題 や展望について各発表者にコメントが求められ,議 論を深めるという挑戦的な取り組みがなされた.単 なる研究発表だけでなく,社会実装を見据えた議論 の場として大変有意義なものとなった.最近のカー ボンニュートラル実現へ向けた関心の高まりを反 映し,発表件数,参加者数とも増加傾向である.基 調講演を行っていただいた中垣先生をはじめ,発表 者の皆様,ご参加いただいた皆様に深く感謝申し上 げる.

> (加藤 之貴, 鹿園 直毅, 能村 貴宏, 中曽 浩一)



図 4-2 OS2 基調講演の様子

4.3 0S3 ふく射輸送とふく射性質

本 OS は日本伝熱学会特定推進研究課題「太陽光 エネルギー利用における伝熱工学の新展開」のメン バーが中心となり,毎年企画している OS で,ふく 射伝熱の発展に資する発表を幅広く募集している.

今回は基調講演1件,一般講演9件の計10件の 講演があり、シンポジウム2日目の5月30日に発 表が行われた.10件という多くの申し込みをいた だき,執筆者がオーガナイザーとなって初めて3セ ッションが組まれた.OSとは関わりないが、今回 の優秀プレゼンテーション賞の受賞研究のうち、3 件がふく射に関わるものだったことも相まって、ふ く射研究の盛り上がりを感じることができ、大変喜 ばしい出来事だった.

今回, OS 基調講演として, JAXA 宇宙科学研究 所の太刀川純孝先生に「次世代宇宙機用熱制御材料 の開発とふく射特性の測定」を講演頂いた.近年, 盛んとなっている宇宙開発からのふく射伝熱への 要望も含め,お話をいただき,立ち見が出るほどの 聴講者が集まり,大変な盛り上がりを見せた.お忙 しい中,講演をお引き受け頂いた太刀川先生に誌面 を借りて感謝申し上げます. 一般講演については、「ふく射」というキーワー ドのもと、基礎研究から応用研究、理学から工学分 野まで、幅広い内容の研究が集まり、活発な議論が なされた.

セッション1では、相変化材料である二酸化バナ ジウム VO2 によるパッシブなふく射制御に関する 研究2件、セッション2では、散乱性媒体のふく射 伝熱に関連した3件、セッション3では、メタマテ リアルのふく射伝熱への応用に関連した2件の発 表、多孔体太陽光集熱に関連した2件の発表があっ た.応用先にカーボンニュートラルを見据えた研究 が多かったのも興味深い.



図 4-3 盛況だった総合討論の様子

本年は、伝熱学会が主催となり、ふく射の世界的 研究者を招聘し、5th International Workshop on Nano-Micro Thermal Radiation(NanoRad2024)が7月に北 海道で開催される予定であり、世界各国から多数の 参加申し込みを受け、ナノテクふく射伝熱技術の社 会貢献が益々期待されるステージとなっている.

(江目 宏樹, 宮崎 康次, 櫻井 篤)

4.4 OS4 化学プロセスにおける熱工学

本 OS は、化学プロセス内で生じる伝熱現象、お よび熱移動制御によるプロセスの効率化や新しい プロセスの提案、エネルギー有効活用、カーボンニ ュートラル実現に向けた研究開発など、幅広く議論 する場として開催された.趣旨説明、基調講演2件、 一般講演8件の発表がなされた.まずセッション冒 頭で中曽(岡山大)より趣旨説明をおこない、続い て塚原保徳先生(マイクロ波化学(株))より「マ イクロ波化学プロセスのグローバルスタンダード 化」と題する基調講演を行っていただいた.マイク ロ波による加熱原理の基礎を解説いただき,マイク ロ波化学プロセスのスケールアップのための研究 開発事例などをご紹介いただいた.また,もう1件 の基調講演として,菅原武先生(大阪大)から,「エ ネルギー貯蔵媒体としてのクラスレートハイドレ ート」と題する基調講演を行っていただいた.クラ スレートハイドレートの基礎についてご説明いた だき,クラスレートハイドレートの特徴を活かした エネルギー貯蔵媒体および輸送媒体としての検討 例のほか,クラスレートハイドレート研究の今後の 展望などを丁寧に解説いただいた.一般講演では, マイクロ波加熱に関する無次元数の提案,輻射ヒー ターによる加熱の効率化に関する研究,化学蓄熱材 の開発,太陽光を利用した CO2分解反応技術検討,

鉄鋼スラグ中の CaO 分離回収に関する検討,火炎 を利用した複合触媒粒子合成の研究,プラスチック フィルム加熱融着の熱解析,3D プリンターで作製 したヒートパイプ開発のための沸騰熱伝達特性に 関する研究発表がなされ,いずれも興味深い研究報 告であった.シンポジウム最終日にもかかわらず, 参加者も多く活発な議論が交わされ,幅広い分野の 研究者が集まる大変有意義な機会となった.基調講 演を行っていただいた塚原先生,菅原先生をはじめ, 発表者の皆様,ご参加いただいた皆様に深く感謝申 し上げる.

> (中曽 浩一,春木 将司,小糸 康志, 松川 嘉也)



図 4-4 OS4 基調講演の様子(菅原 武先生)

4.5 OS5 水素・燃料電池・二次電池

本オーガナイズドセッションは,水素関連技術か ら燃料電池,電解,二次電池などエネルギー変換デ バイスに関する様々なトピックまで広くカバーし ており, 伝熱シンポジウムでは, 第43回(2006年) から名称を変えながら長年継続して企画・開催され ています. 過去 15年間の講演件数の推移を図4-5 に示します. 当初は, 燃料電池(PEFC, SOFC)関 係の話題が多くを占めていましたが, 近年では, 二 次電池(リチウムイオン電池, 金属空気電池, 全固 体電池, レドックス・フロー電池)や電解(PEMEC, SOEC)に関する講演が増加傾向にあり, 基調講演 を含め35件以上の研究発表が3日間にわたり活発 に行われています. また, 大学関係者のみならず企 業の方にご参加いただいているのも特徴として挙 げられます.

今回は、国際ワークショップ(IWSEC)と連携し て開催する運びとなり、期間は IWSEC後の 1.5 日 (2日目午後~3日目)に短縮されましたが、19件の ご講演をいただき盛会に開催されました(図4-6). 講演の内容は、水素の貯蔵・生成、燃料電池、水電 解、二次電池、全固体電池における反応輸送現象の 計測解析、各種セルの性能評価など多岐にわたって おり、触媒層や多孔質電極におけるミクロ現象から デバイスやシステムに至るマルチスケールな視点 で様々な取り組みが報告され、自熱した議論が繰り 広げられました.セッションにご参加いただいた講 演者、関係者の皆様には厚く御礼申し上げます.次 回も多数のご発表をお待ちしております.

(西田 耕介, 荒木 拓人, 伊藤 衡平, 岩井 裕, 田部 豊, 津島 将司, 徳増 崇)



凶 4-5 水素・燃料電池・ _ 次電池 OS における 講演件数の推移



図 4-6 講演会場の様子

4.6 OS6 液滴・濡れ現象の制御と理解

今年で3年目を迎える伝熱シンポジウムのオー ガナイズドセッション「Control and Understanding of Droplet and Wetting Phenomena (液滴・濡れ現象の制 御と理解)」は、今回初めて全体を通して英語で実施された.このOSの目的は、さまざまな工業的・ 科学的応用において重要な役割を果たす液滴の挙 動と濡れ現象の理解と制御における最新の研究を 議論することである.2日間にわたって21名の研 究者による発表が行われ、常に満席の聴衆を集める とともに活発な議論が交わされた.また、今年は3 名の基調講演者が登壇し、OS がさらに充実したも のとなった.



図 4-7 Zuankai Wang 教授(香港理工大学) による基調講演

1 件目は 2024 年度の抜山記念国際賞を受賞した 香港理工大学の Zuankai Wang 教授より, ライデン フロスト効果に関する興味深い研究結果を紹介い ただいた.濡れ性, 粗さ, 多孔性などの表面構造特 性を操作することで, ライデンフロスト温度を 1000℃ 以上に上昇させることに成功した成果など が披露された.このブレークスルーは液体による冷 却効率を高めるだけでなく,水やエネルギーハーベ スティングへの応用に新たな道を開くものであり, 出席者の間で大きな関心を集め,議論が交わされた.

2件目は北海道大学の村井祐一教授から,"壁乱 流中の気液二相流パターンと壁面性状走査の効果" について講演いただいた.気泡のダイナミクスと壁 面性状が熱伝達と摩擦特性をどのように大きく変 化させるかに関する研究成果の紹介があり,特にミ リバブルとマイクロバブルの影響や,伝熱システム の最適化におけるはっ水性コーティングと親水性 コーティングの役割が議論された.

3件目の九州大学の森昌司教授からは、沸騰現象 と水の電気分解のアナロジーに着目した研究につ いて講演いただいた.革新的なハニカム多孔質プレ ートを用いることで、沸騰時の限界熱流束と水電解 の臨界電流密度の両方が著しく向上することが紹 介された.このアプローチは効率を向上させるだけ でなく、異なる熱・電気化学プロセスに同様の物理 原理を適用するための貴重な洞察となっている.

さらに,大学院生やポスドクを含む多くの若手研 究者によって非常に興味深い研究結果が発表され, セッションを活気づけた.

これらの素晴らしい研究発表と質の高い議論に より、液滴と濡れ現象を理解・制御することの面白 さや、伝熱分野でみられる様々なトピックスにおけ る重要性が再確認された.今回のOSにより、基調 講演者3名の研究に代表されるように、液体の濡れ だけでなく、気体のダイナミックスも制御すること が研究の重要な方向性であることが示された.

本 OS の参加者の方々全員とご協力頂いた皆様に 感謝申し上げます.

(ムテルドゥ ティモテ,イ エリム,田川義之, 山田寛,塩見淳一郎)

4.7 0S7 燃焼伝熱研究の最前線

伝熱に関する研究分野の一つである燃焼工学分 野の学術的交流を促進することを目的とし,例年, 燃焼工学に関する OS「燃焼伝熱研究の最前線」を 開催している.今回,講演を募集したところ,内燃 機関,アンモニア燃焼,燃焼制御技術,燃焼計測技 術,数値解析手法,燃焼安全など幅広い研究トピッ クスに関する計 18 件の講演申し込みがあった.こ れらを 5 つのセッションに分けて 2 日間(5月 29 日,30日)に渡って実施した.当日は多くの方にご 参加いただき,質疑応答や自由討論なども活発に繰 り広げられ,盛況のうちに終えることができた.ご 参加いただいた皆様に厚く御礼申し上げます.次回 も多数のご発表とご参加を心よりお待ちしており ます.

(勝身 俊之, 佐藤 大輔, 鈴木 雄二, 店橋 護)



図 4-8 会場の様子

4.8 0S8 バイオ伝熱

本 OS は伝熱学会の研究会「細胞内熱ダイナミク ス研究会」の活動の一環として開催した.この研究 会は,異分野との交流による伝熱分野の課題開拓を 目的とした特定推進研究委員会の研究課題「細胞内 における熱・物理的環境」の活動終了後に設立され, バイオに関わる伝熱分野の課題の持続的な探索,お よびそのための伝熱学会員と生命科学・医学分野の 温度・熱に関わる研究者との交流窓口の役割を担っ ている.



図 4-9 バイオ伝熱 参加者の様子

本年度は、細胞温度生物学の第一人者である岡部 弘基博士(東京大学大学院薬学系研究科)に、基調講 演「単一細胞内の温度変動の発見と意義と機構」を お願いした.参加者は約20名で、同基調講演の他、 2セッションで5件の伝熱学会員による発表があっ た.特に、細胞内のナノスケールの熱的変化の測定 という刺激的な内容の基調講演に対して、多くの質 疑があった.生物分野に所属する基調講演の講師は、 当学会の質疑応答には全く忖度がないことや、伝熱 学会員が想像以上にバイオ(医療)に寄り添った内 容の研究をしていることに、感銘を受けた様子であ った.

(白樫 了,藏田 耕作)



図 4-10 バイオ伝熱 基調講演 岡部弘基 氏

5. 特別企画セッション

5.1 SS1 特定推進研究特別ワークショップ

特定推進研究企画委員会は 2012 年(平成 24 年) に設置され,社会の期待に応えるための社会的・科 学技術的課題,あるいは我が国の今後の成長分野に おける個別先鋭的な研究課題を客観的な根拠に基 づいて設定し,発信して参りました.毎年の伝熱シ ンポジウムにおいても,特定推進研究特別ワークシ ョップを開催し,委員会での活動内容を紹介してき ましたが,本年度は 10 年の活動の区切りとして, 以下のセッションを実施いたしました(以下,敬称 略).

E141 我が国の科学技術の変遷と将来展望 ーどうする伝熱工学 菱田 公一(明治大学),藤岡 惠子(ファンク)

ショナル・フルイッド),小澤守(関西大学)

E142 特定推進研究企画委員会が考えるこれから の伝熱工学の未来

- 「人と自然の共存社会実現のための伝熱工学」 小宮 敦樹(東北大学)
- 「社会的課題に向けた科学技術と工学」

花村 克悟(JST)

「医療,生命科学と伝熱工学」

白樫 了 (東京大学)

本ワークショップは,優秀プレゼンテーション賞 セッションと産学連携イベントと同時刻に併催さ れましたが,図 5-1 に示すように,本ワークショッ プにも多くのシンポジウム出席者に参加いただき, 盛況に開催することができました.

本年度のワークショップは、特定推進研究企画委 員会の10年の活動をまとめるものとして、伝熱工 学および伝熱学会の将来について参加者全員で考 えることを目的とした構成としました.ワークショ ップ前半では、日本伝熱学会元会長3名による将来 の伝熱工学に関するパネルディスカッションが行 われました(図5-2).ワークショップの後半では、 特定推進研究企画委員会の現メンバーによる各人 が考える伝熱工学の未来について3件の発表が行 われました.



図 5-1 ワークショップ会場の様子



図 5-2 パネルディスカッションの様子

冒頭に,特定推進研究企画委員会の鹿園直毅委員 長より,今回のワークショップの趣旨について説明 がありました.続いて,藤岡惠子先生よりパネルデ ィスカッションを行うことになった経緯が説明さ れ,菱田公一先生より日本学術会議での経験も踏ま えた日本の科学技術の変遷,および伝熱工学の将来 展望についてのお話がありました.人口減や国際競 争力低下といった構造変化の中で,危機意識を持っ て長年染みついた価値観を転換すべきとの問題提 起がありました.小澤守先生からは,国として強い 自前技術を育てることの重要性について,藤岡惠子 先生からは要素研究から脱却して社会課題につな がるシステムやプロセスまで研究をインテグレー トすることの重要性などが指摘されました.参加者 も含めた活発な議論が進められ,次世代で生き残る ための展望を考える有意義なパネルディスカッシ ョンとなりました.

ワークショップ後半では、まず小宮敦樹先生から、 2050年を見据えて「時間的つながり」、「空間的つ ながり」、「ヒトと環境のつながり」の観点から今後 求められる研究領域とキーワードの紹介がありま した.花村克悟先生からは、科学技術振興機構(JST) 研究開発戦略センター(CRDS)の紹介、および熱 効率55%超の内燃機関開発グリーンイノベーショ ン(GI)基金事業(NEDO)において、高い目標設 定が新しい研究開発を生むという実際の事例が紹 介されました. 白樫了先生からは、医療応用と生命 科学の概要の説明とともに、伝熱工学が寄与できる 領域を紹介いただきました.

本ワークショップにご参加いただきました皆様 に,特定推進研究企画委員会として御礼を申し上げ ます.

(鹿園 直毅, 田部 豊)

5.2 SS2 公開セッション「人と熱の関わりの足跡 (その7)」

第61回日本伝熱シンポジウムの2日目午後のこ のセッションは「研究会"熱事象の科学知・技術知" (主査 大久保英敏)」が企画した人と熱の関わりの 足跡をたどることを目的としたもので,通算7回目 にあたる.この一連のシリーズの公開セッションで は,様々な熱事象を取り上げ,あわせてそれらの詳 細について学会誌『伝熱』上で「ヒストリーQ」と して報告してきた.今回の内容についても同じく学 会誌に投稿する予定であるが,それに先立ってシン ポジウム実施報告の枠組みのなかで講演の概略を 取りまとめておく. 今回の公開セッションは、シンポジウム開催担当 が関西支部であったことから企画内容は関西特に 京阪神地区に関わるものとした.具体的には、気液 二相流研究が第2次世界大戦終了後まもなく大阪 と神戸で開始されたこと、また大阪は明治末期から 産業用の中小容量ボイラ、特に丸ボイラの我が国に おける製造拠点であったこと、さらに関西地区には 信楽焼、伊賀焼、丹波焼など多くの陶磁器製造の拠 点があり、中でも京文化の中で育まれた感覚と多様 性を特徴とする京焼の拠点は京都であることなど を背景(若干こじつけではあるが)として、セッシ ョンの内容を次のように決定した.

F231 "ボイラの水循環と気液二相流研究の展開" *小澤守(関西大学)

F232 "ボイラ製造における職人技-ボイラ屋の意 気込みと心意気" *木下正成(㈱ヒラカワ),小澤 守(関西大学)

F233 "陶芸における熱-土変じて珠玉と成す" 村 田眞人 (井筒屋亀水窯), *藤岡惠子 (ファンクショ ナル・フルイッド (*は講演者)

最初の F231 は戦後すぐに大阪大学および神戸大 学を中心としてボイラの水循環研究が行われ,その 基礎として気液二相流研究がスタートした.水循環 研究は気液二相流の時間平均特性研究につながり, これらさらに二相流の詳細機構,統計的性質,貫流 ボイラの開発に関わった動特性研究から不安定流 動研究へと発展した.講演ではそれら二相流研究の 展開を時系列的に概説した.

F232 の講演は,産業用ボイラ製造企業において 60 余年にわたってボイラ製造に関わってきた講演 者によるもので,我が国における中小ボイラ製造の 黎明期から 1950 年代に至るボイラ製造現場を紹介 した内容となっている.溶接など製造技術が進化す る以前のリベット接合や鍛造,穴あけ作業などもの づくりに関わった職人技を概観し,ものづくりの基 本を垣間見たように思う.

最後の F233 では、陶磁器製造過程,なかでも登 り窯の特徴について実例を交えながら解説した.薪 を用いた登り窯では薪の成分や灰が関与して複雑 な窯変と呼ばれる色や質感の変化があること,長い 焼成時間をかけることにより釉薬が素地に拡散し て素地と釉薬の境界が広くなり、出来上がりに奥行 きがでること、焼成方法としての酸化雰囲気/還元 雰囲気,焼成時間,急冷/徐冷に応じて、釉薬をかけ なくても生地成分の化学変化によってさまざまな 色と質感を呈することなど, 陶芸において熱を扱 う多彩な手法が生み出す美術的効果を紹介した.

このセッションの様子を写真に示しておく.セッションには 50 余人の参加があった.筆者の講演が時間超過したため,残りの 2 件の講演者には迷惑をかけてしまったこと,そのため参加者からの質問など受ける時間がなくなったことなど問題なしとは言えないが,それぞれ興味深い内容となった.現在の伝熱工学・伝熱技術は過去の長期にわたる歴史に立脚しており,そのような研究や技術の流れを知ったうえで将来を展望することの重要性,さらには我々がそれと認識していない領域でも熱技術が重要な役割を果たしていることなどに対する認識が深まった 90 分間であった.

(小澤 守)



図 5-3 公開セッションの様子

5.3 SS3 企業特別セッション「関西地区企業によ る部品開発・技術開発の紹介」

産学交流委員会では,毎年,シンポジウム2日目 午前に,シンポジウム開催地区の地元企業をお招き したセッションを企画しています.シンポジウム登 録参加者だけでなく,一般の方も参加可能な公開セ ッションとし,シンポジウム開催地区の企業の社業, 技術,取り組みを学ぶとともに,総合討論を通じて 伝熱に関する新たな気づき,繋がりを得ようという 趣旨で開催しています.

今年は、「関西地区企業による部品開発・技術開 発」と題して、2セッションで構成し、大阪に本社 を置く企業2社(うち1社は神戸にR&Dを置く企業)、 地元神戸に本社を置く企業2社からご講演頂きまし た.いずれのご講演も40~50名前後の方々に聴講頂 きました(図5-4).

講演題目等は、以下の通りです.また、講演者の 集合写真を図5-5に示します.ご講演者の皆様には、 快くご講演をお引き受け頂き,深く感謝申し上げま す.



図5-4 企業特別セッション会場の様子



図5-5 講演者との集合写真 (左から、日本カノマックス 塩崎様、エスペッ ク 田中様、バンドー化学 高原様、及川様、旭光 電機 和田様、本セッション主担当 西、小泉)

- (1)「環境試験分野における伝熱技術の活用」 エスペック株式会社 事業開発部 部長 田中 浩和 氏
- (2) 「点計測からハイスピード立体計測へ -高速 演算,リアルタイム処理可能な熱・流体計測技術 のご紹介-」

日本カノマックス株式会社 流体計測事業部 ディヴィジョンマネージャー 塩崎 康弘 氏

(3)「バンドー化学における熱マネジメント製品開 発」

バンドー化学株式会社 新事業推進センター イノベーション推進室長 及川 征大 氏 営業部電子資材第一営業グループ長

高原 雄介 氏

(4)「熱情報と熱電発電のIoT事例」旭光電機株式会社 代表取締役社長和田 貴志 氏

(西 剛伺, 小泉 雄大)

5.4 SS4 モノづくりセッション

産学交流委員会では、シンポジウム初日夕刻に、 モノづくりセッションを企画し、運営させて頂きま した.昨年まで実施されていた産学交流ポスターに 代わる,産学交流の活性化を目的とした新たな試み です.

冒頭の趣旨説明では、まず本学会の企業会員の現 況について説明がなされました.現在、企業所属の 正会員数は、正会員全体の44%を占めますが、企業 所属の正会員によるシンポジウムでの講演数は全 体の10%前後(前回の福岡開催では7%、今回の神 戸開催では13%)に過ぎません(図5-6).そこで、 企業所属の研究者、技術者にとって、講演しやすい、 もしくは講演したくなるセッションを目指し、本セ ッションを企画しました.研究そのものは、一般セ ッションもしくはOS でご発表頂き、それ以外の熱 に関わる各社の社業や取り組みについて、本セッシ ョンでご紹介頂くという趣旨です.



図 5-6 セッション趣旨説明の様子

初めての試みではありましたが、多くの企業にご 賛同頂き、3つのセッション計14社の発表で構成 しました(表 5-1).本セッションは優秀プレゼンテ ーション賞セッション、特定推進研究特別ワークシ ョップと同時刻に併催されましたが、会場は非常に 活況で、いずれのセッションも90名前後のご参加 を頂くことができました(図 5-7). 発表内容は多種 多様で,さまざまな熱関連技術が,さまざまなアプ リケーションで生かされていることを知ることが できる機会となりました. 聴講者の方々にとっても, 社会実装,技術の出口の観点から新たな気づき,繋 がりが得られたのではないかと思います. セッショ ン後には発表企業の皆様と産学交流委員で意見交 換会を開催し,大いに盛り上がりました.

(元衣順)			
企業名	題目		
シーメンス	ROM 技術を利用した熱解析モデルの		
	企業間共有		
日本製鉄	熱処理プロセスの数値解析モデルの		
	開発		
デンソー	制御用コンピュータに必要な半導体		
	の伝熱解析モデル		
日立製作所	データ駆動モデリング技術の開発		
東京電力ホー	空間サーモグラフィを用いた乾燥工		
ルディングス	程のデジタルトランスフォーメーシ		
	эン		
ベテル	新規熱伝導材料に最適な多機能熱拡		
	散率測定装置の開発		
東亜電気工業	サーバールームの熱問題に対応した		
	RDHx 導入のご提案		
富士高分子工	FUJIPOLY が提供する熱伝導性複合		
業	材料の紹介		
日本ガイシ	選択波長赤外線による新規プロセス		
	の構築		
スタンレー電	UV-C LED 水除菌リアクターの熱設		
気	計技術		
Wave	㈱Wave Technology における熱設計の		
Technology	取り組み		
KOA	電子機器における熱設計コンセプト		
	の変化と電子部品メーカの提案		
レゾナック	レゾナックの熱マネジメントソリュ		
	ーションのご紹介		
WELCON	マイクロチャネル構造を適用した高		
	性能熱交換器		

表 5-1 モノづくりセッション発表企業一覧 (X本書)(1)

来年のシンポジウムでも,同様のセッションを企 画予定ですので,ご興味をお持ちの企業の方は発表 をご検討頂ければ幸いです.

(近藤 義広,西 剛伺)



図 5-7 モノづくりセッション会場の様子

6. 優秀プレゼンテーション賞セッション

優秀プレゼンテーション賞(Best Presentation Award: BPA)セッションは、伝熱シンポジウムの付 帯イベントとして例年シンポジウムの初日にポス ター形式で開催しております.28歳以下の若手研 究者や学生会員が伝熱シンポジウム参加者に自身 の研究を紹介し、時間をかけた議論と発表技術に磨 きをかける場を提供するセッションとして位置づ けており、学生会委員会と現地実行委員会により企 画・運営されております.過去を遡りますと、平成 15年(2003年)5月に広島国際会議場で開催され ました第40回日本伝熱シンポジウムにて初めて 「学生プレゼンテーション賞セッション」(第41回 より現在の「優秀プレゼンテーション賞セッション」 に改称)がプログラムされており、ここから数えて 本年度は22回目の開催となります.

本年度の優秀プレゼンテーション賞セッション は、昨年の第60回伝熱シンポ(福岡)同様,完全 対面開催となりました.特に今回は,現地の実行委 員会,および会場となった神戸国際会議場の多大な ご協力をいただきまして,図6-1に示すような盛会 なセッションとなりました.なお今回より,BPAが すでに伝熱シンポ参加者に十分認知されている点 を考慮し,アピールスライドの実施を取りやめての 実施としております.

会場では、工夫を凝らしたポスターの数々が展示 され、中には iPad を利用した動画を含んだプレゼ ンテーションも見られました.会場では、大学の先 生や企業の研究者からの質問だけではなく、発表の 学生同士での質問や討議が活発に行われておりま した.講演申込数は54件で、そのうち1件は事前 にキャンセルの申し出があったことから、今回は 53件が審査対象となりました.この件数は、ここ 12 年間の中では最高の件数であります. 今回も 1 発表につき5名の審査員による厳正の審査の結果, BPA08 高橋 諒旭 (京都大), BPA10 高橋 匠 (山形 大), BPA14 ランザトゥソン メッシー (九州大), BPA27 畑中 健太 (九州工大), BPA32 王 暁晗 (東 工大), BPA43 川合 晃生 (東京大), BPA52 高木 松 誠 (東北大) (敬称略, 発表番号順) の7名が優秀 プレゼンテーション賞を受賞しました. (本誌の「優 秀プレゼンテーション賞 受賞者」の記事もご覧く ださい.) 受賞者7名は、シンポジウム2日目の総 会時に受賞の紹介と賞状の授与がシンポジウム実 行委員長の神戸大学 鈴木洋 先生から行われると, 記念撮影が行われました (図 6-2).



図 6-1 BPA セッション会場の様子



図 6-2 鈴木実行委員長との記念撮影

最後になりましたが、本セッションを開催するに あたり、優秀プレゼンテーション賞の審査員の先生 方、名古屋大学 上野藍 先生学生会委員会幹事をは じめとする学生会委員会委員の先生方、伝熱シンポ ジウム実行委員会の先生方に大変お世話になりま した.この場をお借りして篤く御礼を申し上げます. (春木 直人)

7. 一般セッション

ー般セッションでは合計 145 件のご発表を頂戴 しました. 講演会場の様子を図 7-1 に, セッション の内訳を表 7-1 に示します.

また,今回から一般セッションに編集委員会委員 を設置することとなり,実行委員会の負荷軽減とプ ログラム編成を円滑に進めることができました.表 7-2に委員のお名前(敬称略)を記載させていただ きます.

皆様の温かいご支援により,一般セッションを無 事終えることができましたこと心よりお礼申し上 げます.

(木村 文義)



図 7-1 一般セッション会場の様子

表 7-1 一般セッションの内訳

沸騰・凝縮(Boiling and condensation)	30	
電子機器の冷却		
(Cooling of electronic equipment)		
強制対流(Forced convection)	9	
ヒートパイプ (Heat pipe)	6	
多孔質内の伝熱	4	
(Heat transfer in the porous media)	4	
物質移動(Mass transfer)	4	
計測技術(Measurement technology)	6	
融解・凝固(Melting and solidification)	11	
分子動力学(Molecular dynamics)	14	
混相流(Multiphase flow)	3	
自然対流(Natural convection)	5	
自然エネルギー (Natural energy)	4	
空調・熱機器		
(Air conditioning and Thermal equipment)		
熱物性(Thermophysical properties)	3	
ナノ・マイクロ伝熱		
(Nano and micro heat transfer)		

沸騰・凝縮	梅川 尚嗣 (関西大)
電子機器の冷却	河南 治(兵庫県立大)
強制対流	稲岡 恭二 (同志社大)
ヒートパイプ	杉本 勝美(神戸大)
多孔質内の伝熱	桑田 祐丞(大阪公立大)
物質移動	堀江 孝史(大阪公立大)
計測技術	栗山 怜子(京都大)
融解・凝固	岡野 泰則(大阪大)
分子動力学	芝原 正彦(大阪大)
混相流	塩見 洋一(龍谷大)
自然対流	金田 昌之(大阪公立大)
自然エネルギー	松本 亮介 (関西大)
空調・熱機器	浅野 等(神戸大)
熱物性	木下 進一(大阪公立大)
ナノ・フィカロ仁執	巽 和也(京都工芸繊維
ノノ・マイクロ仏然	大)
熱音響	田中 誠一 (明石高専)

表 7-2 一般セッション編集委員会委員

8. 機器展示·広告

機器展示・カタログ展示・プログラム冊子への広 告掲載を募集し,多くの企業から申し込みを頂きま した.以下にご協力頂いた企業をご紹介いたします (敬称略).



図 8-1 機器展示の様子

【機器展示】

英和株式会社, ニイガタ株式会社, 株式会社サーモ グラフィティクス, 西華デジタルイメージ株式会社, サイエンスエッジ株式会社, 九州計測器株式会社, 株式会社テクトロニクス&フルーク, 日本カノマッ クス株式会社, ダンテック・ダイナミクス株式会社, 株式会社フォトロン, 株式会社 JSOL JMAG ビジネ スカンパニー 【カタログ展示】 株式会社ベテル 【広告】 大阪ガス株式会社,川崎重工業株式会社 【協賛】 華為技術日本株式会社 (菰田 悦之,河南 治)

9. 意見交換会

意見交換会は、本シンポジウム2日目の18時15 分から20時15分まで、講演会場に隣接する「神戸 ポートピアホテル」の大輪田の間で開催されました。 直前まで当日参加を受け付けることもあり、参加人 数の増減にも対応が容易な立食ビュッフェ形式で 意見交換会を実施しました。関西地区が前回担当し た2016年の第53回日本伝熱シンポジウムでは、国 の重要文化財である大阪市中央公会堂で実施した こともあり、火気使用の制限があるなど各種手配が 大変だった記憶がありますが、今回はホテル宴会場 での開催であり、事前の打ち合わせから当日の運営 まで大変スムーズに行うことができました。

会場としては合計で1343m²になる二間を貸し切 り、270名程度の参加者を想定した料理とフリード リンクを準備しました.また日本三大酒処の灘を擁 する神戸での開催ということで,地元で人気の酒屋 に選定を依頼して兵庫, 滋賀, 奈良, 大阪, 和歌山 の銘酒 15 本を実行委員会で準備し、参加者の皆様 にお楽しみいただきました.日本酒の前日持ち込み から適温での保管,当日サービスまで快く引き受け て頂いた神戸ポートピアホテルのご厚意に感謝す る次第です.当日までに受け付けた参加者の人数は 278 名でした.意見交換会の流れとして、まず初め に集合写真の撮影を行いました (図 9-1). 撮影を担 当した松本亮介氏(関西大)の掛け声もあり、参加 者の皆様が良い笑顔をされているのが印象的です. 会は実行委員長の鈴木洋氏(神戸大)のご挨拶から はじまり、続いて第62期日本伝熱学会会長の平井 秀一郎氏 (東工大)よりご挨拶と乾杯のご発声を頂 きました. 伝熱シンポジウムの参加者は食欲旺盛で あることをホテル側に事前に伝えていたこともあ り,途中で料理が切れることもなく会の終盤まで参 加者同士の活発な交流が続きました(図 9-2).なお、 参加者同士の交流に多くの時間を費やしたいとの 思いを引き継ぎ,昨年度と同様に出し物や受賞者に

よるスピーチは実施しませんでした.

閉会にあたり第 63 期日本伝熱学会会長の須賀一 彦氏(大阪公大)からご挨拶と共に学会運営に対す る抱負が語られました.最後に,来年度に沖縄で開 催予定の第 62回日本伝熱シンポジウムの実行委員 長である店橋護氏(東工大)から開催概要について ご案内を頂き,会は終了しました.

最後になりましたが、ご参加頂いた皆様のご協力 により、意見交換会を無事に終えることができまし たことを心よりお礼申し上げます.

(小田 豊)



図 9-1 意見交換会での集合写真



図 9-2 歓談の様子

10. 実行委員会

実行委員は、神戸大学を中心とした関西圏の大学、 伝熱学会関西支部に縁の深い企業から選出された メンバーが担当しました.

実行委員会の新しい取り組みとして,これまでよ りも伝熱学会本部事務局と業務を分担するように 努めましたが,実行委員の負担は依然として大きく, 今後のためにも改善が望まれます.

これまでの項目に記載のなかった実行委員の業務としては、受付や当日運営がありました.これら

の業務は参加者のご協力,アルバイト学生の協力も あり,大きな問題はなく進みました.

第 61 回日本伝熱シンポジウム実行委員会 顧問

- 小澤 守(関西大学)
- 片岡 邦夫 (関西化学機械)
- 藤岡 惠子 (ファンクショナル・フルイッド)

-		=
へ	— -	<u> </u>
	炅,	IX.

鈴木 洋(神戸大学)

副委員長

浅野 等(神戸大学) 芝原 正彦(大阪大学)

幹事

村川 英樹 (神戸大学)

委員

朝熊 裕介 (関西大学) 網 健行 (関西大学) 有澤 秀則 (川崎重工業) 石田 駿一(神戸大学) 今井 陽介(神戸大学) 伊與田 浩志 (大阪公立大学) 梅川 尚嗣(関西大学) 大村 直人 (神戸大学) 岡野 泰則 (大阪大学) 小田 豊 (関西大学) 金田 昌之(大阪公立大学) 河南 治 (兵庫県立大学) 木下 進一 (大阪公立大学) 木村 文義 (兵庫県立大学) 熊野 智之(神戸市立工業高等専門学校) 栗本 遼(神戸大学) 栗山 怜子 (京都大学) 桑田 祐丞 (大阪公立大学) 菰田 悦之(神戸大学) 篠崎 健(三菱電機) 杉本 勝美(神戸大学) 鈴木 崇弘 (大阪大学) 高垣 直尚 (兵庫県立大学) 巽 和也(京都工芸繊維大学)
田中 誠一 (明石工業高等専門学校) 寺井 航 (ダイキン工業) 寺西 一浩 (積水ハウス) 西田 耕介 (京都工芸繊維大学) 羽田 哲(三菱重工) 林 公祐(神戸大学) 日出間 るり(名古屋大学) 廣川 智己 (兵庫県立大学) 廣津 誠(ノーリツ) 藤澤 亮(神戸製鋼所) 藤原 邦夫 (大阪大学) 細川 茂雄(関西大学) 堀 司 (大阪大学) 堀江 孝史(大阪公立大学) 增田 勇人 (大阪公立大学) 松本 亮介 (関西大学) 山口 恭平 (Hitz 日立造船) 山口 義幸 (兵庫県立大学) 若林 努 (大阪ガス)

IWSEC2024 実行委員会

岩井 裕(京都大学) 津島 将司(大阪大学) (村川 英樹,日出間 るり)

11. あとがき

第61回日本伝熱シンポジウムは前回に引き続き,全面対面で行うことが出来ました.ご参加いただきました皆様には大変感謝しております.また現地実行委員会の方々のみならず,オーガナイ

ズドセッションや特別セッションのお世話をい ただきました方々にも、大変お世話になりました. 従来これらのセッションのご報告は,会誌「伝熱」 にすべては記載しておりませんでしたが、今回、 OS の紹介も兼ねて、記事の執筆をご依頼させて いただきました. 各オーガナイザーの方には, 快 くお引き受けいただき,ありがとうございました. また,今回から伝熱学会事務局の方には経理面を 含めて,全面的な協力体制をとっていただきまし た.ご協力感謝致します.また前前回の岐阜およ び前回福岡でのシンポジウムをご担当いただき ました先生方には、様々な点で、有益なアドバイ スいただきました.大変感謝しております.また 学生委員会, 広報委員会, 産学連携委員会, さら に企画部会の委員の皆様にも多大なご協力をい ただきました. さらに一般セッションの講演プロ グラム作成に関しては,実行委員会以外の関西支 部の先生方にもご協力いただきました. 加えて今 回は国際セッション(IWSEC2024)を行いました が、中国・韓国および日本の先生にご講演をいた だきました. 大変貴重なご講演ありがとうござい ました. 最後に本当に急なお願いをさせていただ いたにもかかわらず、素晴らしい特別講演を賜っ た小池淳司先生に,深く感謝いたします.

以上のように本シンポジウムを支えてくださ った皆様に感謝するとともに、今後とも素晴らし い伝熱シンポジウムが継続されることを祈念い たします.

(鈴木 洋)

優秀プレゼンテーション賞 受賞者 - 第 61 回日本伝熱シンポジウム – Best Presentation Award

- 61st National Heat Transfer Symposium of Japan -

令和6年5月29日に神戸市(神戸国際会議場) で開催された日本伝熱学会総会において,第61 回日本伝熱シンポジウム優秀プレゼンテーション 賞(Best Presentation Award: BPA)セッションで発 表を行い,優秀プレゼンテーション賞を受賞され た方々の表彰式が行われました.受賞者および優 秀プレゼンテーション賞セッションと表彰式の様 子をご紹介させていただきます.

2024 年度 受賞者

- ◆ 高橋 諒旭【京都大学】 高純度半導体型カーボンナノチューブ薄膜に おける励起子熱放射の計測
- ◆ 髙橋 匠【山形大学】 PNIPAM ゲルを用いた自律型スペクトルスイ ッチングコーティングの解析による最適設計
- ◆ ランザトゥソン メッシー【九州大学】
 BaSO4 スクリーン印刷塗布膜の放射スペクトル
- ◆畑中健太【九州工業大学】 蛍光熱顕微鏡と干渉計を用いた三相界線にお ける蒸発熱輸送特性の研究
- ◆ 王 暁晗【東京工業大学】 三種類の骨格異性体を発現する共有結合性有 機骨格の創出
- ◆川合晃生【東京大学】 短波長赤外顕微分光による氷点下水溶液中の 水分子の水素結合状態と回転緩和時間の測定
- ◆ 高木 松誠【東北大学】 自然対流伝熱促進への応用を目的とした音響 ストリーミング流が熱・物質伝達促進に与える 影響の評価

(順不同)

学生会委員会幹事 上野 藍(名古屋大学) Ai UENO (Nagoya University) e-mail: ueno.ai.b4@f.mail.nagoya-u.ac.jp



BPA ポスター会場風景



鈴木実行委員長との記念撮影

今回の BPA セッションは昨年の第60回伝熱シ ンポ(福岡)同様に完全対面開催となり過去最多 となる53件のポスター発表がありました.審査は 今年からアピールスライドが廃止され,ポスター 発表(質疑応答含む)を評価対象として行われま した.

ポスター発表会場は終始盛況であり,発表者は 日ごろの研究成果に対する参加者からの多岐にわ たる質問に対し,様々な趣向を凝らしながら積極 的な議論がなされていました. 特集「熱輸送のスペクトル学的理解」にあたって

Preface to "Thermal Science for Spectral Energy Transport"

志賀 拓麿 (産業技術総合研究所) Takuma SHIGA (National Institute of Advanced Industrial Science and Technology, AIST) e-mail: takuma.shiga@aist.go.jp

本特集「熱輸送のスペクトル学的理解」は、花 村克悟研究総括のもと、2017 年から 2023 年にわ たって展開された科学技術振興機構(JST)のさ きがけ「熱制御のスペクトル学的理解と機能的制 御(略称:熱制御)」に基づいています.本特集で は、全26名のさきがけメンバーの熱制御に関する 研究の中から、「スペクトル学的理解」に関わる研 究トピックを紹介します.

エネルギーハーベスティングや電子デバイスの 放熱など,熱制御の需要はブロードですが,拡散 性の強い熱を制御することは容易ではありません.

(私なりの解釈ではありますが)さきがけ熱制御の「スペクトル学的理解」のメッセージは、これ までに諸先輩方が培った熱輸送の理解をさらに深 め、熱輸送の原理原則に立脚したロバストな熱制 御メカニズムを創発せよ、ということだと考えて います.そのためには、理論・数値解析、計測、 観測の3つの要素を用いて、熱輸送を包括的に理 解することが大切です.本特集では理論・数値解 析、材料と計測、そして観測の3つのテーマにお いて、先端研究をリードする4名の先生に記事を 執筆していただきました.

大阪大学の南谷英美氏からは、第一原理の枠組 みで、ボルツマン輸送の描像に基づいた電子・格 子相互作用によるジュール発熱の素過程を計算す る手法と、その応用例としてシリコン中の電子と ホールのジュール発熱過程の違いを紹介いただき ました.運動量およびエネルギー空間における電 子(ホール)とフォノンの散乱の知見は、今後、 ますます重要となる電子デバイスの放熱にアプロ ーチすることに役立ちます.

名古屋大学の原田俊太氏からは,酸素欠損量を 調整することで面欠陥の周期配列を変化させた酸 化チタン自然超格子の界面構造の完全性と,周期 的な界面におけるフォノン熱輸送の波動性一粒子 性クロスオーバー発現を紹介いただきました.フ オノンの波動性を利用して熱制御を行うフォノン エンジニアリングでは、精密な構造周期制御とバ ルク化が重要になります.自然超格子はバルク結 晶中にコヒーレントな界面を形成することが可能 であり、高度なフォノンエンジニアリングにおい て有用です.

物質・材料研究機構の吉川純氏からは,電子エ ネルギー損失分光法でフォノンを計測する手法と, 異種材料界面に現れるフォノンモード観測,さら にナノメートルオーダーの局所空間の温度計測の 応用を紹介いただきました.電気的または光学的 な熱物性計測手法が一般的になる中で,フォノン 輸送を空間的に可視化する本技術はフォノン熱輸 送を立体的に理解するために必要です.測定結果 は身の回りの界面における複雑なフォノン輸送の モデリングにも役立ちます.

大阪大学の藤原邦夫氏からは、オイラー型の場 の物理量として熱流束を解析・可視化する技術の 解説と、固体一液体界面における熱輸送メカニズ ム解明への応用を紹介いただきました.時間や空 間スケールが熱輸送特性のスケールと同程度にな ると、原子スケールで輸送量を定義し直す必要が あります.構築された解析技術により得られる熱 流束場の描像は固液界面の熱輸送を理解するのに 有用です.

本特集号で取り上げた「スペクトル学的理解」 に関わる理論・数値解析,材料合成,熱物性計測, 熱輸送観測の先端研究が有機的に結びつくと,時 間や空間において熱を自在に操る技術の開発につ ながります.このような多彩な研究が創出された のも,ひとえに総括の花村先生をはじめ,領域ア ドバイザーのおかげです.

最後に4名の先生にはご多忙のところ本特集号 の執筆をお引き受けいただきました.この場を借 りて感謝申し上げます. 単色化電子顕微鏡を用いたフォノン計測 Phonon measurements using a monochromated electron microscope

1. はじめに

熱輸送をナノメートル・スケールで制御する技 術開発が重要な課題となっている.そのためには, 絶縁体や半導体における熱キャリアであるフォノ ン(格子振動)のヘテロ界面や粒界での輸送機構 をナノメートル・スケールで理解することが重要 であり、フォノン輸送を計測する技術の開発も必 要である. 著者は JST さきがけ「熱輸送のスペク トル学的理解と機能的制御」に採択された 2018 年から, 直径 nm 以下の電子プローブでフォノン を波数分解して計測する技術の開発に取り組んで きた [1]. フォノンの輸送機構を理解するうえで, 波数分解したフォノンの数(強度)や進行方向, 振動モードなどを界面近傍で計測する必要がある と考えた.具体的には、透過電子顕微鏡内で直径 約 1-3 nm の単色化された電子ナノプローブを試 料上で走査し、電子エネルギー損失分光(electron energy loss spectroscopy: EELS) でフォノンを計測 する手法を用いる. 試料を透過した電子を用いた EELS は 1940 年代に開発されたが [2], 電子顕微 鏡で振動分光が報告されたのは2014年である [3]. 10年たった今でも、フォノンや分子振動に関して 何をどこまで計測できるか、どうやって計測すれ ば良いか、など十分に理解されているとは言い難 い.本稿では、フォノンの輸送を計測する技術開 発の観点から,装置構成や計測原理,計測例につ いて説明する.

2. 計測装置の構成

装置の主な構成は、透過電子顕微鏡をベースとして、電子分光器(モノクロメーターと EELS 分 光器)と EELS 検出器である.図1に装置写真と 模式図を示す.通常の透過電子顕微鏡の電子銃の エネルギー広がり(半値幅)は 0.3~1 eV 程度で あり、振動分光は難しい.EELS は通常、数 eV~ 2 keV の範囲で吸収端やプラズモン、バンド間遷 吉川 純(物質・材料研究機構) Jun KIKKAWA (National Institute for Materials Science) e-mail: kikkawa.jun@nims.go.jp

移を分光して,元素や化学結合状態,誘電特性な どを評価する手法である [2].電子銃直下にモノ クロメーターを設置してエネルギー広がりを 1/30 以下にすることで,振動分光が可能になる.あと は検出時に分解能が落ちないよう,検出器が高感 度で低ノイズであることや,同一のエネルギーと 運動量を持つ電子が検出器にヒットする位置がブ レないよう装置への外乱(機械振動,電磁場,電 気ノイズ)を抑えることも重要である.著者が使 用している装置(図1)は最高で約12 meVのエネ ルギー分解能を達成しており,実用上も約20 meV が可能である.X線や中性子を用いた非弾性散乱 や同じ EELS でも反射型 EELS [4]と比べると,透 過電子顕微鏡での EELS はエネルギー分解能の点 で劣るが位置分解能が高いのが最大の利点である.





3.入射電子のフォノンによる散乱機構

3.1 計測の原理

試料に入射した電子は、フォノンを生成(励起) してエネルギーを失って(energy loss) 散乱され る場合に加えて、すでに熱励起されているフォノ ンを消滅させてエネルギーを得て(energy gain) 散乱される場合があり、その割合は温度に依存す る [5]. 簡単のため、1 個の入射電子が1 個のフォ ノンを生成または消滅して試料から出射する場合

を考える.図2に入射電子の散乱ダイヤグラムを 示す.1個の入射電子と1個のフォノンの間で、 エネルギーと結晶運動量が保存される.入射電子 のエネルギー(E₀), 散乱後の電子のエネルギー (E'), エネルギー損失量 (*ΔE*), 散乱ベクトル (q), フォノンのエネルギー (*E*_{ph}), 波数ベクトル (**p**) とすると、エネルギー保存則より $E_0-E' = \Delta E = E_{ph}$, 結晶運動量保存則より-q=G+p となる. ここで, G は結晶の逆格子ベクトルであり、p はブリルア ンゾーン内で定義される. *ΔE*= *E*_{ph}はフォノンが生 成する場合は正, 消滅する場合は負の値になるの で,フォノン消滅は EELS スペクトルの負側で観 測される. 散乱ベクトル q を通してフォノンの波 数ベクトル p がわかるので, EELS の q 依存性を 計測すれば、フォノンのエネルギーと波数ベクト ルの関係(分散関係)を測定できる [6]. 実際に 透過電子顕微鏡で測ることができるのは、電子の 入射方位に対して垂直方向のq成分(q」)依存性 である.垂直成分についての結晶運動量保存則は, $-q_{\perp}=G_{\perp}+p_{\perp}$ と書け、つまり測ることのできるフ オノンの波数ベクトルは垂直成分(p」)である. このとき、 G_{\perp} は二次元の逆格子ベクトルとなり、 そのベクトル座標は電子回折パターンからわかる. 図 2 では、111 点を g と表記している. 所望の逆 空間方向のフォノンを計測するには、入射電子方 位に対して試料を傾斜する.



図2 EELS によるフォノン計測の原理.

典型的なフォノンの寿命はピコ(10⁻¹²)秒であり、入射電子ビームの電流密度が小さいときは、1 個の入射電子がフォノンを生成して次の入射電子が来るまで(数ピコアンペアで10⁻⁸秒)にはフォ ノンは緩和している.この場合,入射電子による フォノン生成のみによってフォノンの数が増える, つまり試料温度が上昇することはないと考えられ る.通常の EELS の実践的な時間分解能はミリ秒 であり,平衡系のフォノンを計測していることに なる.フォノンの生成や輸送,消滅,電子系との 相互作用などのダイナミクスを捉えるにはフェム ト秒の時間分解能が必要になる.ミリ秒では動的 過程は捉えられないが,非弾性散乱電子を通して フォノンの生成・消滅を数え上げることはできる.

3.2 散乱機構: 双極子散乱と衝突散乱

図3に示すように、入射電子のフォノン生成・ 消滅を伴う散乱機構は,双極子散乱 (dipole scattering) と衝突散乱 (impact scattering) に分類 できる [4]. 双極子散乱は, 電気双極子場の生成・ 消滅,すなわち光学フォノンの生成・消滅を伴い, 入射電子の散乱角度がゼロ(=q」がゼロ)におい て微分散乱断面積(=EELS 強度)が大きくなる. このとき、生成・消滅するフォノンの波数ベクト ルはゼロ,波長は無限に長い(長波長極限).電気 双極子場の変動は、異種原子間に電荷の偏りを持 つ極性材料で生じやすく、双極子散乱の微分散乱 断面積は非極性材料に比べて極性材料で著しく大 きくなる.本稿では、ダイヤモンド(非極性)と 立方晶窒化ホウ素(c-BN)(極性)を例に紹介す る [1]. 両結晶ともに, 縦波音響 (longitudinal acoustic: LA), 横波音響 (transverse acoustic: TA), 縦波光学 (longitudinal optical: LO), 横波光学 (transverse optical: TO)の4つの振動モードを持つ. ダイヤモンドと c-BN は、結晶構造や熱伝導率、 硬度など良く似た物性を持つが、ダイヤモン



図3 入射電子とフォノンの散乱機構.

ドは極性が無いのに対して c-BN は極性がある点 で異なる.したがって、フォノン分散曲線も似て いるが、極性のある c-BN では TO と LO モードの エネルギー差が大きくなる [7,8].図4は、電子プ ローブ条件(加速電圧,電流密度,収束角)、検出 条件(取り込み角,露光時間),試料条件(厚さ、 結晶方位)等の条件を揃えて両単結晶から EELS を比較したものである. q_{\perp} ~0(Γ 点)の条件では、 ダイヤモンドでは光学フォノンが視認できないの に対して、c-BN では鋭いピークとなって観測され る. c-BN では、単位胞内の B 原子と N 原子の逆 方向運動によって生じる大きな分極場が入射電子 と強く相互作用することを示している.



図 4 双極子散乱による光学フォノン生成の EELS 強度の比較.

一方、衝突散乱は、原子核と内殻電子から成る イオン芯によるクーロン散乱であり、入射電子の 散乱角度は有限の値となる.このとき、生成・消 滅するフォノンの波数ベクトル垂直成分は $p_{\perp}=$ $q_{\perp}-G_{\perp}$ で、その波長は双極子散乱と違って短くな る.衝突散乱は、短波長の光学フォノンに加えて、 音響フォノンを生成・消滅する.衝突散乱では、 極性の有無は重要でなくその微分散乱断面積 (=EELS 強度) はダイヤモンドと c-BN で同程度と なる.EELS で計測したフォノン生成の微分散乱 断面積は各モード (TA, LA, TO, LO) で総和す ると、ともに~10⁻⁵ nm²の大きさであった [1].双 極子散乱の微分散乱断面積は大きい ($q_{\perp}=0$ で最 大)のに対して、衝突散乱のそれは小さい.

EELS の位置分解能は、衝突散乱では電子ナノ プローブ直径と同等になりうるが、双極子散乱で は悪くなる [9,10]. これは前者が空間的に広がっ た電気双極子場とのクーロン相互作用、後者が空 間的に局在しているイオン芯とのクーロン相互作 用による散乱のためである (図 3). 双極子散乱は、 入射電子が試料内部を通過せずに試料外部の真空 中を通過しても起こる.例えば極性を持つ試料の 場合,その端から数百 nm 離れた位置を電子が通 過しても光学フォノンの生成・消滅が起きる.フ ォノンのエネルギーが小さいほど,遠方までクー ロン相互作用がはたらき,生成・消滅が起きる.

4. フォノン計測の例

4.1 分散関係の計測

エネルギーと波数ベクトルの分散関係は、散乱 ベクトル依存(運動量移送依存,もしくは角度分 解) EELS によって計測できる [6]. フォノンの場 合は, meV のエネルギー分解能と波数ベクトル分 解能を両立させる点に難しさがある. EELS では、 エネルギー分解能を高めることも波数ベクトル分 解能を高めることも、ともに入射電子ビームの電 流密度を小さくすることになる. そのため検出器 の信号/ノイズ比を高めようと露光時間を長くす ると、装置が非常に安定でない限り、1回の露光 時間内にゼロ点(=弾性散乱ピーク,ゼロロス・ ピーク)が動いてしまい,エネルギー分解能が逆 に悪くなる場合がある. エネルギー分解能と波数 ベクトル分解能に加えて、さらに位置分解能も高 めようとすると、さらに電流密度を小さくするこ とになる. EELS でのフォノン分散計測において は, エネルギー分解能と波数ベクトル分解能, 位 置分解能は、計測対象に応じて最適なバランスで 高め、最終的な電流密度ができるだけ大きくなる よう設定するのが望ましい.図5(a)は,直径約2nm の電子プローブを用いてダイヤモンド結晶のΓ点 ~L点のフォノン分散関係を計測した例である[1]. 一連の EELS スペクトルは、図2の電子回折パタ ーンの 1.5g (L 点) \sim 2g (Γ 点) 間の範囲におけ る散乱ベクトル q₁依存性を示している. 図 5(a)



図 5 ダイヤモンド結晶の(a)散乱ベクトル依存 EELS スペクトル(RLD 処理後)と(b)フォノン分 散関係のプロット(実線は理論計算[7]).

の各スペクトルは Richardson-Lucy デコンボリュ ーション (RLD) によって,真のスペクトルを復 元したものである. TA, LA, LO+TO モードに由 来する強度が q_{\perp} に依存して変化していて,これは 分散関係を反映している.実際に,図 5(a)で各フ オノンモードをガウス関数でフィッティングし, その位置 (E_{ph}) と $q_{\perp}(=p_{\perp})$ の関係をプロットする と,図 5(b)のような分散関係をプロットできる. 理論計算による分散曲線 (実線) [7]と良く一致し, 直径約 2 nm の電子プローブでバルクのフォノン 分散情報が得られることがわかった.

4.2 フォノンモードの可視化

電子ナノプローブを用いた EELS の利点は,局 所領域の分光や高位置分解能での分光イメージン グが可能なことであり,フォノンの生成・消滅数 の空間分布可視化や、粒界やヘテロ界面、点欠陥 などの格子欠陥位置の振動計測が可能になる.図 6は、c-BN 単結晶とダイヤモンド単結晶のヘテロ 接合界面付近のフォノン生成数を分光イメージン グしたものである [1]. 具体的には, 115-130 meV 域の EELS 強度分布を表示したもので、単位ピク セルあたり70ミリ秒間に入射電子(プローブ電流 4.6 pA) で生成された L 点の LA+TO フォノン (c-BN) と LA フォノン (ダイヤモンド)の数を表 している. c-BN では L 点で LA フォノンと TO フ オノンのエネルギーが同じになるため、LA フォ ノンに加えて TO フォノンの数を足したものとな っている.この視野内で平均すると、70ミリ秒間 に c-BN では 4.7 ± 2.2 個, ダイヤモンドでは 3.2 ± 1.8 個のフォノンが生成されたことになる.標準偏 差は大きく、実際に同じダイヤモンド内で、界面 から離れたバルク単結晶とみなせる領域でも、ピ クセル毎に生成数がばらついている. 各ピクセル で十分に露光時間を長くすれば観測時間内でのば らつきは小さくなり、フォノン数の空間的な違い を議論できるようになるといえる.



図 6 界面付近のフォノン生成数の分光イメージ.

4.3 ヘテロ界面の振動モード

粒界やヘテロ界面,格子欠陥位置では,原子配 列がバルクと異なるため、バルクの格子振動とは 異なる振動モードが存在しうる.図7は、図6の c-BN 領域からヘテロ界面を介してダイヤモンド 領域にいたる L 点の EELS スペクトル変化を示し ている [1]. ヘテロ界面位置から両側に 5 nm 程度 離れれば、バルクと同じフォノンモードになる. 一方で図7の矢印で示すように、界面位置ではバ ルク結晶域とは異なる振動モードが現れている. この位置での EELS スペクトルが、単なる両バル ク単結晶域で得られる EELS スペクトルの線形結 合では説明できないことから,界面位置に局在し た固有の振動モードであるといえる. ヘテロ界面 でのフォノンの輸送を理解するうえで重要な結果 である.ここでは界面垂直方向の振動を検出した が、界面平行方向には周期的な界面構造を反映し たフォノン分散が存在すると予想される. このよ うに空間的に局在した振動モードを検出できるの が、本手法の特徴である.



図 7 界面付近のL点に関するフォノンモード分 布.矢印は界面位置に局在した振動モードを示す.

5. フォノンの生成・消滅比を用いた温度計測 5.1 温度計測の原理と特徴

ラマン分光でストークス散乱とアンチストーク ス散乱の強度比から絶対温度を計測できるのと同様に, EELS で絶対温度を計測できる.計測には, 電流密度が十分に小さな電子ナノプローブを用い る.すなわち,1個1個の入射電子はフォノンの 緩和時間よりも十分長い時間間隔で飛来して試料 に入射する条件とする.熱平衡状態において,入 射電子が結晶格子にエネルギーを与えてフォノン を生成する確率(強度)*I*_{loss}と,逆に結晶格子が 入射電子にエネルギーを与えてフォノンが消滅す る強度(確率)*I*_{gain}の比は,次の詳細釣り合いの 式で関係づけられる [5].

$I_{\text{gain}}/I_{\text{loss}} = \exp\left(-E_{\text{ph}}/k_{\text{B}}T_{\text{ph}}\right)$

*k*_B はボルツマン定数フォノンのエネルギー,*E*_{ph} はフォノンのエネルギー,*T*_{ph}は温度である.電子 ナノプローブ位置から得られる EELS スペクトル から、Igain、Iloss、Ephを評価し、温度 Tph が求まる.

ラマン分光と比べて, EELS は位置分解能が高 いという利点や音響フォノンを用いた温度測定も 可能という特徴があるが,現状の EELS では信号 /ノイズの比が小さいために温度精度はラマン分 光に劣る.また同じ電子線を用いた温度評価方法 として,電子回折やプラズモンに着目する方法が あるが [11,12],これらは熱膨張係数などの換算変 数を必要とする.一方で,フォノンを用いた温度 評価方法では,詳細釣り合いの式を通して実験ス ペクトルのみから絶対温度を決定できる.これは ダイヤモンドなどの熱膨張係数の小さな材料でも 絶対温度を評価できることを意味する.

5.2 温度計測の実証

実際に、直径約1 nm の電子ナノプローブとフ ォノン生成・消滅の詳細釣り合いの式を用いて, 単結晶ダイヤモンドの温度計測が可能か、実証実 験を行った [13]. 電圧を印加して約 10⁴ µm²域を 一様に加熱できるセラミックス膜上に、ダイヤモ ンド結晶の薄片を固定した.電圧値のセラミック ス膜温度(以下,公称温度と呼ぶ)への換算係数 は既知で、303 K~1473 Kの範囲で温度を変えな がら, Γ点(2g)位置から EELS スペクトルを取 得した.図8(a)に示すように、164 meV 位置の光 学(TO+LO)フォノン励起強度 Iloss で規格化する と、Gain 側の光学 (TO+LO) フォノン消失強度 Igain が公称温度の上昇とともに、大きくなっている. 500 K を超えてから消失強度 Igain が明確に現れた. 図 8(b)は、公称温度を x 軸に、強度比 Igain / Iloss と 詳細釣り合いの式から求まるフォノン温度 Tmbをy 軸にプロットしたものである. 公称温度と計測し たフォノン温度は、およそ y=xの関係があり、直 径約1 nm の電子線プローブで局所温度計測が可 能であることが実証された.ただし,500 K 以下 では温度精度が悪くなった.これは、低温ほど熱 励起フォノンの数が小さいため Igain の信号/ノイ ズの比が小さくなり, Igain の積分強度の誤差が大 きくなるためである.この問題は、音響フォノン を温度測定に用いることで改善できる. 音響フォ ノンは光学フォノンよりエネルギーが小さく低温 でも熱励起されるため、Igain の信号/ノイズの比 が光学フォノンの場合より大きくなる.実際に TA モードを用いて、室温付近で温度精度が向上する

ことを確認した [13].



図 8 (a)フォノンの生成・消滅比を用いた温度計 測の実証実験. (b)公称温度に対する強度比 *I*gain / *I*loss とフォノン温度 *T*phの関係.

5.3 温度計測の応用

実際に本手法を用いて、図9(a)に示すように、ジュール加熱中のダイヤモンド・ナノワイヤの温度勾配を測定した [13]. 図9(b)は、電圧20 Vをナノワイヤ両端に印加しながら図9(a)の枠線内からEELSスペクトルを取得して解析したものである.検出するフォノンの波数ベクトル域はL点(1.5g)を中心とした. RLD処理をしたスペクトルを、ゼロロス・ピーク(ZLP)と各フォノンモード(TA, LA, TO+LO)でGaussianフィッティングした. TAフォノンの生成と消滅、すなわち $I_{TA,gain} \ge I_{TA,loss}$ の強度比から、温度は613±5 Kと評価できた.ナノワイヤ軸に沿って同様な測定を行った結果、ナノワイヤの中心で温度が高く温度勾配が両端に向かって±0.1 K nm⁻¹であり、熱流束は10⁻⁷ W nm⁻² と評価できた. 今後、各

計測位置 (各ピクセル) での信号/ノイズの比が大 きくできれば,数nmの位置分解能で温度分布を可 視化できるようになる.



図9 (a)ダイヤモンド・ナノワイヤの電子顕微鏡像. (b)電圧20 V印加時に中央付近から取得したEELSス ペクトル.

6. おわりに

本稿では、透過電子顕微鏡における EELS を利 用したフォノン計測について紹介した.直径数 nm の電子ナノプローブを用いて、フォノンの分散関 係や振動モードのマッピング、温度測定などがで きることを示した.基本的な計測ができるように なってきたので、今後はフォノン輸送の解析につ なげたい、と考えている.一方で、装置(図 1) の性能の限界や改良すべき点も見えた.将来的に、 電子ナノプローブ直径 1 nm で、エネルギー分解 能 1 meV 以下、エネルギー揺らぎ±1 meV/0.1 s 以 下を実現できれば、より低エネルギー励起を検出 できるため、種々の材料でフォノン計測が可能に なると思う.

謝辞

本研究は, JST さきがけ (Grant No. JPMJPR18I4) と科研費・基盤 B (Grants No. 22H01959)の助成 を受けた.特に JST さきがけでは,花村克悟先生 をはじめアドバイザーや研究者の皆様方には貴重 なアドバイスを頂いた.装置仕様から導入に関し て、NIMSの木本浩司氏に諸々のアドバイスを頂 いた.試料の提供と作製に関して、NIMSの谷口 尚,諸永拓,諸永友美,中山佳子,下村周一各氏 にご協力頂いた.関係者の皆様方に感謝申し上げ る.

参考文献

- J. Kikkawa, T. Taniguchi, and K. Kimoto, Phys. Rev. B 104, L201402 (2021).
- [2] R. F. Egerton, *Electron energy-loss spectroscopy in* the electron microscope, 3rd ed. (Springer, New York, 2011).
- [3] O. L. Krivanek et al., Nature 514, 209 (2014).
- [4] H. Ibach and D. L. Mills, *Electron Energy Loss Spectroscopy and Surface Vibrations* (Academic Press, 1982).
- [5] D. Pines and P. Nozieres, *The Theory of Quantum Liquids* (Benjamin Inc., New York, 1966).
- [6] J. Kikkawa, T. Mizoguchi, M. Arai, T. Nagai, and K. Kimoto, Phys. Rev. B 98, 075103 (2018).
- [7] P. Pavone, K. Karch, O. Schütt, D. Strauch, W. Windl, P. Giannozzi, and S. Baroni, Phys. Rev. B 48, 3156 (1993).
- [8] K. Karch and F. Bechstedt, Phys. Rev. B 56, 7404 (1997).
- [9] K. Kimoto, in Scanning Transmission Electron Microscopy of Nanomaterials: Basics of Imaging and Analysis, edited by N. Tanaka (Imperial College Press, London, 2014).
- [10] C. Dwyer, T. Aoki, P. Rez, S. L. Y. Chang, T. C. Lovejoy, and O. L. Krivanek, Phy. Rev. Lett. 117, 256101 (2016).
- [11] F. Niekiel, S. M. Kraschewski, J. Muller, B. Butz, and E. Spiecker, Ultramicroscopy 176, 161 (2017).
- [12] M. Mecklenburg, W. A. Hubbard, E. R. White, R. Dhall, S. B. Cronin, S. Aloni, and B. C. Regan, Science 347, 629 (2015).
- [13] J. Kikkawa and K. Kimoto, Phys. Rev. B 106, 195431 (2022).

酸化チタン自然超格子結晶の構造と熱輸 送特性

Atomic Structure and Thermal Conduction and in Titanium Oxide Natural Superlattices

1. はじめに

ナノスケールの周期構造によるフォノンの干渉 を利用することで,フーリエの法則に従う拡散的な 描像とは異なる, 高度な熱輸送が期待されている [1-3]. 微細加工を利用して作製されるフォノニッ ク結晶や,ナノドット,ナノロッド,人工超格子な ど、様々なナノ構造における熱輸送特性の研究が行 われているが[4-9]、フォノンの干渉効果を得るた めには,異なる界面で反射されたフォノンがコヒー レントである必要がある[10]. このためには、周期 構造がフォノンのコヒーレンス長よりも短く,界面 でフォノンが位相を保って反射されることが条件 となる.したがって,室温でフォノンの干渉効果を 利用したコヒーレントな熱輸送を実現するために は,原子レベルで平滑な界面をナノ~サブナノメー トルスケールの周期構造で配列させることが必要 となる.人工超格子は、高い自由度で1次元のナノ 周期構造を作製することが可能であるが,分子線エ ピタキシー (Molecular beam epitaxy: MBE) 法や, 化学気相堆積(Chemical vapor deposition: CVD)法 など非平衡な結晶成長法で作製された人工超格子 において,原子レベルで平滑な界面を得ることは困 難である.最近の研究において,高度な薄膜成長技 術によって作製された完全性の高い界面を有する 人工超格子薄膜の熱輸送が報告されている. Ravichandran らは、MBE 法により周期の異なる SrTiO₃/CaTiO₃人工超格子薄膜を作製し、界面密度 の増加とともに熱伝導率が減少した後に増加に転 じる, "Incoherent-coherent crossover"を報告し, コヒ ーレントな熱輸送が顕在することを明確に示した [11]. その後もいくつかの人工超格子薄膜において, コヒーレントな熱輸送について報告はあるが[12-14],熱は示量変数であり、コヒーレントな熱輸送を 熱制御に用いる場合にはバルク材料でその機能が 発現することが好ましい. そこで我々は, 熱力学的 安定相として自発的にナノ構造が形成する酸化チ

原田 俊太(名古屋大学) Shunta HARADA (Nagoya University) e-mail: harada.shunta.i5@f.mail.nagoya-u.ac.jp

タン自然超格子に着目して研究を行っている.

光触媒材料としてよく知られているルチル型二 酸化チタン (TiO₂)は、還元や Cr³⁺との置換などに より酸素欠陥が生じると、酸素欠損を含む面欠陥が 周期的に配列する構造となる[15–19].面欠陥の部 分では原子配列をずらした構造となるため、シアー 構造と呼ばれる。酸化チタンのシアー構造では、面 欠陥部分の組成は Ti₂O₃ となるため、図1のように TiO₂に周期的に Ti₂O₃が挿入された構造をとること が知られている。シアー構造を有する酸化チタンの 化学量論組成は、Ti_nO_{2n-1} と表され、面欠陥は n 層 に 1 層導入される。酸素欠損量を制御することによ って、面欠陥の周期を変調させることも可能である。

本稿では、面欠陥の周期配列を含む酸化チタン自 然超格子の界面構造の完全性とその熱輸送特性に ついて紹介する[20-23]. 二元系の酸化チタン自然 超格子(Ti_nO_{2n-1})では、酸素欠損量が多くなる、す なわちnが小さくなるにつれて、金属的な電気伝導 を示すようになることが知られている. 一方で、Cr



図 1 シアー構造を有する酸化チタン自然超格 子の原子配列の模式図.



図 2 ルチル型二酸化チタンの真空中での高温熱処理による還元によって作製された Ti_nO_{2n-1}結晶の広角 度環状暗視野(HAADF) 走査透過電子顕微鏡(STEM)像.

添加酸化チタン自然超格子 ($Cr_2Ti_{n-2}O_{2n-1}$)では,長 周期の構造は熱力学的には不安定であることが知 られている.このため,長い (~3 nm) 周期の構造 として,電子熱伝導率が無視できるほど小さいと考 えられる Ti_nO_{2n-1} を,短い (~1 nm) 周期の構造とし て $Cr_2Ti_{n-2}O_{2n-1}$ を取り上げる.

2. 自然超格子酸化チタンの面欠陥周期配列構造

図2は,真空中での高温熱処理による還元によっ て作製された Ti_nO_{2n-1} 結晶の広角度環状暗視野 (HAADF) 走査透過電子顕微鏡 (STEM) 像を示し ている. 輝点が Ti の原子コラムを表しており, Ti の配列が矢印で示した位置においてずれており,面 欠陥が位置していることが分かる. 面欠陥は母構造 であるルチル構造の(132)rutile面に平行であり,面欠 陥におけるずれの方向は 1/2[0-11]であることもわ かる. さらに, 面欠陥の間に存在する(132)rutile 面の 数を数えることによって、n=28 であることが分か り、この結晶の化学量論組成は、Ti28O57と決定する ことができる. 面欠陥の間隔は 2.9 nm であり, 広 い視野での観察像(図 2(c))から,全てが n = 28 であり周期の乱れはほとんどないことが分かる.よ り広い視野において, 面欠陥の間隔を調べた結果, nの標準偏差は0.35(N=173)であり、これを長さ に変換すると, 36 pm と極めて小さな値となった. また,界面の完全性についても,図2(a)に示した視 野では、構造の乱れは観察されなかった.しかし、 結晶をよく観察すると一部の視野において構造の 乱れが観察された.

図 3 に原子コラムの配列の乱れを含む視野の HAADF-STEM 像を示す. 図 3(a)の破線で囲った位 置の拡大像が図 3(b)であり,同一の原子位置におけ る正常な原子配列の視野(図 3(c))と比較すると, 面欠陥上の Ti のコラムが分裂していることが分か る. 図 3(b)および図 3(c)における X-Y の線上の強 度のプロファイル(図 4)を見ても,明らかに, X-Y 間の Ti コラムの A サイトが, A サイトと B サイ トに分裂していることが分かる.





図 3 原子コラムの配列の乱れを含む視野の HAADF-STEM 像.(b)は破線の部分の拡大像, (c)は正常な視野での拡大像である.



図 4 図 3(b)および 3(c)の X-Y 間の強度プロフ アイル.

図 5 のようにこれら 2 つの Ti サイトを別々に示 すことで、HAADF-STEM 像において Ti サイトが分 裂する原因を理解することができる. A サイトのみ を示した原子配列と B サイトのみを示した原子配 列を比較すると、面欠陥の位置が(132)_{rutile} 面 1 層分 だけ異なることが分かる. HAADF-STEM 法による 観察は透過の観察であるため、電子線の入射方向に 異なる構造が重なっている場合、サイトが分裂した ように観察される. 入射方向にどのように図 5(b)と 5(c)の構造が配置しているかは不明であるが、入射 方向に面欠陥の配列の乱れが存在していることが 分かる. また、広い視野で観察を行った結果から、 このようにサイトの分裂を含む面欠陥の割合は表 1 に示すように全体の 7%程度であることが分かっ た.

次に、HAADF-STEM 像による観察結果から、面欠陥の平均粗さ R_a を下記の手順で見積もった.同じジグザグ形状が繰り返される場合、最大高さ R_z と平均粗さ R_a の間には下記の関係が成り立つ[24].

表 1 サイト分裂を含む面欠陥の割合と面欠陥 の平均粗さ *R_a*.

	割合 (%)	R_a (pm)
正常	93	13
サイト分裂	7	39
平均		15

 $R_a = 4R_z \tag{1}$

(132)_{rutile}の面欠陥が, (121)_{rutile}と(011)_{rutile}が交互に配列した構造になっていることから,正常な面欠陥とサイト部の分裂を含む面欠陥の R_z は,それぞれ $0.5d_{(132)}$, $1.5d_{(132)}$ となる.式(1)により R_a を求め,全体における平均粗さを見積ると, 15 pm と推定される.

界面のコヒーレンスは,鏡面反射パラメータp e用いてしばしば議論される.p = 1の時に,入射フ オノンはコヒーレントに反射され,p = 0では,入 射フォノンは完全に散乱されることになる.鏡面反 射パラメータは周波数fの関数として下記のように 表される[25].

$$p(f) = exp(-16\pi^2 (\frac{Rf}{n})^2)$$
(2)

ここで、vはフォノンの群速度、Rは二乗平均平方 根粗さを表している.ここでは、界面の粗さ σ に加 えて周期の乱れ ξ も考慮に入れた実効表面粗さ R_{eff} を用いて[5]、酸化チタン自然超格子結晶の鏡面反 射パラメータを見積もる.



図 5 (a)Ti コラムの分裂を含む視野の HAADF-STEM 像の拡大像(図 3(c)再掲)と, (b)A サイト, (c)B サイトの Ti コラムのみを模式的に示した図. (b)と(c)の原子配列は面欠陥の位置が, (132)面 1 層だけ異なる.



図 6 酸化チタン自然超格子の鏡面反射パラメ ータ.

(3)

 $R_{eff} = \sqrt{\sigma^2 + (0.5\xi)^2}$

HAADF-STEM 観察の結果から σ =15 pm, ξ =36 pm と見積もられ,式(2)と式(3)から鏡面反射パラメー タを計算すると図6のようになる.Wagner らは, *p* > 0.3 をフォノンの干渉効果が顕在化するコヒーレ ント界面の基準値としており[4],この基準に従う と,酸化チタン自然超格子における面欠陥は,23 THz 以下のフォノンにおいてコヒーレントな界面 となっていると考えられる.ルチル型二酸化チタン の振動モードは最大で25 THz であることを考える と,結晶中のほとんどすべてのフォノンに対してコ ヒーレントな界面であることが示唆される.

3. 自然超格子酸化チタンの熱輸送特性

前節で述べた通り,自然超格子酸化チタンの面欠 陥はピコスケールで平坦であり,コヒーレントな熱 輸送が期待される.本節では,コヒーレントな界面 を含む自然超格子酸化チタンにおいて面欠陥の密 度と熱輸送特性の関係について紹介する[22].

図 7 に面欠陥周期が 2.9 nm の二元系酸化チタン 自然超格子と 0.9 nm の Cr 添加酸化チタン (Cr₂Ti₅O₁₃)の熱伝導率を示す. 熱伝導率の測定は, 時間領域サーモリフレクタンス (TDTR) 法によっ て行った. どちらの面欠陥周期の自然超格子もルチ ル型二酸化チタンよりも熱伝導率が低く, その低下 は,室温以下の低温において顕著であった.また, 熱伝導率の面欠陥密度依存性を見ると図 7(b)に示



図7 ルチル型二酸化チタン, 2.9 nmの周期で 面欠陥が配列した酸化チタン自然超格子, 0.9 nm周期で面欠陥が配列した Cr 添加酸化チタン 自然超格子の熱伝導率の温度依存性. (a) 熱伝 導率の温度依存性と, (b)熱伝導率の界面密度依 存性.

す通り,面欠陥の導入によって熱伝導率が低下し, 面欠陥密度の増加とともに熱伝導率が増加する,い わゆる,"Incoherent-coherent crossover"の傾向がみら れる.また,この傾向は,低温においてより顕著で ある.面欠陥密度の増加に対する熱伝導率の増加は, 面欠陥においてフォノンが散乱されると考えるフ オノンの拡散的な描像だけでは説明できない現象 であり,完全性の極めて高い面欠陥の周期配列によ って発現する現象であると考えられる.面欠陥がイ ンコヒーレントな界面であり,フォノンが散乱され る場合,熱伝導率は面欠陥密度の増加とともに減少 する.一方,面欠陥がコヒーレントな界面である場 合には,ブリルアンゾーンの折り畳み(ゾーンフォ ールディング)によって,フォノンバンドギャップ

が導入され、群速度が低減し熱伝導率が減少する. ゾーンフォールディングの効果は,面欠陥の周期が 長いほど大きくなるため, 面欠陥密度の増加ととも に、熱伝導率は増加すると考えられる. 実際の結晶 中では、これら二つの現象が同時に起こり、 面欠陥 の完全性が高いと、ゾーンフォールディングの効果 が顕在化する.この場合,面欠陥の周期が短いとゾ ーンフォールディングの効果が表れ、"Incoherentcoherent crossover"の傾向が観察されることになる. また,高温になるほど,熱伝導率の面欠陥密度依存 性は小さくなり、573Kではほぼ一定の値となって いるが、これは、温度の増加とともに、フォノン・ フォノン散乱の頻度が上がった結果,フォノンの自 由行程距離が短くなり,ゾーンフォールディングの 効果があらわれなくなったためだと考えられる.実 際に,ルチル型二酸化チタンの平均自由行程距離を, 熱伝導率と比熱,音速から見積もると,173Kでは 3.9 nm と面欠陥周期よりも長いのに対して、573 K では0.7 nmと面欠陥の周期よりも短くなっている.

4. まとめと今後の展望

自然超格子酸化チタンの面欠陥は、透過電子顕微 鏡法による原子構造解析の結果から極めて高い完 全性を有することが明らかとなった.また、熱輸送 特性の測定結果も、コヒーレントな界面であること が明らかとなっている.本稿では詳細について述べ なかったが、Debye-Callaway モデルを用いた熱輸送 特性の解析から、面欠陥の界面粗さを見積もったと ころ、電子顕微鏡の観察結果とよく一致する結果で あることが明らかとなっており、シア一構造による 面欠陥のコヒーレンスは、電子顕微鏡での観察から 見積もることができることが示唆されている[23].

また,最近の研究において,酸化チタンの面欠陥 配列は,結晶成長後の熱処理条件によってその規則 性をある程度制御することができることが分かっ ており,例えば,面欠陥を不規則に配列させること も可能である.コヒーレントな界面が不規則に配列 すると,フォノンのアンダーソン局在によって熱伝 導率が大きく低下することが示唆されており,酸化 チタン結晶における面欠陥不規則配列によってフ ォノンのアンダーソン局在を実験的に実証できる 可能性があり,現在,その研究に取り組んでいる [26].

自然超格子は、人工超格子よりも簡単にバルク結

晶中にコヒーレントな界面を形成することが可能 であり,上手く材料系を選択することによってある 程度周期構造を制御することが可能である.今後の 研究では,バルク結晶中において,コヒーレントフ オノンによる特徴的な熱輸送現象を,自然超格子を 用いて解明していくとともに,高度な熱輸送を実現 する自然超格子材料の設計と実現を目指していき たいと考えている.

謝辞

本稿で紹介した研究は,科学技術振興機構さきが け「熱輸送のスペクトル学的理解と機能的制御」 (JPMJRP1818)の支援を受けて行われたものである. プロジェクト期間中には,総括の花村先生をはじめ, 領域アドバイザーの先生方々や,領域メンバーの皆 様と,領域会議や研究会を通して多くのディスカッ ションをさせて頂いたことに深く感謝いたします.

参考文献

- [1] Maldovan, M., Nat. Mater. 14 (2015) 667-674.
- [2] Maldovan, M., Nature 503 (2013) 209-217.
- [3] Nomura, M., Shiomi, J., Shiga, T., Anufriev, R., Jpn. J. Appl. Phys. 57 (2018) 080101.
- [4] Wagner, M.R., Graczykowski, B., Reparaz, J.S., El Sachat, A., Sledzinska, M., Alzina, F., Sotomayor Torres, C.M., Nano Lett. 16 (2016) 5661–5668.
- [5] Maire, J., Anufriev, R., Yanagisawa, R., Ramiere, A., Volz, S., Nomura, M., Sci. Adv. 3 (2017) e1700027.
- [6] Wingert, M.C., Chen, Z.C.Y., Dechaumphai, E., Moon, J., Kim, J.H., Xiang, J., Chen, R., Nano Lett. 11 (2011) 5507–5513.
- [7] Luckyanova, M.N., Garg, J., Esfarjani, K., Jandl, A., Bulsara, M.T., Schmidt, A.J., Minnich, A.J., Chen, S., Dresselhaus, M.S., Ren, Z., Fitzgerald, E.A., Chen, G., Science 338 (2012) 936–939.
- [8] Taniguchi, T., Terada, T., Komatsubara, Y., Ishibe, T., Konoike, K., Sanada, A., Naruse, N., Mera, Y., Nakamura, Y., Nanoscale 13 (2021) 4971–4977.
- [9] Koh, Y.K., Cao, Y., Cahill, D.G., Jena, D., Adv. Funct. Mater. 19 (2009) 610–615.
- [10] Chen, G., Nat. Rev. Phys. 3 (2021) 555-569.
- [11] Ravichandran, J., Yadav, A.K., Cheaito, R., Rossen,
 P.B., Soukiassian, A., Suresha, S.J., Duda, J.C., Foley,
 B.M., Lee, C.H., Zhu, Y., Lichtenberger, A.W.,

Moore, J.E., Muller, D.A., Schlom, D.G., Hopkins, P.E., Majumdar, A., Ramesh, R., Zurbuchen, M.A., Nat. Mater. 13 (2014) 168–172.

- [12] Saha, B., Koh, Y.R., Feser, J.P., Sadasivam, S., Fisher, T.S., Shakouri, A., Sands, T.D., J. Appl. Phys. 121 (2017) 015109.
- [13] Choi, S., Hiroi, S., Inukai, M., Nishino, S., Sobota, R., Byeon, D., Mikami, M., Minamitani, E., Matsunami, M., Takeuchi, T., Phys. Rev. B 102 (2020) 104301.
- [14] Cho, H.J., Wu, Y., Zhang, Y., Feng, B., Mikami, M., Shin, W., Ikuhara, Y., Sheu, Y., Saito, K., Ohta, H., Adv. Mater. Interfaces 8 (2021) 2001932.
- [15] Andersson, S., Collén, B., Kuylenstierna, U., Magnéli, A., Acta Chem. Scand. 11 (1957) 1641– 1652.
- [16] Andersson, S., Sundholm, A., Magnéli, A., Högberg,
 B., Kneip, P., Palmstierna, H., Acta Chem. Scand. 13 (1959) 989–997.
- [17] Le Page, Y., Strobel, P., J. Solid State Chem. 44 (1982) 273–281.
- [18] Kamiya, S., Yoshimura, M., Somiya, S., Mater. Res.

Bull. 15 (1980) 1303-1312.

- [19] Harada, S., Tanaka, K., Inui, H., J. Appl. Phys. 108
 (2010) 083703. [20] Harada, S., Kosaka, N., Tagawa, M., Ujihara, T., J. Phys. Chem. C 125 (2021) 11175– 11181.
- [21] Harada, S., Sugimoto, S., Kosaka, N., Tagawa, M., Ujihara, T., J. Phys. Chem. C 125 (2021) 15730– 15736.
- [22] Harada, S., Kosaka, N., Yagi, T., Sugimoto, S., Tagawa, M., Ujihara, T., Scr. Mater. 208 (2022) 114326. [23] Sugimoto, S., Kim, G., Takeuchi, T., Tagawa, M., Ujihara, T., Harada, S., J. Alloys Compd. 934 (2023) 167915.
- [24] Palasti-Kovasc, B., Sipos, S., Czifra, A., in: Proc. of International Conference on Tools (ICT-2012), 2012, pp. 237–244.
- [25] Ziman, J.M., Electrons and Phonons, Clarendon, Oxford, 1960.
- [26] Harada, S., Hattori, T., Ito, M., Sugimoto, S., Inden, M., Tagawa, M., Ujihara, T., J. Appl. Crystallogr. Accepted.

第一原理計算による電子フォノン相互作用の精密解析とジュール熱発生素過程への応用 Ab Initio Analysis of Electron-phonon Coupling and Its Application for Initial Process of Joule Heating

1. はじめに

絶縁体結晶中での熱輸送は主に格子振動の量子, フォノンによって担われる.このフォノン描像によ る熱輸送の理論は伝熱分野でも馴染み深いもので あろう.固体における熱伝導率の理論では,非調和 効果によって生じるフォノンとフォノンの相互作 用が中心的な役割を果たしている.フォノンが相互 作用し得るもう一つの代表的な対象が電子である.

電子とフォノンの相互作用は電気抵抗,ポーラロ ン形成,電荷密度波,熱電効果から超伝導に至るま で固体物理の随所にあらわれる最も基本的な相互 作用の一つである.電子とフォノンが相互作用する 仕組みは,直感的には格子が揺れることで電子が感 じるイオンからのポテンシャルが変化し,その結果, 電子状態が変調するという説明で理解できる.だが, それぞれの電子状態が,どのフォノンとどの程度の 強さで相互作用するかを定量的に見積もることは 簡単ではない.

定性的なモデルによる理解を超えて,様々な物質 における電子フォノン相互作用を定量的に予測す る一つの方法が密度汎関数理論を応用した電子フ オノン相互作用の計算である.近年の計算機能力や, 各種パッケージの発達により,今では各フォノンモ ードが各電子状態と相互作用する強度を直接的に 見積もることができる.

密度汎関数理論に基づく第一原理計算による電 子フォノン相互作用の精密解析は、これまで主に超 伝導転移温度[1]や、半導体における輸送特性の予 測[2,3]に応用されてきた. 伝熱分野における応用は 限られているが、その一つが、著者の取り組んでい るジュール熱の発生素過程の解析である. これまで の研究[4]で、例えば Si 結晶内でのジュール熱生成 過程が実は電子キャリアとホールキャリアでは異 なるのではないかなど、第一原理計算による精密解 析を行うことで、初めて見出された結果が得られつ つある. このような解析は今後、熱の問題にミクロ 南谷 英美 (大阪大学 産業科学研究所) Emi MINAMITANI (SANKEN, Osaka University) e-mail: eminamitani@sanken.osaka-u.ac.jp

の観点から取り組む際に有用になると考えられる ため、本稿では電子フォノン相互作用の第一原理計 算の理論と、その応用事例として、前述のジュール 熱発生素過程の研究内容を紹介する.

2. 電子フォノン相互作用に対する第一原理計算 2.1 電子フォノン相互作用

電子フォノン相互作用は、振動に伴うポテンシャ ルの変調が電子状態に影響を与えることで生じて いるが、この量子力学的効果をどのように定式化す ればよいだろうか. 一般に、電子系、イオン、そし てイオンの振動(フォノン)からなるハミルトニア ンは

$$H = H_{ph} + H_e + H_{ei} (1)$$

$$H_{ph} = \sum_{\mathbf{q}\nu} \hbar \omega_{\mathbf{q}\nu} a^{\dagger}_{\mathbf{q}\nu} a_{\mathbf{q}\nu} (2)$$

$$H_e = \sum_i \left\{ \frac{\mathbf{p}_i^2}{2m} + \frac{e^2}{2} \sum_{j \neq i} \frac{1}{r_{ij}} \right\} (3)$$

$$H_{ei} = \sum_{ij} V_{ei} (\mathbf{r}_i - \mathbf{R}_j) (4)$$

のように定義される.ここで、 H_{ph} はフォノンのハ ミルトニアン、 H_e は電子系のハミルトニアン、 H_{ei} は位置 \mathbf{r}_i にある電子と位置 \mathbf{R}_j にあるイオンの間の 相互作用を表すハミルトニアンである. $a_{qv}^{\dagger}(a_{qv})$ は第一ブリルアンゾーン内の波数 \mathbf{q} 、モードv、エネ ルギー $\hbar\omega_{qv}$ のフォノンを生成・消滅する演算子で ある. H_e 中の第一項は電子の運動エネルギーに対 応しており、 \mathbf{p}_i は i 番目の電子が持つ運動量、mは 電子の質量に対応している.第二項は電子間の相互 作用に対応しており、eは電荷素量、 r_{ij} は電子間の 距離である.

電子フォノン相互作用は、原子が動くことによって生じるポテンシャルV_{ei}の微小変化として捉える

ことができる. 平衡状態での原子の座標を \mathbf{R}_{j}^{0} として, 原子の座標 \mathbf{R}_{j} をモード ν のフォノンによる変位 \mathbf{Q}_{j}^{ν} を用いて $\mathbf{R}_{j} = \mathbf{R}_{j}^{0} + \mathbf{Q}_{j}^{\nu}$ であらわす. 変位が小さい ものとして, テイラー展開を行うと,

$$V_{ei}(\mathbf{r}_{i} - \mathbf{R}_{j}^{0} - \mathbf{Q}_{j}^{\nu}) = V_{ei}(\mathbf{r}_{i} - \mathbf{R}_{j}^{0}) - \mathbf{Q}_{j}^{\nu} \cdot \nabla V_{ei}(\mathbf{r}_{i} - \mathbf{R}_{j}^{0}) + O(Q^{2}) (5)$$

が得られる.この第二項が電子フォノン相互作用に 相当する.以後, $V_{ep}^{\nu}(\mathbf{r}) = \mathbf{Q}_{j}^{\nu} \cdot \nabla V_{ei}(\mathbf{r}_{i} - \mathbf{R}_{j}^{0})$ のように 表記する.

電子フォノン相互作用のハミルトニアンをH_{ph} と同様に第二量子化形式で表記するには、場の演算 子を用いて、

$$H_{ep} = -\sum_{\nu} \int d\mathbf{r} \, \psi^{\dagger}(\mathbf{r}) \, V_{ep}^{\nu}(\mathbf{r}) \, \psi(\mathbf{r}) \quad (6)$$

とすればよい. ここで, 場の演算子は

$$\psi(\mathbf{r}) = \sum_{\mathbf{k},\eta} c_{\mathbf{k}\eta} \, \phi_{\mathbf{k}\eta}(\mathbf{r})$$
$$\psi^{\dagger}(\mathbf{r}) = \sum_{\mathbf{k},\eta} c_{\mathbf{k}\eta}^{\dagger} \, \phi_{\mathbf{k}\eta}^{*}(\mathbf{r}) \quad (7)$$

で定義される. $\phi_{k\eta}(\mathbf{r})$ は第一ブリルアンゾーン内 の波数kを持つバンド η の電子状態のブロッホ波動 関数であり、 $c_{k\eta}$ はその電子状態に対する消滅演算 子を指す. ブロッホ波動関数は $\phi_{k\eta}(\mathbf{r}) =$ $u_{k\eta} \exp(i\mathbf{k}\cdot\mathbf{r})$ で表されるものとする.

式(7)に場の演算子の定義を代入し,さらに 変位**Q**ⁱをフォノンの生成消滅演算子で書き換え, ポテンシャルをフーリエ変換すると,最終的に

$$H_{ep} = -i \sum_{\mathbf{k},\mathbf{k}',\eta,\eta'} \sum_{\mathbf{q}\mathbf{G}\nu} \int d\mathbf{r} \, u_{\mathbf{k}'\eta'}^* \, e^{i(\mathbf{k}-\mathbf{k}'+\mathbf{q}+\mathbf{G})\cdot\mathbf{r}} \boldsymbol{\xi}_{\mathbf{q}\nu} \\ \cdot (\mathbf{q}+\mathbf{G}) V_{ei}(\mathbf{q}+\mathbf{G}) \\ \cdot \left(\frac{\hbar}{2MN\omega_{\mathbf{q}\nu}}\right)^{\frac{1}{2}} \, u_{\mathbf{k}\eta} \, c_{\mathbf{k}'\eta'}^{\dagger} c_{\mathbf{k}\eta} \left(\alpha_{\mathbf{q}\nu}+\alpha_{-\mathbf{q}\nu}^{\dagger}\right) (8)$$

の形のものが得られる.Gは逆格子ベクトル,Mは イオンの質量,Nは結晶に含まれる単位胞の数, $\xi_{q\nu}$ は各フォノンモードにおける原子の変位方向を 指し示す3次元の偏極ベクトルである.ポテンシ ャルの微分とブロッホ波動関数から得られる電子 フォノン相互作用行列要素を $M_{kq}^{\eta\eta'\nu}$ としてまとめる と、電子フォノン相互作用のハミルトニアンは、

$$H_{ep} = \sum_{\mathbf{k}\eta\eta\prime} \sum_{\nu \mathbf{q}} M_{\mathbf{k}\mathbf{q}}^{\eta\eta\prime\nu} c_{\mathbf{k}+\mathbf{q}\eta\prime}^{\dagger} c_{\mathbf{k}\eta} \left(\alpha_{\mathbf{q}\nu} + \alpha_{-\mathbf{q}\nu}^{\dagger} \right)$$
(9)

のような形に書き表すことができる.これは、ちょうど波数 \mathbf{k} バンド η の電子が波数 \mathbf{q} ($-\mathbf{q}$)モード ν のフォノンを吸収(放出)することで波数 $\mathbf{k} + \mathbf{q}$ バンド η 'の電子が生じるプロセスに対応している.

2.2 第一原理計算による電子フォノン相互作用の 計算

前節での電子フォノン相互作用行列要素, $M_{kq}^{\eta\eta'\nu}$ は, どのようにすれば第一原理計算で求めることができるだろうか.第一原理計算の基盤理論, 密度汎関数理論では, ハミルトニアンはコーン・シャムハミルトニアン

$$H^{KS} = -\frac{\hbar^2}{2m_e} \nabla^2 + V^{KS}(\mathbf{r}, \{\mathbf{Q}_j^{\nu}\})$$
(10)

の形で表される. V^{KS}はイオンと電子の相互作用に よって生じるポテンシャルV^{en}, ハートリーポテン シャルV^H, および交換相関ポテンシャルV^{xc}の和に よって

$$V^{KS} = V^{en} + V^H + V^{xc}$$
(11)

と定義される. また, コーン・シャムハミルトニア ンは

$$H^{KS}\phi_{\mathbf{k}\eta}(\mathbf{r}) = \epsilon_{\mathbf{k}\eta}\phi_{\mathbf{k}\eta}(\mathbf{r}) \ (12)$$

で表されるコーン・シャム方程式を満たす.コーン・ シャム波動関数はブロッホ関数の性質を満たす.

2.1 節での手続きと同様に、変位 \mathbf{Q}_{j}^{γ} によって生じるポテンシャルの変分を考え、それをフォノンの生成消滅演算子によって書き換えると、

$$H_{ep} = \sum_{\mathbf{k}'\eta'\mathbf{k}\eta\nu} \left\langle \phi_{\mathbf{k}'\eta'} \middle| V^{KS} \left(\mathbf{r}, \{\mathbf{R}_j, \mathbf{Q}_j^\nu\} \right) - V^{KS} \left(\mathbf{r}, \{\mathbf{R}_j\} \right) \middle| \phi_{\mathbf{k}\eta} \right\rangle$$

 $c^{\dagger}_{\mathbf{k}'\eta'}c_{\mathbf{k}\eta}$

$$=\sum_{\mathbf{kq}\eta'\eta\nu}M_{\mathbf{kq}}^{\eta\eta'\nu}c_{\mathbf{k+q}\eta\prime}^{\dagger}c_{\mathbf{k}\eta}\left(\alpha_{\mathbf{q}\nu}+\alpha_{-\mathbf{q}\nu}^{\dagger}\right) \quad (13)$$

が得られる.ここで、変位によって生じるポテンシ ャルの変分をテイラー展開の1次まで取ることを 考えると、電子フォノン相互作用行列要素は

$$M_{\mathbf{kq}}^{\eta\eta'\nu} = \langle u_{\mathbf{k}+\mathbf{q}\eta\prime} | \Delta_{\mathbf{q}\nu} v^{KS} | u_{\mathbf{k}\eta} \rangle \quad (14)$$
$$\Delta_{\mathbf{q}\nu} v^{KS} = \sum_{\kappa} \left(\frac{\hbar}{2MN\omega_{\mathbf{q}\nu}} \right)^{\frac{1}{2}} \boldsymbol{\xi}_{\mathbf{q}\nu}^{\kappa} \sum_{p} \exp\{-i\mathbf{q}(\mathbf{r}) - \mathbf{R}_{p}\} \frac{\partial V^{KS}}{\partial \boldsymbol{\tau}_{\kappa}} \Big|_{\mathbf{r}-\mathbf{R}_{p}} \quad (15)$$

となる.ここで、 $\mathbf{R}_p \ge \mathbf{\tau}_{\kappa}$ はそれぞれ、各原子が含ま れているユニットセルの位置を表すベクトルと、ユ ニットセル内での原子位置を表すベクトルである. 原子の座標は $\mathbf{R}_j = \mathbf{R}_p + \mathbf{\tau}_{\kappa}$ で表される.この表式中 の $\frac{\partial V^{KS}}{\partial \mathbf{\tau}_{\kappa}}$ を計算する方法として、代表的なものが摂動 論を応用し、 V^{KS} の微分が満たす Sternheimer 方程式

$$(e^{-i(\mathbf{k}+\mathbf{q})\cdot\mathbf{r}}H^{\mathrm{KS}}e^{i(\mathbf{k}+\mathbf{q})\cdot\mathbf{r}} - \epsilon_{\mathbf{k}\eta})\partial u_{\mathbf{k}\eta,\mathbf{q}}$$
$$= -\sum_{p}\exp\{-i\mathbf{q}(\mathbf{r}) - \mathbf{R}_{p})\}\frac{\partial V^{\mathrm{KS}}}{\partial \mathbf{\tau}_{\kappa}}\Big|_{\mathbf{r}-\mathbf{R}_{p}}u_{\mathbf{k}\eta} (16)$$

を自己無撞着に解く,密度汎関数摂動理論 (density functional perturbation theory: DFPT) である[5]. ここ で $\partial u_{k\eta,q}$ はコーン・シャム波動関数の格子周期部分 において生じる変化を表している.

DFPT 法を用いると,任意の波数に対して電子フォノン相互作用行列要素を求めることが可能であ

るが,精度の向上のために稠密な波数空間のサンプ リングを行うと,計算時間が現実的ではなくなる. この,精度と計算時間のトレードオフを解決する一 つの方法として DFPT 法と最大局在化ワニエ関数 (maximally localized Wannier function: MLWF) [6]を 組み合わせる手法が提案されている[7,8].

3. 第一原理計算によるジュール熱発生素過程解析

2 章で述べた第一原理計算による電子フォノン 相互作用を伝熱分野に応用した研究事例として、こ こでは参考文献[4]の Si におけるジュール熱発生素 過程の解析を紹介する.

3.1 ジュール発熱過程の定式化

ジュール発熱は、固体物理やデバイス工学における基本的な問題の一つである.ミクロな視点から考えると、半導体におけるジュール熱の発生過程は相互作用の時間スケールを考えると以下のような3 段階のプロセスで記述できる.まず、電界によって加速された電子が、電子間相互作用や欠陥によるタイムスケールが短い散乱によって運動量の緩和を受ける.次に、緩和された電子のエネルギーがフォノン系に電子フォノン相互作用を通じて移行し、フォノンが励起される.そして最後に励起されたフォノンが遅い時間スケールを持つフォノンモードへ緩和し、最終的に熱浴に放熱される.

本研究では、2段階目の電子フォノン相互作用に よるフォノン励起をジュール発熱の素過程である と考える.この段階では、より早い段階で電子が受 ける散乱によって、電子の持つ運動量は波数空間で 等方的な分布を持っていると考えられる.すなわち、 何らかの温度で特徴づけられるフェルミ分布で近 似できる.このように、緩和を受けた電子系は格子 系とは異なる温度を持っていると考えるモデルは 2温度モデルとよばれ、光によって励起された電子 の緩和過程を解析する用途によく用いられている [9,10].

この近似のもとでは、ジュール熱の発生は、電子 温度*T_eの*「熱い電子」から、格子温度*T_lの*「冷たい 格子系」へのエネルギー移動であると考えることが できる.このエネルギー移動を定量化するために、 以下のフォノンのボルツマン方程式を考える.

$$\frac{\partial n_{\mathbf{q}}}{\partial t} = \frac{\partial n_{\mathbf{q}}}{\partial t} \bigg|_{diff} + \frac{\partial n_{\mathbf{q}}}{\partial t} \bigg|_{coll} \quad (17)$$

 $n_{\mathbf{q}}$ はフォノンの分布関数である. $\frac{\partial n_{\mathbf{q}}}{\partial t}\Big|_{diff}$ は温度勾 配の存在による拡散項, $\frac{\partial n_{\mathbf{q}}}{\partial t}\Big|_{coll}$ は電子フォノン相 互作用による衝突項である.ここでは温度勾配は無 視できるほど小さい状況を考え,拡散項を無視する. 電子フォノン相互作用による衝突項は,フォノンが 生成される過程 $P_{\mathbf{q}\nu}^{+}$ とフォノンが消滅する過程 $P_{\mathbf{q}\nu}^{-}$ に分けることができる.それぞれ,

$$P_{\mathbf{q}\nu}^{+} = 2 \frac{2\pi}{\hbar} \sum_{\mathbf{k}} |M^{nm\nu}(\mathbf{k}, \mathbf{q})|^{2} (n_{\mathbf{q}\nu} + 1) \delta(E_{n\mathbf{k}} - E_{m\mathbf{k}+\mathbf{q}} + \hbar\omega_{\mathbf{q}\nu}) (1 - f_{n\mathbf{k}}) f_{m\mathbf{k}+\mathbf{q}} \quad (18)$$

$$P_{\mathbf{q}\nu}^{-} = 2 \frac{2\pi}{\hbar} \sum_{\mathbf{k}} |M^{nm\nu}(\mathbf{k}, \mathbf{q})|^{2} n_{\mathbf{q}\nu} \delta(E_{m\mathbf{k}+\mathbf{q}} - E_{n\mathbf{k}} - \hbar\omega_{\mathbf{q}\nu}) (1 - f_{m\mathbf{k}+\mathbf{q}}) f_{n\mathbf{k}} \quad (19)$$

のように書ける. この2つを足し合わせ, 整理すると,

$$\begin{aligned} \frac{\partial n_{\mathbf{q}}}{\partial t} \bigg|_{coll} &= \sum_{\nu} P_{\mathbf{q}\nu}^{+} - P_{\mathbf{q}\nu}^{-} \\ &= 2 \frac{2\pi}{\hbar} \sum_{\mathbf{k},\nu} |M^{nm\nu}(\mathbf{k},\mathbf{q})|^{2} \{ n_{\mathbf{q}\nu} (f_{m\mathbf{k}+\mathbf{q}} - f_{n\mathbf{k}}) \\ &+ f_{m\mathbf{k}+\mathbf{q}} (1 - f_{n\mathbf{k}}) \} \delta (E_{n\mathbf{k}} - E_{m\mathbf{k}+\mathbf{q}} \\ &+ \hbar \omega_{\mathbf{q}\nu}) (20) \end{aligned}$$

が得られる.フォノン系のエネルギーの増減は,フ ォノン状態の占有数変化にそれぞれのフォノンモ ードのエネルギーを乗ずることで得られるので,

$$\frac{\partial E_{ph}}{\partial t}\bigg|_{coll} = 2\frac{2\pi}{\hbar} \sum_{\mathbf{k},\mathbf{q},\nu} \hbar \omega_{\mathbf{q}\nu} |M^{nm\nu}(\mathbf{k},\mathbf{q})|^2 \{n_{\mathbf{q}\nu} (f_{m\mathbf{k}+\mathbf{q}} - f_{n\mathbf{k}}) + f_{m\mathbf{k}+\mathbf{q}} (1 - f_{n\mathbf{k}})\} \delta(E_{n\mathbf{k}} - E_{m\mathbf{k}+\mathbf{q}} + \hbar \omega_{\mathbf{q}\nu})$$
(21)

ル熱に緩和するレートであると考えられる.式中の *M^{nmv}*(**k**,**q**)やフォノン分散,電子のバンドを第一原 理計算から求めることでジュール熱発生過程をモ ードや波数に分解して解析できる.

3.2 Si 結晶での応用事例

前節の定式化に基づき, Si 結晶におけるジュール 熱発生素過程を解析した結果を紹介する.フォノン 分散,電子のバンド構造,電子フォノン相互作用の 計算には Quantum Espresso パッケージ[11,12]及び, EPW パッケージ[8]による最大局在化ワニエ関数に よる補間法を用いている.擬ポテンシャルとしては ノルム保存型のものを用い,交換相関汎関数には一 般化勾配近似を用いている.

本題のジュール熱発生素過程の議論に入る前に, Si 結晶において, 2 温度近似を用いた定式化が妥当 であるかを検証しておく. 3.1 節で述べたように, この近似では電界で加速された電子が早い緩和過 程を受けた後に取る分布を,ある電子温度のフェル ミ分布で置き換えている.まず,何度の電子温度(*T_e*) が何 kV/cm の電界強度(*E*)に相当するのかの変換則 を決めなくてはいけない.ここでは,マクロスコピ ックなジュール熱の定義が,移動度μと素電荷eを 用いてeµE²で表されることに着目する.前節で求 めたジュール熱の発生レートはこれと合致する必 要があるため,以下の等式が成り立つ必要がある.

$$e\mu_{avg}(T_e, T_l)E^2 = \frac{1}{N_c} \frac{\partial E_{ph}}{\partial t} \bigg|_{coll}$$
(22)

ここで, $\mu_{avg}(T_e, T_l)$ は,電子温度と格子温度が異なる場合に拡張した移動度であり,緩和時間近似の下では以下のように定義される.

$$\begin{split} \mu_{\alpha\beta}(T_e, T_l) \\ &= -\frac{e}{N_c \Omega} \sum_n \int \frac{d\mathbf{k}}{\Omega_{BZ}} \frac{\partial f_{n\mathbf{k}}(T_e)}{\partial E_{n\mathbf{k}}} v_{n\mathbf{k},\alpha} v_{n\mathbf{k},\beta} \tau_{n\mathbf{k}}(T_e, T_l), \\ &\frac{1}{\tau_{n\mathbf{k}}(T_e, T_l)} = \frac{2\pi}{\hbar} \sum_{m\nu} \int \frac{d\mathbf{q}}{\Omega_{BZ}} |M^{nm\nu}(\mathbf{k}, \mathbf{q})|^2 \left[\{ 1 \\ &- f_{m\mathbf{k}+\mathbf{q}}(T_e) + n_{\mathbf{q}\nu}(T_l) \} \delta(E_{n\mathbf{k}} \\ &- E_{m\mathbf{k}+\mathbf{q}} - \hbar \omega_{\mathbf{q}\nu}) \\ &+ \{ f_{m\mathbf{k}+\mathbf{q}}(T_e) + n_{\mathbf{q}\nu}(T_l) \} \delta(E_{n\mathbf{k}} \\ &- E_{m\mathbf{k}+\mathbf{q}} + \hbar \omega_{\mathbf{q}\nu}) \right] (23) \end{split}$$

 $\mu_{avg}(T_e, T_l)$ も第一原理計算結果からもとめ,式 (22)を解き, T_e とEの対応関係をプロットしたもの が図1である.電子キャリアとホールキャリアで比 例係数は異なるものの,ほぼ線形の関係が成り立つ ことが見て取れる.



図1 電子温度と電界強度の対応関係

 $T_e \ge E の対応関係を用いると、<math>\mu_{avg}(T_e, T_l)$ を $\mu_{avg}(E, T_l)$ の電界強度に関する量として書き換える ことができる. Si においては、強電界下の移動度は

$$\mu_{avg}(E) = \frac{\mu_0}{\left[1 + \left(\frac{E}{E_c}\right)^{\beta}\right]^{\frac{1}{\beta}}} \quad (24)$$

のような現象論の式に従うことが知られている [13]. μ_0 (cm²/Vs), E_c (kV/cm), そして β はフィッテ ィングパラメータである.



図 2 第一原理計算から得られた移動度の電界強 度依存性とそのフィッティング

第一原理計算結果から得られたµavg(E,T_l)と,その式(24)によるフィッティングを図2に示す.現象 論の式によるフィッティングは計算結果とよく一 致しており,このことは電界によって加速された電 子のエネルギー緩和を 2 温度近似で記述すること が Si では妥当であることを示している.

次に,式(21)のジュール熱発生レートの解析結果 を紹介する.ここでは式(21)の値にどのフォノンモ ードが強く寄与しているかに着目する.まず Si で のフォノン分散を図3に示す.



図3で示すように、ここではフォノンモードをエ ネルギーに応じて3つの領域に区分している. <27 meVのエネルギーを持つフォノンは領域I, <27 か つ <50 meVのものは領域II, そして >50 meVのモ ードは領域IIIに区分されるとしている. 領域 I はお もに TA (横波音響)モード、領域IIは LA (縦波音 響)モード、そして領域IIIは光学フォノンが占めて いる.

図4は、それぞれの領域に属するフォノンモード に対して、式(21)で定義される電子フォノン相互作 用を介した電子のエネルギー緩和レート、すなわち ジュール熱の発生レートを計算した結果である. Si はドーパントによって、n型にもp型にもなりうる ため、電子キャリアが存在する場合とホールキャリ アが存在する場合の両方に対して計算を行ってい る.

どちらのキャリアにおいても、エネルギー緩和の 大半は、領域IIIに属するフォノンモードによって担 われている.また、領域Iに属するフォノンモード の寄与は小さい.その一方、領域IIに属するフォノ ンモードの寄与は電子キャリアとホールキャリア では大きく異なる.電子キャリアでは、電子のエネ ルギー緩和に対して、領域IIのフォノンモードは領 域IIIのフォノンモードの約半分程度の寄与を有し ている.しかし、ホールキャリアではほとんどエネ ルギー緩和に寄与していないことが見て取れる.

このようなキャリアの種別による緩和プロセス

の違いは、バンド構造から理解できる.電子キャリ アは伝導帯下端(CBM)に分布している.Siの場 合、CBM は Δ_1 バレーと呼ばれ、ブリルアンゾーン のX 点近傍に存在する.ダイヤモンド構造の対称 性により、6つの等価な Δ_1 バレーが存在し、バレー 間の遷移はLO(縦波光学)、LA、TO(横波光学)フ オノンによって担われる[14,15]. Δ_1 バレー内の遷移 は、音響フォノンによって担われる.LAフォノン は主に領域IIに存在しており、バレー間遷移に伴う エネルギー緩和過程の存在が電子キャリアの場合 には領域IIのフォノンモードもエネルギー緩和に 寄与する理由と考えられる.



図4 電子キャリアとホールキャリアにおけるエ ネルギー緩和レート

一方で、ホールキャリアが分布する価電子帯上 端(VBM)はブリルアンゾーンにおけるΓ点に存 在しており、電子キャリアとは異なり、バレー間 の遷移は存在しない.また図5に示すように、 VBM 近傍で価電子バンドが作る等エネルギー面に は波数空間で強い異方性がある.そのため、電子 と相互作用しエネルギーを緩和させるフォノンモ ードの波数に強い制約が存在し、LA やTA モード によるエネルギー緩和が生じにくくなっていると 考えられる.



図5 VBM 近傍の価電子帯が作る等エネルギー面

4. まとめ

本稿では密度汎関数理論に基づく第一原理計算 によって電子フォノン相互作用を精密に計算する 方法とその応用事例を紹介した.格子振動によっ て生じるポテンシャルの変調が電子状態に及ぼす 影響を摂動論によって取り扱い,電子状態・ポテ ンシャルのそれぞれの微小変化の間に成り立つ自 己無撞着な方程式を解く密度汎関数摂動理論が, 電子フォノン相互作用を様々な物質系で定量的に 予測する基盤となっている.

著者らは電子フォノン相互作用が半導体におけ るジュール熱の起源であることに着目し,Siにお けるジュール熱発生素過程の精密解析を行った. その結果,電子キャリアとホールキャリアではジ ュール熱の発生に寄与するフォノンモードに違い があることが判明した.Siのような良く知られた 物質でも,このような熱発生の素過程はこれまで 明らかになっていなかった.今回の知見や研究対 象を広げていくことにより,ジュール熱によるエ ネルギー損失を根本的に改善する物質設計に結び つくことも期待される.

参考文献

- E. R. Margine and F. Giustino, *Anisotropic Migdal-Eliashberg Theory Using Wannier Functions*, Phys. Rev. B, 87, 024505 (2013).
- [2] S. Poncé, E. R. Margine, and F. Giustino, Towards

Predictive Many-Body Calculations of Phonon-Limited Carrier Mobilities in Semiconductors, Phys. Rev. B, **97**, 121201 (2018).

- [3] S. Poncé, D. Jena, and F. Giustino, *Route to High Hole Mobility in GaN via Reversal of Crystal-Field Splitting*, Phys. Rev. Lett., **123**, 96602 (2019).
- [4] E. Minamitani, *Ab Initio Analysis for the Initial Process of Joule Heating in Semiconductors*, Phys. Rev. B, **104**, 085202 (2021).
- [5] S. Baroni, S. de Gironcoli, A. Dal Corso, and P. Giannozzi, *Phonons and Related Crystal Properties from Density-Functional Perturbation Theory*, Rev. Mod. Phys., **73**, 515 (2001).
- [6] N. Marzari, A. A. Mostofi, J. R. Yates, I. Souza, and D. Vanderbilt, *Maximally Localized Wannier Functions: Theory and Applications*, Rev. Mod. Phys., 84, 1419 (2012).
- [7] F. Giustino, M. L. Cohen, and S. G. Louie, *Electron-Phonon Interaction Using Wannier Functions*, Phys. Rev. B, 76, 165108 (2007).
- [8] S. Poncé, E. R. Margine, C. Verdi, and F. Giustino, EPW: Electron–Phonon Coupling, Transport and Superconducting Properties Using Maximally

Localized Wannier Functions, Comput. Phys. Commun., **209**, 116 (2016).

- [9] P. B. Allen, Theory of Thermal Relaxation of Electrons in Metals, Phys. Rev. Lett., 59, 1460 (1987).
- [10] S. Dal Forno and J. Lischner, *Electron-Phonon Coupling and Hot Electron Thermalization in Titanium Nitride*, Physical Review Materials, 3, 115203 (2019).
- [11] P. Giannozzi et al., QUANTUM ESPRESSO: A Modular and Open-Source Software Project for Quantum Simulations of Materials, J. Phys. Condens. Matter, 21, 395502 (2009).
- [12] P. Giannozzi et al., *Quantum ESPRESSO toward the Exascale*, J. Chem. Phys., **152**, 154105 (2020).
- [13] D. M. Caughey and R. E. Thomas, Carrier Mobilities in Silicon Empirically Related to Doping and Field, Proc. IEEE, 55, 2192 (1967).
- [14] D. K. Ferry, Semiconductor Transport (CRC Press, New York, 2000).
- [15] B. K. Ridley, Quantum Processes in Semiconductors (Oxford University Press, Oxdord, 2013).

単原子スケール非平衡熱輸送場の分子動力学解析

Non-equilibrium thermal transport at single-atom scale based on molecular dynamics method

> 藤原 邦夫(大阪大学) Kunio FUJIWARA (Osaka University) e-mail: k.fujiwara@mech.eng.osaka-u.ac.jp

1. はじめに

固体と液体間の界面(固液界面)は,熱流体の 輸送現象(濡れ,相変化,化学反応等を含む物質・ エネルギー輸送)とも密接に関連しており,熱流 体工学の分野で重要な研究対象である.分子動力 学に基づく分子論的な観点からの研究に関しても 数多く存在するが,ここでは熱工学分野の本研究 と関連のある固液界面熱輸送に関する解説・研究 の一部を引用させて頂くことにとどめたい[1-5].

原子スケールにおいて固液界面を通過する熱エ ネルギーの輸送現象を考えると、界面は様々な原 子・分子種の振動特性に起因する輸送特性を有し ていると考えられ、その実際の描像は一般的に複 雑であると言える.一方で輸送現象とは本来非平 衡な現象であるが,原子スケールにおける非平衡 過程の描像は単純な系でも学術的によく分かって いるとは言えない.本稿では、古典分子動力学の 助けを借りて"非平衡輸送現象"として固液界面 の熱輸送現象をオイラー型の場の輸送量に基づき 探求した研究に関して紹介する.具体的には,原 子スケールにおいてオイラー型の場の物理量とし て熱流束を算出し可視化する解析技術の解説と, 解析技術に基づき明らかとなった熱エネルギー輸 送状態の新しい描像や熱輸送機構に関して紹介す る.本研究は主に参考文献[6]の内容であるが、こ れまでの著者の研究[7-11]にも深く関連している.

2. 微視的な場の輸送量

2.1 場の物理量

古典的な描像として原子・分子が空間の中で離 散的に存在すると考えると,古典分子動力学では ラグランジュ的に原子・分子に着目して,原子・ 分子間に作用する力を算出し分子の挙動を解析す る.位置 r と時刻 t において,基本的な物理量で ある質量,運動量,エネルギー密度は原子や分子 が有している物理量を用いて以下のように表すこ とができる.

$$\rho(\mathbf{r},t) = \sum_{\xi} \sum_{i=1}^{N_{\xi}} m_{\xi,i} \delta(\mathbf{r}-\mathbf{r}_i), \qquad (1)$$

$$\rho \mathbf{v}(\mathbf{r},t) = \sum_{\xi} \sum_{i=1}^{N_{\xi}} m_{\xi,i} \mathbf{v}_{\xi,i} \delta(\mathbf{r}-\mathbf{r}_{i}), \qquad (2)$$

$$\rho e(\mathbf{r},t) = \sum_{\xi} \sum_{i=1}^{N_t} e_{\xi,i} \delta(\mathbf{r} - \mathbf{r}_i).$$
(3)

ここで, m は粒子の質量, ρ は密度, e は粒子が 有しているエネルギー(運動エネルギーとポテン シャルエネルギーの合計), ξ は粒子の種類, i は 粒子の番号, N_{ξ} は粒子種 ξ の個数を示す.上式の 右辺で δ はディラックのデルタ関数である.この 定義に基づき, 輸送量の微視的な表式が導出され る[12].以下で,一例として二対間ポテンシャル を用いた場合の熱流束の式を示す.

$$\mathbf{J}(\mathbf{r},t) = \sum_{\xi} \sum_{i}^{N_{\xi}} u_{\xi,i} \ \mathbf{v}_{\xi,i} - \mathbf{v}(\mathbf{r}_{\xi,i},t) \ \delta(\mathbf{r} - \mathbf{r}_{\xi,i})$$
$$- \frac{1}{2} \sum_{\xi} \sum_{\zeta} \sum_{i}^{N_{\xi}} \sum_{j=i}^{N_{\zeta}} \mathbf{r}_{\xi_{i},\zeta_{j}} \mathbf{F}_{\xi_{i},\zeta_{j}} \cdot \mathbf{v}_{\xi,i} - \mathbf{v}(\mathbf{r},t) \quad (4)$$
$$\times \int_{0}^{1} \delta(\mathbf{r} - \mathbf{r}_{\xi,i} - s\mathbf{r}_{\xi_{i},\zeta_{j}}) \mathrm{d}s.$$

上式で, F は原子・分子間力を示す. 紙面の制 限上詳細な文字の説明は省略するが, 必要に応じ て参考文献を参照して頂きたい[6].

さて、上式では流束が場の物理量として定義されているが、いわば"点"において定義されていることに注意を要する.式(4)を用いて分子動力学解析で例えば界面全体で平均化した物理量を扱う場合は難しくはないが、場所 r を原子スケールで体積を有する局所的な場所として考える場合は、その取り扱いが簡単ではない.図1のような巨視的なスケールで現象論的に支配方程式を作る考え

を原子スケールに適用することを考えてみる.例 えば局所体積のスケールを原子・分子の直径以下 (1Å以下)とすると局所体積内には原子や分子が 存在しない状況が生じるが,そのような状況でも 理論的に整合性がとれる方法を用いる必要がある. つまり,式(4)のような輸送量を空間における局所 の"体積"や"面積"での物理量となるよう再定 義して初めて,巨視的なスケールのCFDのように オイラー型の場の輸送量を原子・分子スケールで 算出したこととなる.



理想的な系として図2のような粒子を多数含む ような系を考え、メッシュ状に区切られた局所体 積で輸送量を算出することを考える.ここで、局 所体積はその中心点rを通る面で構成されている とし、局所体積の輸送量はこれらの面で算出する こととする.本研究では局所において純粋に瞬時 の輸送量を評価したいためにこのような定義とし ているが、他の方法(体積平均する方法や、別の 面で評価する方法)もあることに注意する必要が ある.



図2の定義において、熱流束の三次元空間分布 を求める式は以下のようになる.ここで、 Π 関数 はHeaviside step関数を用いて定義されており、sgn は符号関数である.ここでも文字の詳細な説明は 省略させて頂く[6].

$$J_{\alpha}(\mathbf{r},t) = \frac{1}{A_{\alpha}} \sum_{\xi} \sum_{i}^{N_{\xi}} e_{\xi,i} \ v_{\xi,i,\alpha} - \overline{v}_{\alpha}(\mathbf{r}_{\xi,i},t)$$

$$\times \delta(\alpha_{\xi,i} - \alpha) \prod \left(\frac{\beta_{\xi,i} - \beta}{\Delta\beta}\right) \prod \left(\frac{\gamma_{\xi,i} - \gamma}{\Delta\gamma}\right)$$

$$- \frac{1}{4A_{\alpha}} \sum_{\xi} \sum_{\zeta} \sum_{i}^{N_{\xi}} \sum_{j=i}^{N_{\xi}} \mathbf{F}_{\xi_{i,\zeta_{j}}} \cdot \mathbf{v}_{\xi,i} - \overline{\mathbf{v}}(\mathbf{r},t) \quad (5)$$

$$\times \operatorname{sgn}(\alpha - \alpha_{\xi,i}) - \operatorname{sgn}(\alpha - \alpha_{\zeta,j})$$

$$\times \prod \left(\frac{\beta_{\alpha} - \beta}{\Delta\beta}\right) \prod \left(\frac{\gamma_{\alpha} - \gamma}{\Delta\gamma}\right).$$

図2のような分割された空間の局所局所で上式 を評価することにより,原子スケールでオイラー 型の場の輸送状態を空間分布として算出すること が可能となる.

2.2 計算条件

本稿で紹介する計算では, Lennard–Jones ポテン シャルで相互作用する粒子で構成された固液界面 系を用いた.液体部は固体壁面に挟まれ,壁面間 に一次元的な温度勾配をもうけることで熱流が固 液界面を通過する一般的な計算系である.計算系 においてz軸を界面に対して垂直方向, xy軸を界 面に対して平行方向にとっている.固液界面の濡 れ性をポテンシャルの井戸の深さを調整すること で変化させた.本原稿では,固液界面の特に固体 と液体の接合部の単原子スケールに着目して結果 を示す.物理量に関しては全て無次元化を行って いる.

3.結果

3.1 熱流束の二次元分布

式(5)を用いて,固液界面を通過する熱流束を分 子動力学に基づき算出した結果(二次元分布)を 図3に示す[6].図3は濡れ性が良い場合と悪い場 合の結果を示しており,それぞれの場合で熱流束 のz方向成分とx方向成分を示している.系内で 温度勾配は一次元的(z方向)であり,図3中の 流体分子と固体原子の瞬間的な位置が示された図 から対象としている空間スケールが把握できる. 著者の知る限り,非平衡現象として単原子スケー ルから固液界面熱輸送状態の明確な描像を示した 初めての結果である[10].得られた熱流構造に関 して,固体と液体部で顕著な違いが確認できる. まず固体では原子構造が反映された熱流束の明確 な構造が確認できる.一方流体部では,固体から 離れたバルク部では熱流束の構造が見られないが, 固体壁面近傍の吸着層では熱流束の明確な構造が 確認できる.このような熱流構造が吸着した固体 原子でどの程度変化し制御可能か調べた研究もあ る[11].



図3 固体-液体界面における熱流束の二次元 分布(z:巨視的な温度勾配方向). (a,b) 濡れ 性が悪い場合.(c,d) 濡れ性が良い場合.J_xと J_zはそれぞれ x 方向と z 方向の熱流束を示して いる.

3.2 熱流束の三次元分布

図3は二次元分布の結果であるから紙面奥行き 方向に平均化された熱流束を示しており,熱流束 の単原子スケールにおける真の特性を評価するこ とは難しい.原子構造は3次元的であることから, 対応する3次元的な熱流構造を求めることで,熱 流束のより詳細な特性が理解可能となる.式(5)は 熱流束の三次元分布を求めるために定式化された ものであり,解析技術を構築し局所空間を極限的 に小さくとることで,空間的にほとんど平均化さ れていない熱流束の3次元的な構造が得られる (図4).図4では,固液界面内(近接している表 面固体原子と液体分子吸着層の間)において z 方 向の各位置での熱流束を示している.図4でも濡 れ性が良い場合と悪い場合の結果が示されており, 例えば固体原子近傍(z*=0.15)では固体原子から の指向性の強い熱流束が観測できる.一方で液相 側に近づく(zの位置が増加する)と,強い熱流 のスポットは分岐して広がり,濡れ性が悪い場合 は熱流の指向性が弱いことも明らかとなった.こ のように,熱流の三次元分布(空間的な熱流構造) から界面輸送特性を解明可能であることがわかっ た.

単原子スケールから熱流束の二次元・三次元空 間分布を示してきたが、巨視的に一次元の熱伝導 を考えた場合、巨視的な温度勾配方向に対して、 熱流束は一次元的(温度勾配方向に一定)である. 図5は、検出された二次元・三次元的な熱流束が 一次元的な通常の熱流束の値と比較してどの程度 異なるのか,定量的に示した結果である.図中で、 それぞれの場合の熱流束は一次元の熱流束の値で 除してあり, Efs は濡れ性のパラメータである(値 が大きいほど濡れ性がよい).二次元分布の結果は, xz 平面で強い熱流が観測された特定のx 位置での 値を示しており,一方三次元分布の結果では,各 z 位置で強い熱流を示した値をプロットしている. 結果より、表面固体原子(z*=0)に近い位置から 距離が離れる(流体側に近づく)に従い、熱流束 の値は指数関数的に減衰していることがわかる. また,平均化された一次元的な熱流束と比較して, 二次元・三次元分布として検出された熱流束の値 は大きく異なることが明確にわかる. さらに二次 元分布と三次元分布それぞれで検出される熱流束 の値も大きく異なり,熱流束の定量性を重視する 際には、やはり三次元分布の結果が重要であるこ とが理解できる.以上の図4、図5の結果は、原 子スケールの非平衡輸送現象を改めて考える上で, 重要な描像であると言える.



図4 固液界面内における三次元熱流構造(各 z 方向高さにおける断面で表示). (a) 濡れ性が悪い 場合.(b) 濡れ性が良い場合.濡れ性が良い場合に指向性が顕著な熱流が観測されていることがわかる.



図 5 一次元,二次元,三次元分布における熱 流束の定量的な比較.2D:二次元分布における 値. ε_{fs}=2.0:三次元分布における値(濡れ性が 良い場合). ε_{fs}=0.5:三次元分布における値(濡 れ性が悪い場合).

4. 微視的な場の輸送量のさらなる開拓

ここまでの内容で、原子スケールにおけるオイ ラー型の輸送場として固液界面を通過する熱流束 を単原子スケールの空間分解能で示してきた.得 られた熱流束場の描像は固液界面の熱輸送特性を 明確に把握可能であり有用である.しかし、オイ ラー型の輸送場の結果を三次元分布として得るた めには、計算負荷が深刻となる.例えば図4の結 果を得るためには、50µs~100µsの時間平均を要 する.また分子動力学で輸送機構を追求する場合、 ラグランジュ的に輸送量を考える一般的な手法と、 オイラー的な観点の手法とどちらが優位となるの であろうか? オイラー型の観点で現象を追求す るのであれば,例えば図4で示されているような 強い熱流束が観測された場所に着目し,スペクト ルの観点からそのメカニズムや制御の可能性に関 して研究を行うことが可能である[13,14].しかし, それは結局のところラグランジュ的に輸送現象を 解明する方策とあまり違いがないことになる(よ り局所に着目し詳細を解明することはできる).こ こでは,極限的な局所で検出された場の輸送量の 特性に基づきスペクトルに依存せずに非平衡輸送 現象を把握する新しい方法の概要を述べる.さら に専門的な内容となるので,理論の構築も含め詳 細は参考文献[6]をご参照頂きたい.

再び固液界面を通過する熱流束を考えると,+ 分な時間平均をとれば図4のように単原子スケー ルで非平衡定常状態における輸送量の空間分布を 示すことが可能である.しかしそれぞれの局所で さらに短い時間スケールに着目すれば,実は一つ 一つの原子・分子間力によってオーダーの異なる エネルギー流束が生じている.このような単一の 相互作用レベルで観測される物理量を新たな現象 把握の手段として移行させることで,新しい観点 (より微視的な観点)からスペクトル的な情報をも 含み現象解明を行うことを考える.

一例として,固液界面を通過する単一の相互作 用によるエネルギー流束に着目し,その際に界面 の局所に作用する応力とエネルギー流束を軸とす る平面で状態数 Γをプロットした結果を示す(図 6). この結果から、単一の相互作用レベルにおい てどの程度の応力帯域やエネルギー流束帯域で界 面を介してエネルギーがやり取りされているのか がわかる.この結果は、単一相互作用レベルで観 測される物理量と、界面全体で平均化された熱流 束や図4の単原子スケールで特定された熱流束と の接続を示す一例である.



図 6 固液界面の熱輸送の成り立ち. 横軸は単 一の相互作用により観測される瞬時的な場の エネルギー流束,縦軸は単一の相互作用により 観測される場の応力を示す. Γは状態密度であ る.

また図7において、横軸に単一相互作用に基づ く応力、縦軸に状態密度とエネルギー流束を示す. この結果より、応力状態により正味のエネルギー 流束が負の値(巨視的な熱伝導方向に対して逆方 向)、や正の値を示すことがわかる.そして、どの 応力帯域でエネルギー流束が顕著であるかわかる. この結果を横軸方向に積分すれば、巨視的な熱流 束の値が得られる.このように、極限的な場の物 理量を用いることで、巨視的な流束を新しい観点 から解釈することが可能であることがわかった.

本稿では詳細を省略しているが,提案した方法 は現象論的な観点から構築されており,場の輸送 量を様々な物理量(例えば,原子位置や温度等) に関連付けて,なぜその場所でそのような輸送特 性となるか分子動力学の観点から完全に把握する ことが原理的には可能である.他の結果として, 場の応力が小さな値の場合に状態密度が高くなる 特性に基づき場の熱輸送機構の理解が可能である ことや,固体表面原子の運動と固液界面熱輸送特 性の密接な関係性が明らかとなっている[6].



図7 固液界面の熱輸送量の成り立ち.横軸は単 -の相互作用により観測される場の応力を示 す.また縦軸(左側)は状態密度を,縦軸(右 側)は場のエネルギー流束を示す.

5. おわりに

本稿では、"非平衡輸送現象"として固液界面の 熱輸送現象を古典分子動力学に基づき単原子スケ ールから探求した研究を紹介した.特にオイラー 型の場の輸送量(熱流束)を算出し空間分布とし て可視化する方法の解説と、解析技術に基づき明 らかとなった単原子スケールにおける固液界面の 熱エネルギー輸送の描像や熱輸送機構に関して概 要を示した.また、通常のオイラー型の場の輸送 量をさらに微視的でかつ基本的な物理量で解明す る方策を示した.

今後の展望として, さらに複雑な効果を考慮し た輸送場に関する解析技術の高度化がまず挙げら れる.また本研究で示した場の輸送量をさらに微 視的な観点からの物理量と接続する方法に関して は,さらなる研究が必要である.オイラー型の輸 送場の解析技術の高度化や,場の輸送量の解釈が さらに進展し,本解析技術が"原子スケール CFD" と呼ばれる日が来ることを願う.

謝辞

本稿の執筆にあたり,共同研究者の芝原正彦先 生(大阪大学)に謝意を表します.本研究は JST さきがけ「熱制御」領域において実施されたもの です.研究総括の花村克悟先生,またアドバイザ 一の皆さま,さきがけ研究者の皆さまには大変お 世話になり多くの影響を受けました.心より感謝 させて頂きます.特に矢吹智英先生(九州工業大 学)から沸騰現象の実験的な観点からの考えに関 して学ばせて頂きました.さらに海外では,Prof. Yang Shao-Horn (MIT), Dr. Kiarash Gordiz (MIT), Prof. Peter Daivis (Royal Melbourn Institute of Technology), Prof. Billy Todd (Swinburne University of Technology)に大変お世話になりました. 最後に, 貴重な執筆の機会を与えて頂きました志賀拓麿先 生 (産総研), 柏木誠先生 (早稲田大学) にお礼申 し上げます.

特記事項

本原稿で使用した図は参考文献[6]から転用・も しくは改変した図©Kunio Fujiwara であり, クリエ イティブ・コモンズ・ライセンス(表示 4.0 国際) のもとに掲載を許諾されています.

https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/

参考文献

- 小原拓,液体中の熱伝導:分子動力学による 一描像,伝熱,50-211 (2011) 37.
- [2] Maruyama, S. and Kimura, T., A Study on Thermal Resistance over a Solid-Liquid Interface by the Molecular Dynamics Method, Thermal Sci. Eng. 7-1 (1999) 63.
- [3] 芝原正彦,ナノスケールの微細構造が流体— 固体界面のエネルギー輸送機構に与える影響, 伝熱,56-236 (2017) 25.
- [4] 長山暁子,固液界面の境界条件とマイクロ伝 熱機構,伝熱, 50-211 (2011) 29.
- [5] 松原裕樹, 菊川豪太, 小原拓, 液体・界面の 熱輸送特性発現機構—分子設計を志向して, 伝熱, 56-236 (2017) 17.
- [6] Fujiwara, K. and Shibahara, M., Thermal transport mechanism at a solid-liquid interface based on the heat flux detected at a subatomic spatial resolution, Phys. Rev. E 105-3 (2022) 034803. DOI: 10.1103/PhysRevE.105.034803
- [7] Fujiwara, K. and Shibahara, M., Local pressure

components and interfacial tension at a liquid-solid interface obtained by the perturbative method in the Lennard-Jones system, J. Chem. Phys. **141** (2014) 034707.

- [8] Fujiwara, K. and Shibahara, M., Local pressure components and interfacial tensions of a liquid film in the vicinity of a solid surface with a nanometer-scale slit pore obtained by the perturbative method, J. Chem. Phys. 142 (2015) 094702.
- [9] Fujiwara, K. and Shibahara, M., Local mass and energy transports in evaporation processes from a vapor-liquid interface in a slit pore based on molecular dynamics, AIP Adv. 8 (2018) 025124.
- [10] Fujiwara, K. and Shibahara, M., Detection of heat flux at single-atom scale in a liquid-solid interfacial region based on classical molecular dynamics, Appl. Phys. Lett., **114** (2019) 011601.
- [11]Fujiwara, K. and Shibahara, M., Atomic-scale thermal manipulation with adsorbed atoms on a solid surface at a liquid-solid interface, Sci. Rep., 9 (2019) 13202.
- [12] Irving, J. H. and Kirkwood, G., The statistical mechanical theory of transport processes. IV. The equations of hydrodynamics, J. Chem. Phys. 18 (1950) 817.
- [13] Fujiwara, K. and Shibahara, M., A spectral analysis of relationships between overall and local thermal transport across nanostructured solid-liquid interfaces, ASTFE Digital Library (Proc. 7th Thermal Fluids Eng. Conf.) (2022) 399.
- [14] Fujiwara, K. and Shibahara, M., Thermal transport property at a solid-liquid interface with atomic structures: step, cluster, vacancy, and adatom, ASTFE Digital Library (Proc. 8th Thermal Fluids Eng. Conf.) (2023) 1141.

本会主催行事

平云 工 阻口	「手					
開催日 行事名		申込締切	原稿締切	問合先		
2024 年						
7月	5(金)	第11回「伝熱工学の基礎」講習会			第 11 回「伝熱工学の基礎」講習会運営事務局 E-Mail: basic-lecture2024@pacmice.jp	

本会共催,協賛,後援行事

開催日		行事名	申込締切	原稿締切	問合先	掲載号
2024 年						
7月	1(月) ~	The 8th International Symposium on Fuels and Energy (ISFE2024)			広島大学エネルギー超高度利用研究拠点	
	2(火)					
	11(木)	2023 年度計算力学技術者(CAE 技術 者)資格認定事業			(一社)日本機械学会出版販売グループ 宮田 miyata@jsme.or.jp	
	19(金) ~ 21(日)	第 50 回可視化情報シンポジウム			一般社団法人可視化情報学会事務局 office@vsj.jp	
8月	28(水)	24-65 講習会「実験流体力学 流体計 測の基礎」			(一社)日本機械学会総合企画グループ 佐藤 sato@jsme.or.jp	
9月	4(水) ~ 6(金)	日本混相流学会混相流シンポジウム 2024			 (株) 学術出版印刷内 日本混相流学会事務局 TEL06-6466-1588/FAX06-6463-2522 E-mail: office@jsmf.gr.jp 	
	4(水) ~ 6(金)	2024年度日本冷凍空調学会年次大会			日本冷凍空調学会 年次大会協賛担当:字田 Tel: 03-5623-3223 E-mail: y.uda.pa@jsrae.or.jp	
	12(木) ~ 13(金)	No.23-63 講習会『伝熱工学資料(改 訂第5版)』の内容を教材にした熱設 計の基礎と応用」			(一社)日本機械学会出版販売グループ熱工学 部門担当 宮田 miyata@jsme.or.jp	
	17(火) ~ 19(木)	日本実験力学会 2024 年度年次講演会			新潟大学医学部保健学科内 日本実験力学会事 務局 担当:高木由紀子/Tel:025-368-9310/ Fax:025-368-9309/ E-mail:office-jsem@clg.niigata-u.ac.jp	
	25(水) ~ 27(金)	日本流体力学会 年会 2024			 (一社) 日本流体力学会 03-3714-0427/FAX: 03-3714-0434 E-mail: info@nagare.or.jp 	
10 月	$5(\pm)$ \sim $6(\pm)$	No.24-19 講習会「熱工学カンファレ ンス 2024」			 (一社)日本機械学会出版販売グループ 宮田 miyata@jsme.or.jp 	
	22(火)	水・蒸気性質シンポジウム (JPAPWS2024)			日本水・蒸気性質協会 (JPAPWS) 徳島事務局 篠原 office@jpapws.org	
	23(水) ~ 24(木)	第 52 回日本ガスタービン学会定期講 演会			(公社) 日本ガスタービン学会 E-mail: gtsj-office@gtsj.org	
	26(土)	日本機械学会関東支部山梨講演会			日本機械学会関東支部 E-mail: ishizawa@jsme.or.jp	
	28(月) ~ 30(水)	第 45 回日本熱物性シンポジウム			日本熱物性学会事務局 matsuura@iis.u-tokyo.ac.jp	
11 月	17(日) ~	2023 年度計算力学技術者(CAE 技術 者)資格認定事業			(一社)日本機械学会事業企画グループ 松田 matsuda@jsme.or.jp	
12 月	14(土)	24-76 第26回スターリングサイクル シンポジウム			(一社)日本機械学会エンジンシステム部門事務担当 渡邊 watanabe@jsme.or.jp	

公益社団法人日本伝熱学会第 62 期(2023 年度)総会議事録

- 1. 日時 2024年5月30日(木)16:00~16:30
- 2. 場所 神戸国際会議場 メインホール
- 3. 正会員数 1,000 名
- 4. 出席者 695 名(出席者 147 名、委任状出席 548 名)。定款第 30 条の定めるところにより、これは 定足数である正会員数の過半数(501 名)を上回り、総会は成立した。また、定款の改定 に必要な、正会員数の 2/3(667 名)も上回った。
- 5. 議事経過 定款第28条により平井秀一郎会長が議長となり、以下の議案について逐次審議した。
 - 第1号議案 第62期(2023年度)事業報告の件

議長より、公益社団法人日本伝熱学会第62期(2023年度)総会議案(以下、「総会議案」と呼ぶ) の第1号議案第62期(2023年度)事業報告について諮り、満場一致でこれを可決した。

第2号議案 第62期(2023年度)会務報告の件

議長より、総会議案の第2号議案第62期(2023年度)会務報告について諮り、満場一致でこれ を可決した。

第3号議案 第62期(2023年度)収支決算の件

議長より、総会議案の第3号議案第62期(2023年度)収支決算について諮り、満場一致ででこれを可決した。

第4号議案 第63期(2024年度)役員・協議員選出の件

議長より、総会議案の第4号議案第63期(2024年度)役員の選出について、以下の候補者について個々に諮った結果、満場一致でこれを可決した。

定款第17条第1項により退任する役員

理事	近藤 義広	理事	店橋	護
理事	植村 豪	理事	鹿野	一郎
理事	白樫 了	理事	芝原	正彦
理事	田之上 健一郎	理事	近藤	良夫
理事	矢嶌 健史	監事	井上	剛良

定款第17条第1項ただし書きにより退任する役員

代表理事(会長) 平井 秀一郎 理事(副会長) 鈴木 洋

第63期(2024年度)に新たに選任される役員

定款第17条第1項により選任される役員

理事	近藤 良夫	理事	店橋 護
理事	戸谷 剛	理事	足立 高弘
理事	大宮司 啓文	理事	齊藤 泰司
理事	井上 修平	理事	林 謙年
理事	大島 翼	監事	廣田 真史

定款第17条第1項ただし書きにより選任される役員

埋事 須賀 一彦 埋事	水井 _	二郎
-------------	------	----

第5号議案 定款の改定

議長より、総会議案の第5号議案定款の改定について諮り、満場一致でこれを可決した。

第6号議案 議事録署名人選任の件

議長より、本日の議事の経過を議事録にまとめるにあたり、議長に加えて議事録署名人2名を選 任したい旨の提案があり、協議の結果、鈴木洋氏、鈴木雄二氏の2名を選任し、満場一致でこれを 可決した。

第7号議案 第63期(2024年度)事業計画の件 議長より、総会議案の第7号議案第63期(2024年度)事業計画について報告を行った。

第8号議案 第63期(2024年度)収支予算の件 議長より、総会議案の第8号議案第63期(2024年度)収支予算について報告を行った。

以上により、本日の議事を終了した。

2024年5月30日

公益社団法人日本伝熱学会第62期(2023年度)総会

議長	平井	秀一郎	
議事録署名人	鈴木	洋	
議事録署名人	鈴木	雄二	

2024 年度日本伝熱学会 学術賞・技術賞・貢献賞・登鯉賞・奨励賞候補者推薦募集のお知らせ

日本伝熱学会では以下の各賞の表彰を実施します.つきましては、下記の要領に従って学術賞,技術賞, 貢献賞,登鯉賞および奨励賞の候補者推薦を募集します.自薦,他薦を問わず,多数ご応募下さい.なお, 昨年度から新たな分野を開拓し,顕著な業績を挙げた若手研究者を対象として,新たに**登鯉賞**を設けました. 是非ご応募ください.

1. 対象となる業績

- (1) 学術賞の対象は、原則として、最近3年間の Thermal Science and Engineering 誌または Journal of Thermal Science and Technology 誌に掲載された、あるいは、最近5回の日本伝熱シンポジウムにおいて発表され、国内外で審査のある学術論文集に掲載された伝熱に関する優秀な研究を主体的に行った研究者とその共同研究者とします. なお、受賞対象研究課題名は、必ずしも論文題目と厳密に一致する必要はありません.
- (2) 技術賞の対象は、公表された優秀な伝熱技術を開発した者とします.
- (3) 貢献賞の対象は、本学会が主催する事業の実施において、顕著な貢献を行った会員とします.
- (4) 登鯉賞の対象は、2025年4月1日において、39歳未満の若手研究者であり、独自に新たな分野を開 拓し、最近3年間の Thermal Science and Engineering 誌または Journal of Thermal Science and Technology 誌に掲載された、あるいは、最近5回の日本伝熱シンポジウムにおいて優秀な論文を発表した個人と します。
- (5) **奨励賞**の対象は,原則として,最近2回の日本伝熱シンポジウムにおいて優秀な論文を発表した若手 研究者で,発表時に大学院生,またはこれに準じる者(大学卒業後5年以内の者)とします.
- (6) 学術賞の対象者のうち少なくとも1名は本学会会員であることが必要です.また登鯉賞および奨励賞 の対象資格は本学会会員に限ります.
- (7) 贈賞数は、学術賞2件、技術賞1件、貢献賞2名、登鯉賞2名、奨励賞4名を目安とします.

2. 選考方法

- (1) 「学会賞に関する内規」に定める賞の内,上項に記載の各賞は,「表彰選考委員会」が「学会賞の 審査・選考方法内規」に基づいて選考します.
- (2) 表彰選考委員会は、公募の他に、各賞の候補を推薦することが出来るものとします.
- 3. 提出書類
- (1) 申請書・推薦書
 - ・ 申請書・推薦書の書式は、本学会ホームページからダウンロードしてご使用下さい.
 - ・ 学術賞,技術賞,貢献賞,登鯉賞,奨励賞それぞれに申請書・推薦書の書式が異なりますので, ご注意下さい.
- (2) 関連する日本伝熱シンポジウム講演論文または TSE/JTST 論文(学術賞,登鯉賞,奨励賞のみ)
- (3) 推薦/申請に係わる学術論文1編または技術内容参考資料(学術賞,登鯉賞,技術賞のみ)
- 4. 提出期限
 - 2024年12月13日(金)
- 5. 提出先および問い合わせ先
 - いずれの書類も PDF 化し, 下記電子メールアドレス宛にお送り下さい. 福井大学 工学系部門機械工学講座 永井 二郎 E-mail: nagai@u-fukui.ac.jp TEL 0776-27-8537 (〒910-8507 福井市文京 3-9-1)

日本伝熱学会 関西支部 主催

第18回関西伝熱セミナー「グリーントランスフォーメーションとエネルギー技術」

日本伝熱学会 関西支部では、2年に1度、宿泊付の「関西伝熱セミナー」を開催してまいりました.今回 は和歌山県和歌山市 休暇村紀州加太を会場として「グリーントランスフォーメーションとエネルギー技術」 と題し、下記の通り企画いたしました.講師には、エネルギーおよび環境技術におけるエキスパートの方々 をお招きし、話題提供していただきます. GX の今後の展開について、都会の喧騒を離れてゆっくりと議論 したいと考えておりますので、是非ご参加下さい.

- 開催日時 令和6年8月30日(金)13:00 ~ 31日(土)12:00
- 会場休暇村紀州加太和歌山県和歌山市深山 483(https://www.qkamura.or.jp/kada/)
- 参加定員 60名
- ホームページ http://www.htsj.or.jp/branch/kansai/seminar2024/
- 参加費 一般 30,000円(税込,意見交換会・宿泊込み), 一般(宿泊なし)18,000円(税込,意見交換会・宿泊含まず) 学生18,000円(税込,意見交換会・宿泊込み), 学生(宿泊なし)6,000円(税込,意見交換会・宿泊含まず)
- 支 払 方 法 銀行振込(振込口座をお知らせいたしますので,申込締切日までにご入金下さい.)
- 申 込 方 法 御氏名,御所属,参加種別(一般/学生・宿泊の有/無),連絡先(電話,メールアドレス) をご記載の上,下記宛に電子メールでお申し込みください.
- 申込・問合先 seminar2024@mech.kindai.ac.jp(第18回関西伝熱セミナー事務局 近畿大学 瀬尾健彦)
- 申込締切 8月6日(火)

プログラム

- 第1日目:8月30日(金)
- 13:10-14:10 【特別講演】「化石燃料の大量消費と環境問題を解決するための水素エネルギーキャリア戦略 -工業炉でのアンモニア直接燃焼利用-」
 - 赤松 史光 氏(大阪大学大学院 工学研究科)
- 14:20-15:05 「川崎重工業における燃焼排ガスおよび大気からの CO₂分離回収技術への取り組み」 沼口 遼平 氏(川崎重工業株式会社 技術開発本部 エネルギーシステム研究部)
- 15:05-15:50 「カーボンニュートラル達成に向けた大和ハウスグループのエネルギーマネジメント等 に関する取り組み」
 - 原田 真宏 氏 (大和ハウス工業株式会社 総合技術研究所)
- 16:00-16:45 「Power to Heat to Power および Power to Heat の実現に向けた高温蓄熱技術の開発」 能村 貴宏 氏(北海道大学大学院 工学研究院)
- 16:45-17:30 「家電における GX の取り組み」 米野 範幸 氏 (パナソニック株式会社 くらしアプライアンス社 GX 戦略室)
- 19:00-21:00 夕食・意見交換会

第2日目:8月31日(土)

- 7:00-8:30 朝食
- 9:00-9:45 「神戸製鋼グループにおけるカーボンニュートラルに向けた取組について」 朴 海洋 氏(株式会社神戸製鋼所 技術開発本部 機械研究所)
- 9:50-10:35 「圧電フィルムを用いた柔軟構造物の振動による風力からの微小電力環境発電」 西垣 勉 氏(近畿大学 生物理工学部)
- 10:40-11:25 「脱炭素社会を目指す BEV 技術を応用したマイクログリッド」
 - 芹澤 毅 氏(ダイハツ工業株式会社 くるま開発本部)
- 11:30-12:00 挨拶,集合写真

協賛:日本機械学会,日本機械学会関西支部,化学工学会エネルギー部会,化学工学会熱工学部会,日本冷 凍空調学会,日本混相流学会,日本熱物性学会,エネルギー・資源学会,日本太陽エネルギー学会,日本ヒ ートアイランド学会,空気調和・衛生工学会近畿支部,日本潜熱工学会



編集出版部会からのお知らせ 一各種行事・広告などの掲載について一



インターネットの普及により情報発信・交換能力の比類ない進展がもたらされました.一方,ハー ドコピーとしての学会誌には、アーカイブ的な価値のある内容を手にとって熟読できる点や、一連の ページを眺めて全貌が容易に理解できる点など、いくら電子媒体が発達してもかなわない長所がある のではないかと思います.ただし、学会誌の印刷・発送には多額の経費も伴いますので、当部会では このほど、密度のより高い誌面、すなわちハードコピーとしてぜひとも残すべき内容を厳選し、イン ターネット(HP:ホームページ,ML:メーリングリスト)で扱う情報との棲み分けをした編集方針 を検討いたしました.

この結果,これまで会告ページで取り扱ってきた各種行事・広告などの掲載につき,以下のような 方針で対応させていただきたく,ご理解とご協力をお願いする次第です.

対象	対 応	具体的な手続き (電子メールでの連絡を前提としています)
本会(支部)主 催による行事	無条件で詳細を,会誌と HPに掲載,MLでも配信	申込者は,記事を総務担当副会長補佐協議員(ML担当),広報委員会委員長(HP担当)あるいは編集出版部会長(会誌担当)へ送信してください.
関係学会や本会 会員が関係する 組織による 国内外の会議・ シンポジウム・ セミナー	条件付き掲載 会誌:1件当たり4分の1ペ ージ程度で掲載(無料) HP:行事カレンダーに掲載 しリンク形成(無料) ML:条件付き配信(無料)	申込者は,まず内容を説明する資料を総務担当副会長補佐 協議員に送信してください.審議の結果,掲載可となった 場合には総務担当副会長補佐協議員より申込者にその旨通 知しますので,申込者は記事を編集出版部会長(会誌担 当)と広報委員会委員長(HP担当)に送信してください.
大学や公的研 究機関の人事 公募(伝熱に 関係のある分 野に限る)	会誌:掲載せず HP:条件付き掲載 (無料) ML:条件付き配信 (無料)	申込者は、公募内容を説明する資料を総務担当副会長補佐 協議員に送信してください、審議の結果、掲載可となった 場合には総務担当副会長補佐協議員より申込者にその旨通 知しますので、申込者は記事を広報委員会委員長(HP 担 当)に送信してください.
一般広告 求人広告	会誌:条件付き掲載(有料) HP:条件付き掲載 (バナー広告のみ,有料)	申込者は,編集出版部会長(会誌担当)または広報委員会 委員長(HPバナー広告担当)に広告内容を送信してくださ い.掲載可となった場合には編集出版部会長または広報委 員会委員長より申込者にその旨通知しますので,申込者は 原稿を編集出版部会長または広報委員会委員長に送信して ください.掲載料支払い手続きについては事務局からご連 絡いたします.バナー広告の取り扱いについては http://www.htsj.or.jp/wp/media/36banner.pdfをご参照下さい.

【連絡先】

- ・総務部会長:大宮司 啓文(東京大学): daiguji@thml.t.u-tokyo.ac.jp
- ・編集出版部会長:佐々木 直栄(日本大学):sasaki.naoe@nihon-u.ac.jp
- ・広報委員会委員長:渡部 弘達(立命館大学):hirowtnb@fc.ritsumei.ac.jp
- ・総務担当副会長補佐協議員:李敏赫(東京大学):mlee@mesl.t.u-tokyo.ac.jp
- ·事務局:村松佳子:office@htsj.or.jp

【注意】

- ・原稿は Word ファイルまたは Text ファイルでお願いします.
- ・HP はメンテナンスの都合上,掲載は申込月の翌月,また削除も希望掲載期限の翌月程度の時間遅 れがあることをご了承願います.
- ・MLでは、原則としてテキスト文の送信となります.pdf等の添付ファイルで送信を希望される場合 はご相談ください.

A REAL PROPERTY AND IN THE OWNER OF THE OWNER 奈束セ 熱流束センサーは、熱エネルギーの移動密度(W/cm²)に比例した直流電圧を出力します。 弊社の製品は、大変手軽に高速・高精度で熱流量の測定をすることができます。 特に応答速度の早いこと、センサーからの出力レベルが高いことが特徴で、 熱流束マイクロセンサー(HFM)では、応答速度最高6マイクロ秒を達成しています。 熱流束 gSKIN® サーモゲージ マイクロセンサ・ 熱流束センサ 水冷却型 熱伝導 センサー本体の構造は、薄膜フォイル・ディスク 「gSKIN®」熱流束センサーはセンサー自身の 特徴 の中心と周囲の温度差を測定する、差動型熱 表面を通過する熱流束を29対の超高感度な 最高速の応答(約 6µ秒) 電対をとなっています。フォイル・ディスクはコンス 熱電対を用いて測定します。センサーは、 850℃まで外部冷却不要 タンタンで作られており、銅製の円柱形ヒートシン 72m²の広さを持ち、厚さは0.4mmです。レベル-0 ● 低雑音 / 高感度 クに取り付けられています。水冷式は取付け場 パッケージングの最適化ポリマーと1-レベルパ ● 熱流束と温度を測定 所の自由度が高く長時間の測定が可能です。 ッケージングの金属の構造になっています。 伝導、対流、輻射に等感度 使用例 使用例 使用例 焼却炉・溶鉱炉の熱量測定 電気・電子機器内の発熱・放熱状態測定 ● エンジン内壁の熱伝達状態観察 熱交換器の効率測定 ● ロケットエンジンのトラバース実験 ● 火災実験の際の輻射熱ゲージ ● タービンブレード熱風洞試験 ● バーナーなど熱源の校正用基準器 ● パイプの放熱状況測定 ● 自動車用エアーバッグ安全性試験 着火性・燃焼性試験(ISO5657,5658,5660) ● 暖房および換気自動システムの測定 ● ジェットエンジンバックファイヤー試験 ● 米国連邦航空局のファイヤー・スモークテスト 熱移動/熱放出の即時応答測定

熱流束センサー 校正サービス

熱流束センサーの校正作業をお引き受けいたします。校正証明書は米国基準局NISTにトレーサブルです。 校正設備の物理的な制約で、お引き受けできない場合もあります。ご相談ください。

センサテクノス株式会社

〒106-0031 東京都港区西麻布3-24-17 霞ビル4F TEL: 03-5785-2424 FAX: 03-5785-2323

E-mail info@senstech.jp





当社は、独自の高度技術を持つ、海外メーカーの熱計測機器をご提供致しております。

CAPTEC 社(フランス)

CAPTEC(キャプテック)社は、独自の高度技術により、低熱抵抗で高感度な熱流束センサーを開発・製造致しております。環境温度が変化して も感度は常に一定で、熱流束値に比例した電圧を高精度に出力します。

輻射センサーは、輻射熱のみを計測する画期的なセンサーです。特注形状も承っております。

熱流束センサー

サイズ: 5×5mm~300×300mm 厚み: 0.4mm (平面用・曲面用) 温度範囲: - 200∽200℃ 応答速度:約200ms オプション:温度計測用熱電対内蔵 形状: 正方形 長方形 円形 特注品: 高温用 高圧用 防水加工



輻射センサー

サイズ: 5×5mm∽50×50mm **厚み: 0.25mm** 温度範囲: - 200~250℃ 応答速度:約 50ms オプション:温度計測用熱電対内蔵 形状: 正方形 長方形 円形 波長領域:赤外/可視+赤外

MEDTHERM 社(アメリカ)

MEDTHERM(メドサーム)社は、これまで 30 年以上にわたり、高品質の熱流計及び超高速応答の熱電対を提供してまいりました。 航空宇宙・火災・燃焼分野における豊富な実績を有しています。用途に応じ、様々な形状・仕様の製品を製造可能です。



熱流計/輻射計

熱流束範囲: 0.2-4000Btu/ft²sec(フルスケール) サイズ: 1/16 インチ(約 1.6mm)~1 インチ(約 25.4mm) 最高温度: 200℃(水冷なし)/1500℃(水冷) 出力信号: 0-10mV(DC-線形出力) 直線性: ±2%(フルスケールに対して)

応答速度: 50ms 以下* 再現性: ±0.5% 較正精度: ±2% オプション: 輻射窓 視野角指定等 *応答速度は、熱流束レンジによって異なります。

超高速応答同軸熱電対

本同軸型熱電対は、第1熱電対のチューブの中に第2熱電対ワイヤーが挿入された同軸構造になっています。 第2熱電対ワイヤーは,厚み 0.0005 インチ(約 0.013mm)の特殊なセラミックで絶縁コーティングされています。 プローブ先端の熱電対接点は, 厚み 1〜2ミクロンの金属皮膜で真空蒸着されており, 最高1マイクロ秒の応答速度を実現しています。



【主な用途】 表面温度及び表面熱流束計測 風洞試験・エンジンシリンダー・エアコンプレッサー等

【最小プローブ径】 0.015 インチ(約 0.39mm)

【熱電対タイプ】 T型(銅/コンスタンタン) J 型(鉄/コンスタンタン) E型(クロメル/コンスタンタン) K型(クロメル/アルメル) S型(白金 10%ロジウム/白金) +200℃~+1700℃

水冷式 火炎強度熱流計

最高温度: 1900℃

【温度範囲】 - 270°C∽+400°C - 210°C∽+1200°C - 270°C∽+1000°C - 270°C∽+1372°C

|ITI 社(アメリカ)|

ITI (International Thermal Instrument Company)社は、1969年の設立以来、高温用熱流板や火炎強度熱流計など、特殊な用途に対応 した製品を提供しています。特注品の設計・製造も承っております。

高温用熱流板

当社取扱製品の適用分野

■温熱環境

■火災



■伝熱一般

■航空宇宙

■各種エンジン

最高温度: 980℃ 応答速度: 0.1s 直径: 8mm~25.5mm 厚み: 2.5mm

■炉 ボイラー

■燃焼

応答速度: 0.1s 最大熱流束レンジ: 0〜3000W/cm²

有限会社 テクノオフィス

〒225-0011 神奈川県横浜市青葉区あざみ野 3-20-8-B TEL 045-901-9861 FAX 045-901-9522 URL: http://www.techno-office.com

本広告に掲載されている内容は2010年9月現在のもので、製品の仕様は予告なく変更される場合があります。
編集出版部会ノート

Note from the JHTSJ Editorial Board

本号では、志賀拓麿先生(産業技術総合研究所)にお願いして、特集「熱輸送のスペクト ル学的理解」を組んでいただきました。熱制御に関する研究の中から、「スペクトル学的理 解」に関わる研究トピック4件をご寄稿いただきました。ご多用中にも関わらずご寄稿下さ りました皆様に厚くお礼申し上げます。

さて、日本伝熱学会第 63 期の編集出版部会は、下記の方々と協力して、会誌「伝熱」の 編集出版業務を進めてまいります.何卒よろしくお願いいたします.今期より編集出版担当 副会長を務められる永井二郎先生(福井大学)から編集出版部会長を引き継いで1年が経ち ました.永井先生ご提案の幹事導入によりダブルチェック体制が整い、大過なく1年を終え られたことに感謝いたします.幹事を務められた田中三郎先生(日本大学)をはじめ、62 期 で委員任期を終えられた田之上健一郎先生(山口大学)、矢嶌健史先生(東京電力)、小川邦 康先生(慶應義塾大学)、櫻井篤先生(新潟大学)および志賀拓磨先生(産業技術総合研究 所)に深く感謝申し上げます.

> 佐々木 直栄(日本大学) Naoe SASAKI (Nihon University) e-mail: sasaki.naoe@nihon-u.ac.jp

企画・編集出版担当副会長永井二郎(福井大学)編集出版部会長佐々木直栄(日本大学)

委員

(理事) 齊藤 泰司 (京都大学)

(協議員) 大西 元(金沢大学),岡部 孝裕(弘前大学),柏木 誠(早稲田大学),小糸 康志(熊本大学),仮屋 圭史(佐賀大学),古川 琢磨(八戸工業高等専門学校),地下 大輔(東京海洋大学)

TSE チーフエディター	鈴木 雄二 (東京大学)
TSE 編集幹事	李 敏赫(東京大学)
編集出版部会 連絡先:	〒963-8642 福島県郡山市田村町徳定字中河原1番地
	日本大学 工学部機械工学科
	佐々木 直栄
	Phone: 024-956-8695
	E-mail: sasaki.naoe@nihon-u.ac.jp